

日本の国際協力を、あなた自身の目で見て、伝えてください。

国際協力レポーター

2012

報告書

ウガンダ
check

スリランカ
check

国際協力の
現場を、
あなたに
公開します。

JICA LIBRARY



1215295 [5]

スリランカ
check

ウガンダ
check

ウガンダ スリランカ

主催：独立行政法人国際協力機構（JICA） 後援：外務省

目 次

■ 国際協力レポーター2012とは？	02	
ウガンダ		
■ 派遣国基礎情報	04	
■ 視察日程	05	
■ 視察先情報	06	
■ 全体報告		
安達 紗奈美 (大阪府 団体職員)	国際協力を通じて、ともに働く仲間に	08
今村 沙織 (埼玉県 教員)	これからの国際協力～困った時は、お互い様～	10
内尾 晶子 (福岡県 学生)	日本の国際協力は素晴らしい!!	12
金古 浩美 (東京都 学生)	目を向けなければ見ることのできない世界に目を向ける ～ウガンダ共和国視察を通しての考察～	14
柴山 葉奈 (大阪府 学生)	日本から支援するということ	16
高橋 篤子 (山梨県 主婦)	見る・聞く・感じる in UGANDA	18
永原 実 (島根県 学生)	よりよい世界を作るために	20
畠山 佑介 (東京都)	身近なものとして捉え直すべき国際協力活動及びODA	22
原田 美緒 (東京都 学生)	本当の開発とは	24
安元 久美子 (神奈川県 学生)	ウガンダでの気づき、帰国後の気づき	26
大塚 泰法 (グローバル教育コンクール2011 受賞者ウガンダ青年海外協力隊)	国際協力レポーターの視察を通じて	28
■ 視察先別報告	30	
スリランカ		
■ 派遣国基礎情報	48	
■ 視察日程	49	
■ 視察先情報	50	
■ 全体報告		
坂田 有輝 (石川県 学生)	ODAで築く信頼関係	52
佐藤 眞梨 (神奈川県 学生)	世界の中で今を生きる	54
高野 文 (富山県)	人づくりから始まる国づくり	56
武原 智明 (広島県 教員)	伝えることで変える ～国際協力 吾 知ることあらんかから始まった スリランカ視察～	58
千葉 真美 (宮城県)	地球人であることの任務	60
中島 杏子 (北海道 学生)	イメージの外	62
林 真理 (東京都 主婦)	「真の国際協力」のあり方 ～「知る」ことから始まる。日本人としての「誇り」を感じる国へ～	64
安井 美貴子 (神奈川県 学生)	人間同士の協力関係	66
山口 佳奈子 (長崎県 会社員)	日本の国際協力～知ること・知ろうとすることの重要性～	68
荒尾 敏雄 (グローバル教育コンクール2011 受賞者カタル 教員)	国際協力は人づくり～一人の意識が国をも世界をも変える～	70
■ 視察先別報告	72	
■ JICA事業紹介	86	
■ 用語・略語集	88	

「国際協カレポーター2012」とは？

目 的

日本のODAは、これまで180を超える国と地域に対し実施され、日本の国際社会に対する貢献の重要な柱の一つになっています。その一方で、ODAはその実施現場のほとんどが開発途上国であるために、事業の実態や成果、これに携わる関係者の姿が、関係者以外の一般の方々には見えにくいという面があります。国民の皆様からは、日本の援助が援助を受ける国にとって本当に役に立っているのだろうか、援助が感謝されているのか、日本の経済状態が良くない中で海外に援助する必要があるのか、という声も聞かれます。

そこで日本のODAを支えている国民の皆様へ、ご自身の目で海外の国際協力の現場を直接視察していただき、その様子を意見や感想として報告いただき、国際協カレポーター事業を平成23年度から実施しています。

事業概要

平成24年度は、ウガンダとスリランカを訪問国とし、全国各地から募集した計19名の発信力のある方々を「国際協カレポーター」として派遣しました。視察プログラムには、国際協力事業関係者との意見交換や現地住民との交流を組み込み、一方的な視察に留まらないプログラムにいたしました。

「国際協カレポーター」の皆さんには、帰国後、現地滞在を通じて「感じたこと」や「考えたこと」等を広く発信していただくことを目的に、ホームページに海外派遣報告書を掲載する他、国内各地で開催される国際協カイベント等への出演協力を得ています。

応募資格

平成24年度については、以下の条件に基づいて全国各地から応募いただいた約500名の方を対象に、国際協カクイズの解答、「応募動機・帰国後のレポート活動計画書」の審査を行った後、最終的に抽選で国際協カレポーターの方を選びました。

1. 日本に在住し、日本国籍を有する満18才以上の健康な方(平成24年5月28日現在)
2. 「国際協カレポーター」事業の趣旨・目的を十分ご理解のうえ、事業運営にご協力いただける方
3. 健康上支障がなく、開発途上国における国際協力事業現場視察の全日程に参加でき、事前説明会と4.の帰国報告活動に参加できる方。
4. 帰国後、国内各地で開催される国際協力関連行事(例えばグローバルフェスタJAPANのような国際協力関連イベント等)のステージに登壇して、派遣国での体験や見聞を広報していただく等、積極的に報告していただける方。

※以下に該当する方は応募をご遠慮いただきました。

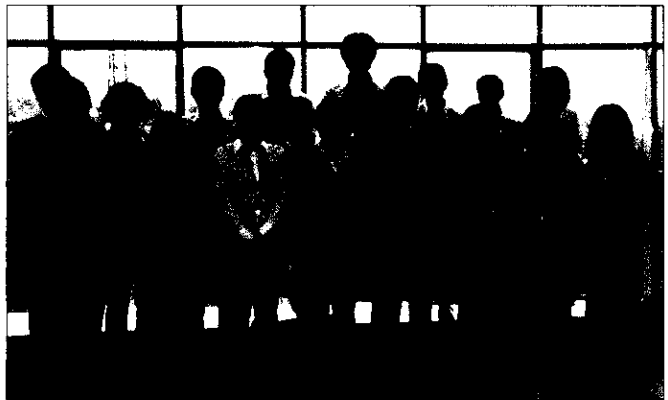
過去にODA民間モニターに参加された方。JICAボランティア、JICA専門家、JICA教師海外研修、JBIC円借入パートナーシップセミナー、JICAパートナーシップセミナー等により派遣された経験のある方、及び在外公館・JICA在外事務所勤務経験のある方など、過去にODA関連の公職、その他政府関連のODA事業に携わったことのある方。

※平成23年度に実施された「グローバル教育コンクール2011」の国際協カ機構理事長賞受賞者2名が副賞としてそれぞれウガンダ・スリランカへの視察に参加しました。

「国際協力レポーター2012」参加者

■ ウガンダ派遣

安達 紗奈美	大阪府	団体職員
今村 沙織	埼玉県	教員
内尾 晶子	福岡県	学生
金古 浩美	東京都	学生
柴山 葉奈	大阪府	学生
高橋 篤子	山梨県	主婦
永原 実	島根県	学生
島山 佑介	東京都	
原田 美緒	東京都	学生
安元 久美子	神奈川県	学生
大塚 泰法※	ウガンダ	青年海外協力隊



※グローバル教育コンクール2011「写真・映像」部門JICA理事長賞受賞者

■ スリランカ派遣

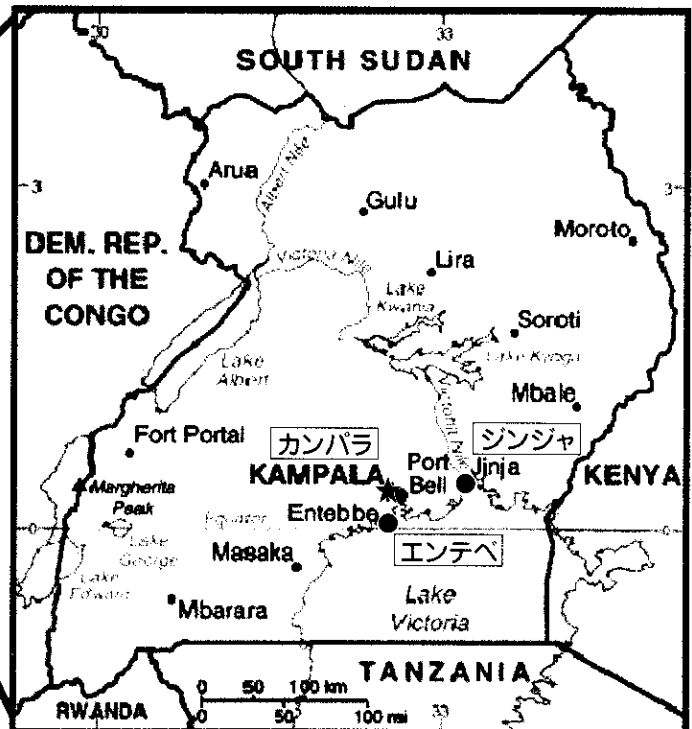
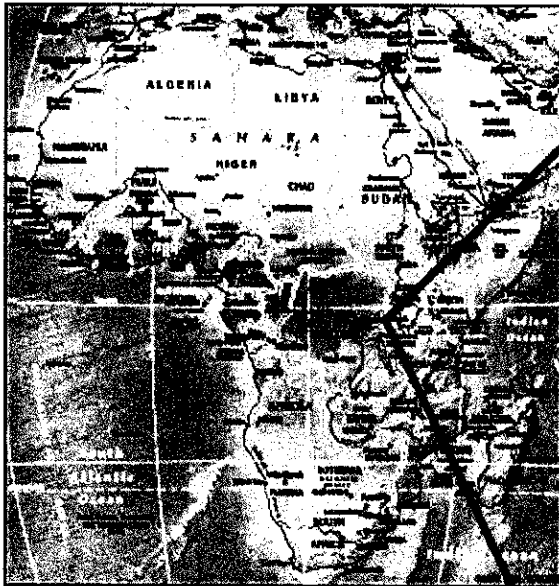
坂田 有輝	石川県	学生
佐藤 眞梨	神奈川県	学生
高野 文	富山県	
武原 智明	広島県	教員
千葉 真美	宮城県	
中島 杏子	北海道	学生
林 真理	東京都	主婦
安井 美貴子	神奈川県	学生
山口 佳奈子	長崎県	会社員
荒尾 敏雄※	カタール	教員



※グローバル教育コンクール2011「国際協力レポート」部門JICA理事長賞受賞者

派遣国基礎情報(ウガンダ)

- (1) 正式名称 (和文)ウガンダ共和国
(英文)Republic of Uganda
- (2) 政体 共和制
- (3) 首都 カンバラ
- (4) 面積 24.1万平方キロメートル
- (5) 人口 3,270万人(2009年;世銀)
- (6) 民族 バガンダ族、ランゴ族、アチョリ族等
- (7) 言語 公用語(英語、スワヒリ語)、国語(ルガンダ語)
- (8) 宗教 キリスト教(60%)、伝統宗教(30%)、イスラム教(10%)
- (9) 略史 1962年旧宗主国英国から、英連邦王国の一員として独立し、翌年共和制に移行。1971年から軍司令官アミンがクーデターにより政権を握り、独裁政治が敷かれた。1978年のウガンダ・タンザニア戦争においてタンザニアに侵攻したが、逆に首都カンバラまで攻め込まれる。度重なるクーデターや大統領の失脚を経て、1986年にムセベニ大統領が就任、2012年現在も政権を握っている。
- (10) 政治 国家元首は大統領(直接選挙制・任期5年)。首相・閣僚任免権などの権力が保障されている。ウガンダは共和制だが、国内に伝統的な地方王国が存在している。各王国の国王は政治的な力を持たず、文化的指導者として儀礼的な存在である。
- (11) 気候 赤道直下に位置するものの、一般的に過ごしやすい。首都カンバラの年平均気温は摂氏22度程度である。
- (12) 通貨 ウガンダ・シリング(U.shs)



視察日程

派遣国:ウガンダ

ウ
ガ
ン
ダ

	月 日	曜日	時間	内 容	場 所
1日目	8月18日	土		✈ 成田→ドバイ	
2日目	8月19日	日		✈ ドバイ→カンバラ	カンバラ
3日目	8月20日	月	午前	【ブリーフィング】JICA事務所	カンバラ
			午後	【草の根無償】NGOあしながウガンダ	
4日目	8月21日	火	午前	【技プロ・無償】ナカワ職業訓練校	トロロ
			午後	【無償】トロロ病院	
5日目	8月22日	水	午前	トロロ→マナファ	ジンジャ
			午後	【草の根無償・青年海外協力隊】ブワヤ村	
6日目	8月23日	木	午後	マナファ→ジンジャ	カンバラ
			午後	【有償】ブジャガリ送電網整備事業	
7日目	8月24日	金	午前	ジンジャ→カンバラ	カンバラ
			午後	【BOP連携・青年海外協力隊】エンテベ病院	
8日目	8月25日	土	午後	【草の根技協・青年海外協力隊】エンテベ動物園	カンバラ
			午後	【表敬・報告】日本大使館	
9日目	8月26日	日		【報告】JICAウガンダ事務所	
8日目	8月25日	土		✈ カンバラ→ドバイ	
9日目	8月26日	日		✈ ドバイ→成田	

*草の根無償：草の根・人間の安全保障無償資金協力／技プロ：技術協力プロジェクト／有償：有償資金協力 草の根技協：草の根技術協力事業 これらの用語の説明は88頁に記載

ウガンダ視察先情報

◆あしながウガンダ

■【国際NGO】あしながウガンダ

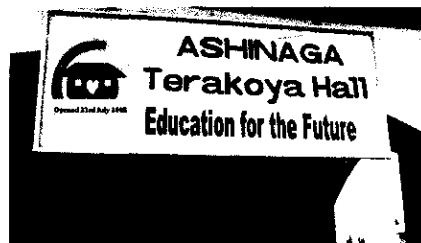
- 設 立 : 2001年
- 活 動 内 容 : HIV/AIDSで親を亡くした遺児に対する心理社会的支援、教育支援の提供。

<http://ashinagauganda.cocolog-nifty.com/>



■【草の根・人間の安全保障無償資金協力】エイズ孤児のための識字教育ホール建設計画

- 贈与契約締結 : 平成19年12月
- 供与限度額 : 7.48百万円
- 被供与団体 : あしながウガンダ
- 事業内容 : HIV/AIDSで親をなくした遺児に対し、読み書き・算数などの基礎教育を行うための施設「寺子屋教室」の建設。



◆【技術協力プロジェクト】コメ振興プロジェクト

- 協力期間 : 2011年10月～2016年9月
- 協力金額 : 9億
- 実施機関 : 農業畜産水産省
- 事業内容 : コメの生産量の増加と質の向上により、農家の所得向上を図る。



◆ナカワ職業訓練校

■【技術協力プロジェクト】ウガンダ国職業訓練指導員要請プロジェクト

- 協力期間 : 2007年6月～2010年8月
- 協力金額 : 2.9億円
- 実施機関 : 教育スポーツ省、ナカワ職業訓練校
- 事業内容 : 職業訓練校の指導員・管理者向けの資格整備のためのコンセプト策定、訓練体制の確立を図る。

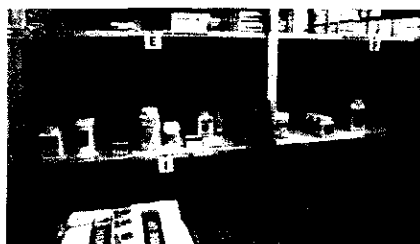


◆トロロ病院

■【無償資金協力】東部ウガンダ医療施設改善計画(第1期)、(第2期)

- 交換公文署名 : 第1期2005年8月、第2期2006年7月
- 供与限度額 : 第1期7.96億円、第2期8.73億円
- 対象地域 : ウガンダ東部4県(ムバレ県、トロロ県、ブギリ県、ブシア県)の医療施設
- 事業内容 : 病院施設建設と機材供与

<http://www.jica.go.jp/oda/project/0605000/index.html>
<http://www.jica.go.jp/oda/project/0509600/index.html>



◆ブワヤ村

■【青年海外協力隊】村落開発普及員活動現場視察

- 活 動 先：最貧困削減基金(ローカルNGO)
- 職 種：村落開発普及員
- 活 動 内 容：地域村落コミュニティの活性化を目指しているNGOにおいて、スタッフと共に女性グループに対し現金収入を得るための野菜作り指導を実施。



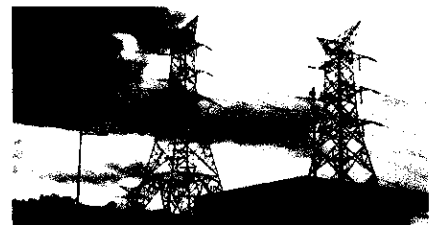
■【草の根・人間の安全保障無償資金協力】マナファ県における安全な水へのアクセス改善計画

- 贈与契約締結：2011年7月13日
- 供与限度額：6,418,413円
- 被供与団体：最貧困削減基金(ローカルNGO)
- 事業内容：マナファ県ブチル郡の11コミュニティにおいて重力式水道を建設し、住民約4,600名の安全な水へのアクセスを改善する。



◆【有償資金協力】ブジャガリ送電網整備事業

- 借款契約締結：2007年10月
- 借款契約額：34.84億円
- 借入人：ウガンダ共和国政府
- 実施機関：ウガンダ送電会社
- 事業内容：ブジャガリ水力発電所を同国電力系統に接続するための送電網及び変電所の整備。



◆【民間企業】フェニックス・ロジスティクス社

- 本 社：ウガンダ共和国カンバラ市
- 設 立：2000年
- 代 表 者：柏田雄一社長
- 事業内容：綿製品の製造(紡績・生地・染色・加工・縫製)、販売



◆エンテベ病院

■【BOPビジネス連携促進】感染症予防を目的とした新式アルコール消毒剤事業準備調査

- 実施法人：サラヤ株式会社
- 調査開始：2012年1月
- 対象機関：エンテベ病院、ゴンベ病院
- 調査内容：「アルコール手指消毒剤」本格導入に向け、受容性の調査と啓発活動を実施。



◆エンテベ動物園

■【草の根技術協力(地域提案型)】ウガンダ野生生物保全事業 Phase1、Phase2

- 協力期間：Phase1 2008年7月～2010年12月
Phase2 2011年8月～2014年3月
- 事業費：Phase1 13.5百万円
Phase2 17百万円
- 事業内容：ウガンダ野生生物教育センターにおける野生動物保全活動に関する技術水準の向上と環境教育活動の充実を図る。
- 実施団体：横浜市環境創造局、財団法人横浜市緑の協会
- 実施機関：ウガンダ野生生物教育センター(UWEC)



国際協力を通じて、ともに働く仲間に

安達 紗奈美(大阪府 団体職員)

● 国際協力活動について、海外派遣前に抱いていた印象

1) ODAって具体的に何をして、どんな効果があるのか?

・国際協力や開発援助について国内でよく耳にするのは「金額」であり、「内容」を見たり聞いたりする機会が少なく、実際の開発援助の現場やそこで暮らす人々の生活や暮らしが見えない。

2) 今、本当に必要なのか?

・日本が抱える多額の借金、自然災害や東日本大震災で被災された多くの方々などの現状があるのに、他国に対して多額の援助ができる状況なのだろうか?

3) 見えていない側面があるのでは?

・東日本大震災で多くの途上国から物的、金銭的支援が送られたことが報道されていた。日本からは見えていない、知らない間に国家間の関係性が築かれている?

● 視察を通じて学んだこと／国際協力活動についての視察後の考え

1) 国際協力の多様性

今回の5日間の視察を通じて、現地で働く方々の指導や援助、現場で一緒に活動する日本人と現地の人々とのかかわり方を見て一言に国際協力、開発援助といってもいろいろな形態や方法があり、それぞれに適した形での支援がなされていることを知った。

2) 国際協力という言葉の意味

視察の中で特に印象的だったのは、現地のJICA事務所の方が言われた「国際協力はともに働くこと」という言葉だ。

ともに働く仲間は、青年海外協力隊員、シニアボランティア、NGOスタッフとして現地にいる人だけではなく、広い意味では納税という形でその活動を支援している日本国民全員と捉えることができるのではないだろうかと考えられるようになった。

3) 国際協力活動の継続性

一時的な支援ではなく長年にわたる協力活動により、支援先の人々の習慣として染み付き成果が現れる。

たとえば、数箇所の視察先で見た「5S」活動。きれいに整理整頓されていた。5Sが重要であることを理解し、しつけによって行動に反映されている。これは短期ではなく長期の活動の成果だと感じた。長期の活動によって、支援する側、される側のあいだに信頼関係ができていた。

4) 視察で印象深かった案件

ウガンダに製糸、織布編立、プリント、刺繍、縫製、と一貫して生産できる工場を建てた柏田社長。中国に負けない付加価値(オーガニック)と品質で頑張る姿。ウガンダの人の手でウガンダ国内と海外に高品質なものを届ける、という熱い想いに感銘を受けた。

50年前に柏田さんが営業マンとしてアフリカにシャツを売りに行くときに「裸の人の国にシャツが売れるか」と言われていた。日本人のアフリカに対するイメージは50年後の今でも大きく変わっていないのではないかとそのイメージゆえに日本企業がなかなか進出してこない歯がゆさがあった。



綿花の種を取り除く作業中(フェニックスロジスティクス社)



緑の大地

● 日本の皆さんへのメッセージ

1) 興味をもつことから

派遣前、ウガンダがアフリカのどこに位置するのか、どんな国で、どんな支援を行っているのか、私自身全く知らなかった。今回派遣されることが決まり、そのことを数名の友人に話した後に「ウガンダがどこにあるのか調べた」「ナイル川の源流の湖があるんだね」と何人かに言われた。始まりは興味を持つこと、そして知ることから。視察案件の事前学習を通じて、知れば知るほどアフリカ、ウガンダへの興味が高まり、実際の視察で現場を見ることで理解が深まった。支援、協力活動のあり方や方法、どんな分野の支援が行われているのかを知るだけでもその国の背景、抱える問題が見えてくる。

国際協力は、税金を通じて日本国民全員で行っているという意識を持ち、どんな国に税金が投じられてどのような支援や協力活動がなされているのか、支援する者の一人として、高い関心を持つところから始まる。

また、国交や国家間の関係の維持・構築の側面も持つ協力活動が今後どのような地域や国に対して行われるのか、といった視点で国際協力について注視するのもおもしろいかもしれない。

今回の視察を通じて、ウガンダという国で自分の肌で感じ、直接見て学んだこと、そこで情熱を持って献身的に技術指導を行う日本人と懸命に学ぶウガンダ人について、かつての自分のようにODAについて知らない人に対し積極的に発信し続けていきたい。

ODAの現場を自分の目で見られるこのような貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。



水汲みに行く子供たち



歓迎の歌とダンス(あしながウガンダ)

これからの国際協力 ~困った時は、お互い様~

今村 沙織(埼玉県 教員)

自然に恵まれ、笑顔があふれる国、ウガンダに渡った。今、アフリカは世界から大きな市場として注目されている。これからの人口増加や食糧問題などさまざまな問題が予想される中で、10億人という世界人口の約15%を占めるアフリカは、今までのような遠い国のアフリカというイメージではなく、経済においても見過ごせない存在になろうとしている。近年、欧米諸国を中心に、中国や韓国なども支援を投資しているが、現地の人が援助を受けることが当たり前になってしまうのではないかと、現地では本当は必要のない支援をしているのではないかという疑問を抱いていた。また、日本国内では東日本大震災の復興段階にあるにも関わらず、他国にODAを行う意義とは何かを探る視察となった。

実際に現場に行くと、自分の抱いていたイメージではなく、豊かな自然に囲まれながら暮らすウガンダの人々がいた。知恵を合わせ、生きる術を見つけ暮らす彼らを見た。しかし、彼らの命が危険にさらされているということも事実だ。私は、この視察を通して、現地ではまだまだ支援が必要であることと、今後の開発援助のあり方とは互いに助け合い学び合いながら前進していく姿勢が重要であるという自分なりの答えを見つけた。エンテベ病院のドクターが言った言葉が忘れられない。「私たちはご支援頂きながら、「知恵」を使うのです。」次の支援に依存するのではなく、自分たちで何とか解決していこうとする姿勢が見られた。必要なものを一から支援するよりも、現地の人と共に既存のものから生み出していくことの方が大切であり、継続する上でも無駄がない。自助努力を促進することこそが、これから目指すべき国際協力のあり方であると私は感動した。

日本のODA活動は、ただ支援することを良いとするのではなく、現地の人が自ら取り組めるように心がけた活動を行っている。以下に医療と農業の分野の事例を3つ紹介したい。

● BOPビジネス事業

まず始めに注目したい取り組みが、サラヤ社(日本の消毒液メーカー)のBOPビジネス事業である。

HIV、マラリアなど感染症が深刻なウガンダでは、衛生面に配慮することが先決であり、院内感染も予防すべき問題だ。感染予防としてUNICEFを中心に100万人の手洗いプロジェクトとして積極的に行われているが、蛇口をひねっても水が出てくる場所は多くない。そこで、サラヤ社は試験的にエンテベ病院に消毒液を導入した。水を使わず、殺菌消毒ができるので、現地の実情に合わせた支援であると評価できる。また、サラヤは消毒液導入後に定着率が上がらない理由を調査し、消毒液を使用することで染み付く匂いが、手で食事をするウガンダ人に敬遠される原因となっていることを突き止めた。匂いを抑えるよう改善し、さらに原料に廃糖蜜を使用し現地生産することで、雇用の機会を生む計画だ。このように、支援後のケアは、支援する側にとって責務であり、事業が継続するように繊細に扱わなくてはならない。どんないいものであっても、現地に根付いた活動でなければ意味がない。雇用が生まれ、経済と結びつくことで新しい仕組みを作り、現地の人々の生活を変えるチャンスになる。医師は、ひとりひとり患者を診察する度に、消毒液を使っているという。病院が清潔であり、救われるべき命が救われるために。

● 日本ならではの技術協力と無償資金協力

日本ならではの高い技術力と日本人ならではの細かな配慮は他国に劣ることがない強みである。その事例として病院や現地の企業で5S活動が盛んに取り組まれていることを挙げたい。

5Sとは、「整理・整頓・清掃・清潔・躰」の頭文字からきている。病院においては院内感染を防ぎ、衛生状態を保持することに寄与する。

以前、病院は薬品が散乱し、伝染する可能性のある注射針や患者のファイルが床に散乱していたが、日本の国際協力活動の指導によって、ゴミは伝染性の高いものとそうでないものを分別し、薬の使用期限が近いものがひと目で分かるようにシールで色分けして置くように徹底した。青年海外協力隊の看護師隊員のサポートのもと、トロロ病院の医師や看護師によって現在でも継続して5S活動が行われているということは、ウガンダ人がその必要性を理解し、自分たちで進んで行っているからだ。自助努力を重要視した支援の成功事例であると言える。

● 日本の強みを生かした技術協力と無償資金協力

日本が得意とする農業では、アフリカ稲とアジア稲を掛け合わせたネリカ米の普及を行っている。ネリカ米には陸稲も水稲もあり、時期を問わずに始められるので、8割が農業に従事しているウガンダ人にとって導入しやすい。主食とするトウモロコシの3倍の価格のお米は現金収入になるため貧困削減に直接つながり、今後の人口増加で食糧危機が予想されるアフリカで有効である。「まだ各家庭には普及していないが、今後若者の食生活の変化が起こると予測しており、需要が伸びる可能性が大いにある。」と、ネリカ米の普及に情熱を注ぐ坪井さんは言う。100年後のウガンダの人々が自分たちで生きていくために、今がある。まずは、農家の方に試しに1キロ持って帰ってもらう。初めての稲作で成功するのは難しいが、失敗を重ねて、お米の育て方を学ぶことが重要なのであり、農家の人たちの成長を待ち続けている。長い年月がかかっても、有効な手段であり、どのように現地の人々に広められるかが今後の課題となる。

これら医療分野(5S活動)や農業以外の教育、インフラ分野においても、ソフト面の支援を重視する日本の国際協力の特徴が見えた。また、現地の人々が日本人の熱意を受けて、自分たちも頑張ろうとする波及効果があった。支援をただ受けるだけでは、何も変わらない。自分たちでそこから学ぼうとする機会を得ることが大切だ。

ODAは本当に必要なのか、現地の人々だけで何とかできないのかと何度も自問自答した。発展することで昔ながらの風習を失いかねず、必ずしも幸せになるとは限らない。しかし、仮に農業や医療を重点的に行う日本の支援が無かった場合、命の危険性と隣り合わせであることと、国の不安定な状態が容易に想像できることを考えると、日本のODAによる活動がウガンダの人々の暮らしに貢献し、平和な国づくりの土台となっていることが分かる。

内発的発展のために必要なことは自助努力の促進であることも忘れてはならない。互いに助け合い、学び合いながら前進していく姿勢を持つこと、つまり開発援助ではなく、国際協力という姿勢が必要なのである。マザーテレサは、愛の反対は無関心であると言った。私たちは世界から恩恵を受けて生活していることを忘れてはならない。困った時はお互い様。世界は国境を越えて文化や宗教を超えてつながっている。ODAは日本という看板を背負うことで、国益があってこそその外交政策が行われるが、その国益のもとになっているのは、継続したつながりなのではないだろうか。今後、ウガンダとフレンドシップを深めていくことで、国益という枠を超えた価値を見出していくものだと思いに答えを見つけた。

私の役割は、国際協力の現場を見て、世界で起きている現実を、次の世代を生きる若者に伝えることだ。それによって、人口増加、食糧危機、環境問題などさまざまな問題が今よりも複雑化するだろう国際社会において、答えが一つではない問題に突き当たった時、彼らが生き抜く知恵になるはずだから。アフリカで出会ったネリカ米を普及した坪井さんと、ウガンダの良質なコットンで国の発展を支え、「ウガンダの父」と呼ばれたフェニックス社の柏田社長が若者に伝えたいメッセージは“Never Give Up!!”どんなことがあっても自分の直感を信じてあきらめずに突き進め。そしてもう一つは“心をこめて”。その言葉に、ウガンダ人の笑顔の秘密が隠されている気がした。



元気に授業を受ける子どもたち(あしながウガンダ)



知恵をもって国際協力。エンテベ病院のドクターたち

日本の国際協力は素晴らしい!!

内尾 晶子(福岡県 学生)

● 国際協力活動やODAについて、海外派遣前に抱いていた印象や考え

国際協力レポーターになる以前から青年海外協力隊OB/OGの方々にお話を伺う機会があった。だから、国際協力活動やODAは現地の人と共に生活し、現地に合う形で専門知識や技術を教えるという印象だった。また、以前ウガンダ大使にお会いした際、ウガンダに派遣される青年海外協力隊の数は世界一であり、日本の国際協力を心から感謝しているとのコメントを頂いたので、今回のウガンダ派遣前には日本の国際協力はとても必要とされているという印象を持っていた。

● 特に印象に残った案件

私たちは有償資金協力、無償資金協力、青年海外協力隊や専門家の活動など10件の案件を視察した。その中で印象に残った案件を2つ紹介したい。

まず、有償資金協力として行われているブジャガリ送電網だ。有償資金協力は数十～数百億の規模で行われる支援で、無償で支援するわけではなく支援国の政府に貸し付け何十年もかけて返済されるものだ。ブジャガリ送電網も約35億円を日本政府がウガンダ政府に貸し付け、40年かけて返す予定である。私のODAのイメージは、先ほども書いた通り青年海外協力隊だったので、このような国と国との支援についてはまったく知らなかったが、有償資金協力もウガンダを今よりも良くするためには必要な支援だと感じた。ウガンダ政府は今、電気に最も力を入れている。電気の供給が安定して行えると海外の企業を誘致しやすくなり、国の発展にも繋がるからである。しかし今のウガンダには水力発電所を作る技術を持った人もいない上に資金もないので、日本の有償資金協力の資金を使い、外国の会社に建設や運営を頼む。その下で従業員としてウガンダ人が働き、技術を身につける。日本がこの案件で行っていることは資金協力と案件が順調に進んでいるかの監督のみだが、間接的に多くの人々の生活を救うことになっている必要な援助だと考える。



ブジャガリ送電網



ブワヤ村の水タンク



重たいジェリカン(ブワヤ村)

次にブワヤ村の水タンクと、同じくブワヤ村に派遣されている青年海外協力隊員の活動だ。ブワヤ村はケニアの国境近くの自然溢れる村で、首都のカンパラから車で約5時間かかる田舎である。この村では無償資金協力で作った8000Lの水タンクが大活躍していた。この村の近くの川は汚く、井戸しか無かったのでこの水タンクが完成する以前は女性と子どもがジェリカンという入れ物に20Lの水を入れて毎日2～3時間かけて井戸から運んでいた。水タンクが完成し、水場が5カ所に設置されたことで女性と子どもの仕事が減り学校に通うことができるようになったと聞く。20Lのジェリカンを15歳の女の子が頭の上に抱えて水場から運んでいたのだが、それを私は持つことすらできなかった。これを最近まで2～3時間も持っていたなんてとても信じられなかった。そして、この水タンクが必要だということにも納得できた。また、この村に派遣されている青年海外協力隊の方は女性の収入向上支援を現地のNGOの方と協力して行い、また野菜栽培指導など様々なことをされていた。彼女と道を歩いていると沢山の方に名前を呼ばれて声をかけられ、村の方々からとても信頼されていることを感じた。青年海外協力隊の方からお話を伺う機会があったが、こんなに信頼され必要とされ、こんなにも多くの活動をすることができるとは想像以上で感動した。



トロロのトロロロック

● 国際協力活動やODAについての帰国後の考え

帰国後も派遣以前と同じく、日本の国際協力は必要であると感じた。視察した案件のどこでも日本のことが感謝されており、私たちは温かく迎えられた。具体的な内容は左記の通りである。しかし、ウガンダの視察で日本の国際協力の課題も感じた。1つは企業の誘致があまり行っていないことである。ウガンダは欧米からは投資の国として捉えられているが、日本からするとまだまだアフリカ=支援される地域ではない。企業がウガンダに進出できるような仕組みを既に日本も作っているが、まだ十分ではなく、改善点があるように感じた。

また、課題というより今回の視察で新たな疑問が生まれた。それは「発展はウガンダにとってどれほど必要であるのか」というものだ。もち

ろん栄養失調の子どもが1人もいなくなること等、人として最低の生活をする事ができるレベルまで国際協力をする必要はあると考える。しかし、ウガンダの文化や豊かな自然はそのまま残ってほしいとも考える。例えば、視察中トロロという地域を訪れた際、大きな星空を見た。とても綺麗で、天の川まで見ることができた。私は日本の中では田舎と言われる熊本に最近まで住んでいたが、こんなに素晴らしい星空を見たことがない。この星空が今後もこの地域に広がってほしいと心から感じた。しかし、この星空はトロロに電気が通っていないことの表れでもある。電気があった方が便利だが、星が見えなくなる等、電気があることによる弊害もある。何が正しいか分からないし、矛盾して自分の中で答えが見つかっていない。日本が短時間で発展したからこそ失ったものもあると思うので、ウガンダには失う前に気づいて考えてほしいと考える。発展のための国際協力をどこまでした方が良いのか、今後勉強して、様々なことを経験して考えたいと思う。

● 諸外国(視察先等)からの震災支援について感じたこと

東日本大震災の際、ウガンダからは多くのメッセージを頂いたと聞く。私は東日本大震災の被害に遭わなかったが、九州大洪水で生まれ育った町が被害に遭った。その時のことを思うと、東日本大震災等で日本が大変なときに国際協力が必要なのか、疑問に思う気持ちも理解できる。だが、ウガンダのように生活の隣に死のリスクがある人もいる地域が同じ世界の中にある。しかも、自分たちが思っている以上に日本は大国で世界から期待されていると思うと、自分たちだけが大変なわけではないから国際協力は行い続ける必要があると感じた。

● 日本の皆さんに伝えたいメッセージ

日本人に支えられているODAや国際協力活動はウガンダのために役立っていました。また、ウガンダで国際協力を担っている日本人はとても輝いていて、熱い想いを持っている素敵な人ばかりでした。青年海外協力隊や外国での国際協力の経験が大震災で役に立ったとも聞いたことがあります。国際協力はウガンダやその他途上国のために行われていますが、日本もその恩恵をまったく受けていないとは言えないと思います。日本の国際協力について様々な意見があると思いますが、現地で活動された方々の話を一人でも多く聞いて、もう一度自分の意見を考えてください。よろしくお祈りします。最後まで読んでくださってありがとうございました!

「目を向けなければ見ることのできない世界に目を向ける」

～ウガンダ共和国視察を通しての考察～

金古 浩美(東京都 学生)

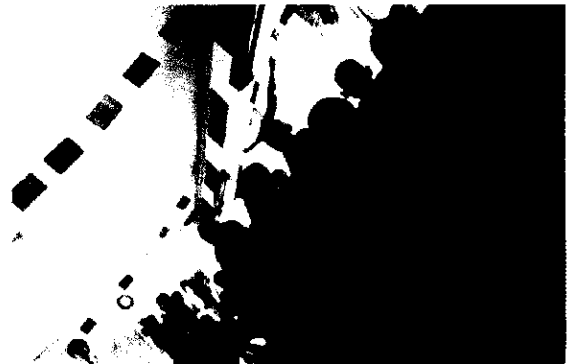
● はじめに

ODA=政府開発援助。私にとって中学3年生の時の総合学習がきっかけで、以来取り組んできたテーマでした。その時、ODA民間モニター(現在の国際協力レポーター)のプログラムの存在を知り、いつか参加できる年齢になったら、日本のODAがどのように使われているのか視察をしたいと希望をしていました。7年越しの思いが、今年の夏のウガンダ共和国への訪問を通して実現しました。

● 目を向けなければ見ることのできない世界に目を向ける

アフリカ、そう聞いたときみなさんはどんなことをイメージしますか。HIV/AIDS、長引く紛争・内戦、飢餓、マラリアなどの熱帯病等々。アフリカと聞いたとき、マイナスイメージのステレオタイプが先行してしまう人が多いのではないのでしょうか。私自身、ウガンダを訪問する以前は、マラリアや(私たちがウガンダを訪問する少し前にウガンダ西部で流行していた)エボラ出血熱などのイメージが先行してしまっていたように思います。ウガンダを訪れ驚いたのが、1年を通しての温暖で快適な気候、肥沃な国土、「You are most welcome」と言って笑顔で迎えてくれる人々。その先行していたイメージとのギャップに驚きました。

私は、日々の生活の中で、今自分が持っているイメージや知っている情報のみで様々な物事を判断してしまっていることが多いように思います。地理的に日本から離れ、情報量が圧倒的に少ないアフリカなどでは、それが顕著になってしまっているように思います。まずは私たち自身が、右目と左目でバランスよく、目を向けなければ見ることのできない世界に目を向けることが重要なのではないかと思います。



あしながウガンダで学ぶ子どもたち(あしながウガンダ)

● ウガンダ共和国の現状

私は、今回ウガンダ共和国の視察を通じて、ウガンダの2つの側面を見た気がします。国民の80%が貧困層に属しているというウガンダの圧倒的な貧困。首都カンバラから地方都市・トロロロに向かう道中では、バスが傾くのではないかとと思うくらい歪んだ道路、使われていない線路、幹線道路から一本離れた場所に点在するバラックの数々。

一方で、首都・カンバラを中心に著しい経済成長を遂げているウガンダのエネルギッシュな姿。経済発展に伴う、ごみ問題、空気汚染。かつて日本が高度経済成長期に抱えていた環境問題同様、経済発展に伴う環境問題は、その対応が急がれるように思いました。

● 支援から投資へ

ウガンダと日本の貿易に目を向けてみると、日本のウガンダへの輸出が161億円、ウガンダからの輸入が4.3億円と日本の輸出過多のアンバランスな状況が続いています。日本ではまだまだあまり知られていませんが、ウガンダはゴマ、コーヒー、オーガニックドライフルーツ、シアバターなど健康志向の日本人にふさわしい様々な食物の生産をしています。

貿易を通じて、日本とウガンダの関係性がバランスのよいものになるように、支援だけでなく日本企業の積極的なウガンダへの投資が増えることを願っています。日本からウガンダへの投資が増えることによって、輸出入のバランスが改善すると思うのです。



ナムロンゲのネリカ米の田んぼをバックに(コメ振興プロジェクト)



5Sが徹底されており、40年間の日本の支援の歴史を感じた(ナカワ職業訓練校)

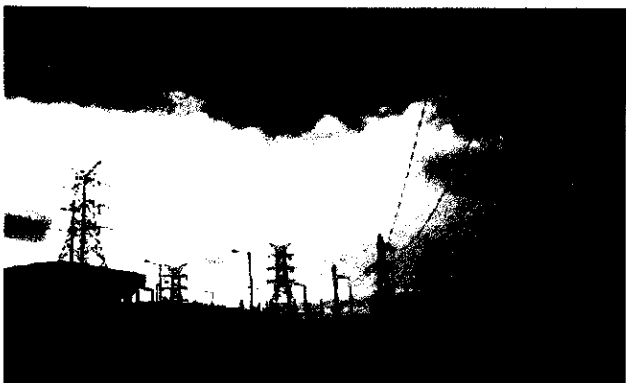
● ウガンダ視察を通しての考察

私たちの暮らす日本では、食糧や天然資源の多くを海外から輸入し、私たちの日々の生活が成り立っています。日本は、世界の様々な国や地域でODA=政府開発援助という形で支援を行っています。私が今回のウガンダ共和国への視察を通して実感したことは、日本企業の投資の少なさでした。政府の支援と同時に民間連携(草の根技術協力等)や日本のウガンダへの投資が増えることを願っています。

近年、多くの日本の企業にとって企業の社会的責任=CSRは重要なファクターとなっています。日本の高い技術力を持った会社による、自社の得意とする知恵や技術を生かしたウガンダの経済発展につながるようなCSR活動やBOPビジネスなどがさらに増えればと思うのです。私たちは、今回の視察の中で大阪のサラヤ株式会社がエンテベ病院で行っている官民連携BOPビジネスの活動を視察しました。サラヤ株式会社は、現在日本からウガンダへアルコール消毒液を輸出し、エンテベ病院等に設置しているようですが、近い将来のウガンダでの生産を目指しているようです。ウガンダでは、さとうきびの生産が盛んで、そのさとうきびを活用したアルコール消毒液の生産を模索しているとのこと、もし実現したら現地の雇用にも繋がり、多くの日本企業の模範になるのではないかと思います。衛生的な水が手に入りづらいウガンダで、自社製品のアルコール消毒液を通して病院内での院内感染の予防や5Sの意識改革に取り組んでいる企業を視察することができたことは、私たちレポーターにとってとても素晴らしい経験となりました。

● おわりに

私たちレポーター1人1人が、それぞれの所属する団体、学校、地域でウガンダ視察を通しての体験を積極的に伝えていくことができたらと思っています。ウガンダ視察という素晴らしい機会に恵まれましたことに心から感謝しております。



円借款によってつくられた送電網(ブジャガリ送電網整備事業)



エンテベ病院のスタッフの皆さんと一緒に(エンテベ病院)

「日本から支援するということ」

柴山 葉奈(大阪府 学生)

JICAやODAについて、ウガンダ派遣前から詳しく知っていたわけではなく、応募のきっかけとしては国際協力の現場を生で見られることが大きかった。現地で協力隊が具体的にどのようなことをしているのか、ODAとはどういう仕組みなのか、そんな予備知識もほとんどないままウガンダへ向かった。ただひとつ、イメージとして自分の中にあっただのは、現地の人に農作物の作り方を教える、井戸を掘るなどの草の根の活動だ。現地の人と協力隊が一緒になって作業をし、その中で技術を教える。また、学校で子供たちに理科や算数を教える。そんな技術提供が行われているのだと思っていた。

ウガンダ派遣中は、無償・有償資金協力、草の根活動、技術協力、広い分野での活動を見させていただいた。それぞれの訪問先で様々なお話を聞き、目や耳に入ってくる多くの新しい情報に圧倒されながら、1日1日を消化するのが精一杯という感じだった。その中で、事前に読んでいた案件の資料からでは分からない協力隊や職員の方々の苦労や工夫、また、楽しさというものを感ずることができた。また、ウガンダの人や文化に触れることで、ウガンダ人の明るさや大らかさ、日本とは違って時間の流れがゆっくりであることなど、ウガンダという国についても日に日に知ることができ、また興味がわいてきていた。

現地の人と交流する機会も何回か持たせていただいた。そこで、印象的だったことが女性グループとの交流だ。ある女の子との会話でお互いの名前を教え合っていたのだが、その女の子の名前の発音が難しく私が手こずっていたときに「発音、難しいね。」と言うと、「発音なんて気にしなくていいよ。」と返してくれた。私はその時、言葉の違う国の人と会話をするとき、どうしても発音よく言わなければ通じないのではないかといつも不安に思い、英語



女性グループとの交流(ブワヤ村)

に対しても苦手意識があったが、「そうか、気にしなくていいのか。」と気持ちが少し軽くなった思いがした。日本にいと、誰かと接するとき、少し気を遣ってしまうことや小さなことを気にしてしまうことがある。確かに気を遣う、ということが必要な場合もある。しかしウガンダ人と接する中で、彼らはすごく人との交流や話を楽しんでいるように見えた。発音やその他小さいことを気にすることもなく、心と心で接している感じがした。自分の偏った見え方かもしれないが、どうしてか日本より気楽に交流できる気がしたし、ウガンダ人もより気楽で大らかな気がしたのだ。

こんな風に毎日ウガンダに接していく中で、初めは未知の世界だったウガンダにだんだん愛着がわいてきていた。そして、それぞれの訪問先で出会う日本の協力隊や職員の方々もウガンダが大好きなのだということを知った。フェニックス社の柏田さんは、実際にウガンダに来て、そこでウガンダと接する中でウガンダに腰を据えることを決めた。皆さんそれぞれ、ウガンダに惹かれてウガンダを好きになり、ウガンダでの活動を楽しんでいるように感じた。私は派遣前、ODAとは現地の人への技術提供が主だというイメージがあったため、なんとなく、協力隊から現地の人へ技術を“与える”とか“指導する”という印象を持っていた。しかし、実際はそういうことではないと分かった。ウ



看護師さん(トロロ病院)

ガンダで活動している日本人の皆さんは、ウガンダが大好きでその土地に愛着を持っていた。その土地と、その土地に住む人々が好きで、ウガンダ人と共に歩み、活動していた。“日本からの支援”ではあるが、実際は支援する側もその国に住み、その国の人と同じように暮らす中で、その国の人と共に問題を解決していく。そういう姿勢がどの訪問先やプロジェクトでも感じられた。

ひとつひとつのプロジェクトがウガンダ全域のすべての孤児問題や食糧問題を解決するものではない。ひとつひとつが与える影響や解決できる問題の範囲は小さいかもしれない。しかし、少なくともそれ

によって救われている、それを必要としているウガンダ人はいる。

その国に密着し、その国の文化や人を知り、その国を好きになる。そして、愛着を持ってその国を支援することで、救われる人々はあるのだと思う。外国から支援する、協力する、ということはそういうことで、根本的な解決はその国自身で行うべきで、私達は黒子に徹して小さなところからできることを支えていく。これが“国際協力”ではないか。私はこのウガンダ派遣でそう感じた。

日本にいる人に伝えたいのは、ODAや国際協力という言葉聞いてイメージする、“支援する”ということは、単に何かを提供したり指導する形の支援ではなく、日本人と現地の人とが同じ目線で共に問題を解決していくことが大事なのだということだ。しかし、その国を実際に支えるのはその国に住む人々であるべきだ。日本人は何かを改善したり、問題を解決するための、黒子役であり主役ではない。そして、黒子に徹するためには、その国を知ることが必要であるし大切である。その国を知り、その国を好きになれたからこそできる支援もあるのではないか。将来、国際協力に携わりたいと考えている人がいれば、まずは支援先の国を好きになるということから始めてみてはどうだろうか。

まっすぐ1本道



見る・聞く・感じる in UGANDA

高橋 篤子(山梨県 主婦)

● 国際協力活動やODAについて、海外派遣前に抱いていた印象や考え

きっかけは？

「ボランティアや経済支援は、海外よりまずは国内を優先すべき。」私もそう考える人間の1人でした。

しかし、東日本大震災後の各国からの支援、特に日本より決して豊かとは言えない国からのものには強く心を打たれ、これも今まで日本が国際協力をしてきたお陰なのかもしれないと思いました。

また、2011年9月にインドを訪れた事も一つの転機でした。小さな赤ん坊を抱えながら物乞いをする女性や学校にも行けず働いている子供たち…日本では決してみることのない光景がそこには広がっていました。日本も不景気ではあるけれど、まだまだ豊かなほうかもしれない。国際協力って何だろう？と少しずつ考えるようになりました。

そんな中、図書館で偶然見かけた「国際協力レポーター2012」募集の広告。普段あまり目を向けるような場所ではなかったのに、この日に限って何故だか目に留まりました。「これも何かの縁かもしれない」と思い、今回応募するに至りました。

派遣前の気持ち

内定をいただいた瞬間、「ウガンダに行ける!」というよりも「アフリカに行ける!」と思いました。未知の世界過ぎて、1つの国としてとらえるよりも、アフリカ大陸として大きく捉えていました。

そして、アフリカと言えば、「貧困」「飢餓」というキーワードが真っ先に頭に浮かび、まず何よりも「食料支援」が必要だろうと考えました。

● 国際協力活動やODAについての帰国後の考え

エンテベ空港～首都カンバラ付近の様子

抱いていたイメージと違ふ!到着初日にまず思ったことです。人々はカラフルで小綺麗な洋服を身に付けていました。道路は舗装されており、物乞いをしている人も目に付きません。街中にはデパートもあり、宿泊したホテルは日本のホテルと比較しても遜色のないレベルでした。都会だからかな?とも思いましたが、なんだか拍子抜けでした。

都会と地方の違い

トロロ、マナファ、ジンジャにある地方の視察先を回った際、バスの中から都会と地方の違いを感じることができました。バスが転倒するかと思うほどのデコボコ道を通ったり、窓の外には黄色い容器を持って水を汲みに行く人々の姿をよく目にしました。夜道は街灯がなく真っ暗でした。電化率は、首都カンバラで約40%、地方では10%を切っているそうです。やはり初日に感じた首都の印象の方が例外だったようです。

今回、一部の視察先を見ただけで、ウガンダの全てを知った気になってはいけなしいし、またウガンダを知ったからと言ってアフリカ全体を知った気になってはいけないと改めて思いました。

現地の主婦たち

私は主婦ですので、現地の主婦がどういった暮らしをしているのか興味がありました。青年海外協力隊で村落開発普及員として活動している若杉哉恵さんを訪ねた際、村の女性たちとお話をする機会がありました。彼女たちは子どもが10人前後の大家族で、学校へ行かせるための現金収入を収穫時期は農作物から、それ以外の時期はクラフト作りから得ているとのこと。そして、往復1～2時間かかる水汲みを1日数回行くと聞いた時には、思わず自分の普段の生活と比べてしまいました。



おしゃれなウガンダの女性たち(フワヤ村)

一方で、来日したことのある比較的裕福な女性たちのお話を聞く機会がありました。彼女たちは基本的に共働きをしており、家事や子育てはお手伝いさんを1~2人雇って任せているとのこと。そして、子どもの教育にお金をかけるため、子どもは3~4人程度ということでした。

日本国内でも「格差」が問題となっていますが、ウガンダも同じような問題を抱えているのだと感じました。

日本のODAに対する印象

地方から首都カンバラに戻る途中、大きく立派な建物を目にしました。中国のODAで建設された競技場だそうです。

中国のODAは、こういったモニュメント的なものが多いと聞きました。人の目につきやすいものを提供していると、現地の人からの認知度も高いのでしょうか。そのせいか、現地で声を掛けられる時の第一声は、大概が「チャイニーズ?」でした。

今回、視察先で見た日本のODAは、このような派手さを感じることはなかったものの、病院施設や職業訓練所、変電所など、なくてはならないハード面を支えているような気がしました。

また、視察先では協力隊や学生ボランティアの方たちなど、多くの日本人の姿を目にすることができました。資金や物資の支援が多い中、日本は人材を派遣することによって、より現地に密着した支援を行っているようです。特に、病院で見ることできた5S(整理・整頓・清掃・清潔・躰)運動は、几帳面な日本人らしい支援だと思いました。それぞれの国の強みを活かし、一方的な押しつけにならないように支援を行っていくことが理想だと思います。

本当に必要なものとは?

実際、こればかりは現地へ足を運んで、しばらく滞在してみないとわからないと思いました。派遣前は、まずは「食料支援」が必要だろうと考えていましたが、ウガンダの国民は8割が農業に携わっており、栄養のバランスはともかくとして、食料は足りていそうな雰囲気でした。それよりも、電気・水道・道路などのインフラ整備と、現金収入確保の手段や雇用の創出が急務であると感じました。

● 日本の皆さんに伝えたいメッセージ

負のイメージを抱き過ぎないこと

派遣前の事前説明会で聞いた「発展途上国は先進国のごみ箱ではない」という言葉が、今でも心に残っています。良かれと思ってする寄付でも、場合によっては喜ばれないというお話でした。それは、派遣前の私のように、一方的な負のイメージを抱き過ぎるために起こることなのかもしれません。負のイメージを抱き過ぎないこと、そして、個人レベルの寄付にとどまらず国際レベルの国際協力にしても、まずはこちらが抱えているイメージと現実のギャップを埋める必要があると思いました。

とにかく関心を持って!

「ODAって何だっけ?聞いたことはあるけど。」「JICA?知らないな。」という人が、私の周りには結構いることに驚きました。国際協力やODAに対して肯定的・否定的、どちらでもよいと思います。否定的な人たちがいるからこそ、問題としてクローズアップされ、人々の関心を誘うと思うからです。「知らない」「興味ない」というのが一番の問題です。

資金や物資を提供すること、現地に行ってボランティアをすることも大切ですが、どんな形であれまずは関心を持つことが、国際協力への第一歩だと思います。



地方で目にした水汲みの光景(ブワヤ村)

テーマ「よりよい世界を作るために」

永原 実(島根県 学生)

● 国際協力やODAについて、海外派遣前に抱いていた印象や考えと派遣後に思ったこと

以前、国際関係に関する大学の講義の中で「日本のODAの国民一人当たりの負担額は約8,000円ですがこれは高いと思いますか低いと思いますか?」と教授が問うていた。

正直、私は全く分からなかった。ODAが何をしていたりどう役立っているのかもわからなかった。高いも低いも判断できなかった。しかしODAは必要であるとは思っていた。それは困っている人がいるのであれば国境など関係なく助け合うのが当たり前前と思っていたからだ。しかし、国益がどうか将来どんな問題が起こる可能性があるかなどは全く考えていなかった。今思えば税金が使われているのに少し無関心だったのではないかと思う。それが私が派遣前に感じていたことである。あれからウガンダでODAの現場を見たり、援助について調べたりした今、ODAが必要であるという考えに変わりはないが、そこには自分なりに大きく三つの理由がある。

一つ目は、実際に現場を見て支援が現地の人たちにとって役に立っていると感じたこと。具体的にはNGO「あしながウガンダ」に資金提供してHIVやAIDS孤児の子たちが学習できるよう寺小屋を作ったこと。米のJICA専門家の方が米作りの指導をする際、難しいのではないかと抵抗のある農家に対し「陸稲は簡単だ。まずは小さい面積でいいからやってみて無理そうだったらまた考えればいい」と言っ

てあまり苦手意識を持たないように指導しているということを知り、現地の人1人ひとりに寄り添い1人ひとりに合った指導をしていると感じたこと。看護師として派遣されている協力隊の方がHIV陽性者のウガンダ人女性と協力してHIVやAIDSの啓発DVDを作成したり、日本でもウガンダでもHIVやAIDSに対する差別や偏見をなくし、またかからないようにするよう啓発していること。技術協力で作られた職業訓練校の人气があり応募者が定員を超えていること。病院で働く現地の人たちが自分たちで病院の衛生状況を変えるために、JICAが提唱する5S(整理、整頓、清掃、清潔、躰)運動を徹底して行っていたこと。水タンクを無償資金協力で作ったことで村の人たちの水汲みの時間が大幅に短縮されたこと。ウガンダの病院の衛生状態は極めて悪く十分にきれいな水も使用することはできない中で、日本の企業と連携しながらアルコール消毒液を病院に普及させていること。



ODAで作られた水道(ブヤ村)



コメ振興プロジェクト

こと。ウガンダの人たちが日本の支援に感謝してくれていると言ってくれていたこと。など至るところで役にたっていると感じることができた。

二つ目は、信頼関係が築かれているということ。

専門員や協力隊と現地の人との間に信頼関係が構築されていたと感じたのはもちろん、日本とウガンダ、日本と諸外国の間にもODAによって信頼関係が構築されていると感じた。

上述した米プロジェクトの話や協力隊の方を現地で見ても思ったのもあるが、東日本大震災の際、世界のほとんどの国が義援金や物資支援をしてくれたことが一番信頼関係が構築されていると思った要因である。人と人との信頼関係ができること、ただそれだけで十分意味のあることだと思う。またその



田舎の子ども達(ブワヤ村)

ことで日本の企業が海外進出しやすくなったり、輸出入がしやすくなるという利点もあると思った。

三つ目は、人口問題や環境問題など地球規模の問題に貢献していること。人口増加の緩和や温暖化など国だけでなく地球規模の問題に貢献できているのが良いと思った。以上三点である。

※しかし、ODAは必要だと述べたが今後も監視していくことが重要だと思う。その際は現地ニーズを満たせているか。効率的に運用されているか。予算の無駄遣いはないか。事業評価の方法や情報はクリアにされているかという点に注意していきたい。

● 日本のみなさんに伝えたいメッセージ

私が1番伝えたいこと。それは日本とウガンダなどの途上国、そして世界はつながっているということ。そして世界の様々な問題に対して私たちにもできることがあるということ。私たちの身の回りのものの多くは外国から輸入しているものであり、生活から諸外国は切り離せないものとなっています。また私たちも輸

出をしており、お互いが支え合って暮らしています。そして世界には環境問題や貧困問題など様々な問題があり、解決のためには世界中の人たちが互いに協力しながら暮らしていかなければなりません。

そんな問題に対し私たちにもできることがあると思います。まずは「知ること」。そして知識や経験を「伝えること」。自分ができることはないか、電気のない暮らしとはどんなものだろうか、「考えること」。そして自分にもできると思ったことを「行動に移すこと」。具体的な行動として、現地に行くこと。レジ袋をもらわないこと。賞味期限の遅い奥にある商品から取るのではなく、すぐ使う商品であれば近くの賞味期限の切れそうな商品を選んで購入すること。資源を有効に使い、必要以上のものを得ないこと。日本の食料廃棄量は世界1位であり、明らかに必要以上のものを使っています。ウガンダの人たちの1日に使える水の量は限られています。しかし彼らは少ない水を工夫しながら有効に使います。

もっともっとと求めるのではなく今あるものを有効に使うこと。そのことで地球にとっても自分にとっても良いことがあると思います。とにかく自分だけ日本だけのことを考えるのではなく、周りのこと。世界のことを考えていくことが大事だと思います。

● おわりに

一緒にウガンダに行った皆さん、JICA職員の皆様、現地の方々、色々迷惑をかけたと思いますが、優しく接して下さってありがとうございました!!また今回の派遣を通して人と人のつながりの大切さを改めて実感しました。今まで私に関わってくれた全ての人たちありがとうございます!!



真剣に勉強する子供達(あしながウガンダ)

身近なものと捉え直すべき国際協力活動及びODA

畠山 佑介(東京都)

ウ
ガ
ン
ダ

● 国際協力活動やODAについて、派遣前に抱いていた印象や考え

私は、学部時代に開発学の講義を受講したり関係書籍を読んだりしていたので、国際協力活動及びODAについて非常に有意義なものであると考えていました。特に、日本が公的に行うODAという援助枠組みの長所及び短所について長年考えていたので、技術協力や資金協力の現場を自分の目で直接見てみたいと強く希望しておりました。国際協力活動やODAに対しては、財政難を主因とする反対論が根強く存在するので、今回の派遣でこのような論点についての自分なりの意見が形成されることを楽しみにしながら出国いたしました。

● 国際協力活動やODAについての帰国後の考え

まず、ウガンダで実際に1週間過ごしてみて、良くも悪くもウガンダに対するイメージが大きく変わりました。出国前は、ウガンダは後発開発途上国であり、国の制度が未発達なゆえに国民はものすごく貧しい生活を送っていると考えていました。しかし、実際には食料は豊かですし、人々はフレンドリーで優しく、想像以上に過ごしやすい国であることに気が付きました。もちろん、援助を必要とする国である以上、様々な改善すべき問題点も存在しています。

事前にイメージしていた国際協力活動やODAは、例えば農作物の育て方や医療行為の手法を指導するといった技術的な部分が大きいと考えていましたが、実際には教えられたとおりに行動したり継続することの重要性を繰り返し伝えたりするという、現地の方の思考・行動様式に関係する非常に根気のいる活動が重要な部分を占めていました。JICAスタッフの方や協力隊員の方は、日本人に対して指導する場合とは明らかに異なるご苦労をされていらっしゃるし、必ずしも思い通りにいけないところもあると感じました。

JICAの協力モットーである人づくりという点については、あまりにも当然のことであると考えていたので深く意識していませんでしたが、現地で援助の現場を実際に視察してみると、思っていたよりもこの点が重要であることに気が付きました。被援助国の国民に対する押しつけにならずに開発に必要な意識改革を行っていくことは、バランス感覚が要求され時間もかかる過程です。そして、人づくりのためにはコミュニティーに入り信頼してもらうことが出発点になるので、現地のJICAスタッフの方がおっしゃっていたとおりに一緒に働くことを通して相互に学ぶことができるものであり、援助をしながら援助している側の人づくりも同時に行われているのだと確信するに至りました。

国際協力活動やODAに対する反対意見については、その多くは援助協力を自分とは関係のない遠い世界の出来事と捉えていることから生じているのではないかと考えるに至りました。確かに、私たちは普段日本国内で暮らしており、地理的には離れた場所で援助協力が行われていることは事実です。しかし、グローバル化した現代社会において世界経済は緊密な関係にあり、ウガンダの将来の発展は日本からの輸出の拡大等の形で日本にも利益をもたらしているのです。



子供の水汲み



20kgの水運び体験(ブワヤ村)

現在、日本は経済的困難に立ち向かっていますが、援助協力が必要な国々に比べればはるかに豊かな国ですし、国際的な相互扶助として現在は日本が助ける形になっていても、将来は日本が被援助国から助けられることが増えてくるかもしれません。こういった意味で、国際協力活動やODAは私たちにも直接関係する身近なものなのです。

● 諸外国からの震災支援について感じたこと

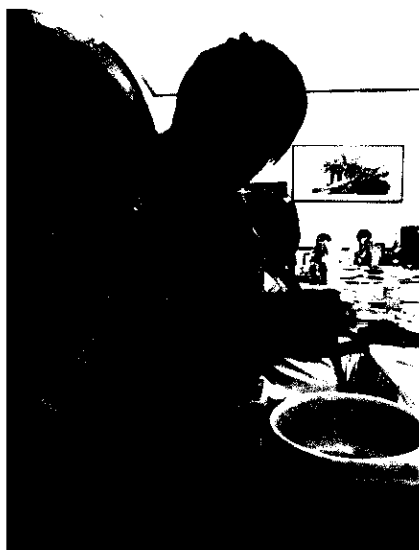
私は被災地宮城県出身ですので、地震が発生した日からずっと震災復興について考えてきました。その中で、発展途上国を含む世界の様々な国々から日本に対して援助が送られてきたのは、日本が国際社会に貢献してきたことが認められたのであると感じ非常に嬉しくなりました。途上国は、厳しい経済状況の下でも日本に対して援助を提供してくれましたが、これはまさに今までの国際協力活動及びODAにより日本に対する友情を築いてきてくださった援助関係者の方々の努力が実ったことの一つの発露だと感じました。



農村での歓迎の挨拶(ブワヤ村)

● 日本の皆さんに伝えたいメッセージ

国際協力活動やODAは、援助協力の現場が日本から遠く離れた地ではあるものの、皆さんの生活と無関係なわけではなく、私たちの税金が資金源となって行われているという意味でとても身近なものです。ニュースではあまり取り上げられる機会は多くありませんが、今日も世界のどこかで発展途上国の人々のために活躍している日本人がたくさんいます。私たちは税金という間接的な形でこれらの活動に関係していますし、もしかしらお勤めの会社が途上国のための製品・サービスを提供するという、より直接的な関わりを有しているかもしれません。



茶道を通じた文化交流(帰国研修員との交流)

私を含め、日本にいただけでは意識的に目を向けない限り国際協力活動やODAの現場の実態を知ることは難しいです。しかし、このような活動に賛成の方も反対な方も、もしくは関心がない方であっても、まずは日本と世界の関わりについて意識を向けて、その中で途上国の置かれた状況を認識して、少しでも自分が関わっているということを実際に考えてみる必要があるのではないでしょうか。日本も戦後復興では多くの国の援助を受けましたし、東日本大震災の際に世界中からたくさんの支援が寄せられたのは、日ごろ日本を代表して途上国を含む世界のために活躍している日本人の方の影響があったからだと思います。

全ての方が実際に現場に立って援助を行うことは難しいと思いますが、国際協力活動及びODAの現場で働いている方々のことを理解し、そのような活動に対する具体的なイメージを持って応援・サポートすることができれば現場に立つ方々を勇気づけることができますし、それも一つの国際協力の形であると思います。私は、今回の派遣で学んだことをこれからも皆さんに向けて発信していきます。ぜひ一緒に国際協力活動及びODAを支えていきましょう。

本当の開発とは

原田 美緒(東京都 学生)

派遣前、ODAに関しては、外交や国益の観点からしても、もちろんなくてはならないものであり、その存在についても賛成の立場でした。しかし友人や知り合いと話をしていると、「ODAって何?」「JICAって何?」というような声も少なくなく、「日本が国として行っている大規模な国際協力のことを知らない人がいるなんて!」と驚き半分、「実はそういう人が多いのではないか。実際国内でODAについての大きな報道はないし、名前は知っていたとしても、具体的な取り組みなど想像がつかない人がほとんどなのは。」と納得半分でした。

しかしこのままではいけないと思い、まずは自分が現場を見て、そしてそれから周りの人達に伝えていこうと考え、この事業に参加しました。



カンパラの街中

ウガンダ派遣前は、ODAについて多少の知識を身につけてはいたものの、私自身もぼんやりとしたものでしかありませんでした。ODAは日本人が中心となって行っているというイメージがあり、また日本のODAを見に行くのだから、現地で活躍している日本人から、日本語でODAの説明を受けるのだろうと思っていました。

しかし実際に現地で視察を行なっているうちに、日本人の姿が意外と少ないことに気がつきました。視察二日目のナカワ職業訓練校では、日本人は数人しか見うけられず、ウガンダ人から訓練校の概要について英語で説明していただきました。訓練生を指導している人たちは皆、日本に来て一度研修を受けてから、培った技能をウガンダに帰って他の人に教えている、とのことでした。「日本人が現地に来て現地の人たちに指導している」と想像していた私は、ウガンダ人が日本のサポートを得ながら自分たちで工夫して訓練校を運営している姿に驚くとともに感銘を受けました。

同じく視察二日目のトロロ病院では日本人がおらず、ウガンダ人が日本から学んだ5Sを自分たちで工夫して行なっている姿を見ることができました。その他のプロジェクトを考慮しても、約半分が現地の方が説明して下さったのではないのでしょうか。またどのプロジェクトも、現地の人たちの意思・意向を一番に考慮して進めている印象を受けました。

私の中のODAのイメージが、「日本人中心」から「ウガンダ人が中心となって、日本人は横でサポートをしている」というものになりました。上から押し付けるのではなく、横から協力する、というのは、まさに理想の開発の形態ではないでしょうか。またODAに携わる人達は日本人もウガンダ人も関係なく、皆ウガンダの発展を考えて真摯にプロジェクトに取り組んでいるという印象を受けました。ODAは日本の国益のためにも必要不可欠なものである、と先述しましたが、それはマクロレベルの話であり、ミクロな視点から見れば、ODAのあり方や印象がガラリと変わるのだと感じました。

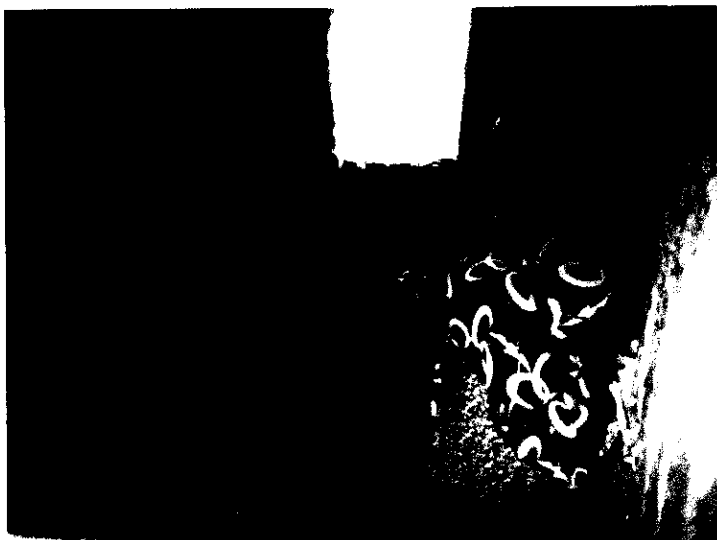


ブワヤ村のトイレ



あしながウガンダで子供と交流(あしながウガンダ)

トロロで見た夜空は、想像を絶するほど星でいっぱいでした。「この夜空いっぱいの星がずっと続けばいいのに、と私たちは思うけれど、それは第三者だから言えることであって、現地の人たちは星よりも電気が普及して生活が便利になる方を望んでいるかもしれない。」というある参加者の言葉が一番印象に残っています。第三者の純粋な気持ちも、ただのエゴになってしまうかもしれない。第三者の勝手な思い込みだけで判断するのではなく、現地の人たちの視点を一番大切にすること、その基本的なことを忘れないようにしたいと痛感させられました。それと同時に、日本のODAはそれを実行しており、日本人として大変誇らしいことであると感じました。



ブワヤ村のある女性宅

今回、未熟ながらもこの国際協力レポーター事業に参加させていただき、大変貴重な機会を提供していただいたことを大変光栄に思います。この事業が多くの人に知れ渡り、そこからまたODAへの理解が日本中に広がっていくことを願っています。お世話になった現地スタッフの方々、日本国内の関係者の皆様、参加メンバー、そしてこの報告書を読んでくださっている全ての方に感謝の意を述べたいと思います。ありがとうございました。

ウガンダでの気づき、帰国後の気づき

安元 久美子 (神奈川県 学生)

● 国際協力活動について海外派遣前に抱いていた印象や考え

日本の支援活動は正しい、素晴らしい、と支援自体に何か自分の意見を持つこともなく、ただ良いことをしているという気持ちで国際協力を見ていました。貧しい人を助けるために援助している、助けてあげるといった気持ちが強かったと思います。加えて、日本の税金を使って国際協力活動を行うメリットについてもあまり深く考えてはいませんでした。けれど大学で日本の行政の授業を受けていると、不当な資金の使い方をした市や県が市民や県民から訴えられるケースを見るようになりました。日本での税の使い方は表に頻繁に出てきますが、海外では一体どんな使い道がなされているのか良くわからず、気になるようになりました。

● 国際協力活動についての帰国後の考え

最初は…

今回国際協力活動を視察して、国の文化・習慣の違いというもの、より意識するようになりました。なぜなら、ウガンダでの5S(整理・整頓・清掃・清潔・躰)の実施が難しいという部分にとっても驚いたからです。

トロロ病院内では確かに薬もカルテも整理整頓され、床には赤いマークをつけて椅子やベッド、ストレッチャーを戻す位置が分かりやすいようにされました。おかげで乱雑な病院が綺麗になり、規律が生まれました。けれど日本の病院から考えると、これらは当たり前のように行われていることです。日本人が片付いてないとそわそわしてしまうのとは逆に、ウガンダの人は片付いていなくても平気な文化・習慣を持っているのかなと思いました。

それでも着実に変化している病院内の様子を見て、隊員の方や病院のスタッフの努力を直接見て感じる事が出来ました。

次に…

視察先を周り、毎日皆で感想を言い合い、文化・習慣の違いは国の個性だと思うようになりました。ウガンダの穏やかな気候、明るくのんびりとした気質の中で、それらをすべて変えることは良いことなのだろうか、服装も西洋化し、家の外観も伝統的なものをやめる、食もジャンクフードを食べる等、すべてを西洋化させて、本来のウガンダの姿を失わせるのが国際協力なのだろうか、彼らの自給自足の生活を無理矢理変えているのではないか、という疑問が皆と話しているうちに膨らんでいきました。

私の出身地は福岡の田舎です。町には白壁の建造物が残され、田舎の古い雰囲気が漂っています。東京に上京したことで都会と田舎の違いを感じました。私たちの町には東京のようにお店もないですし、娯楽施設もほとんどありません。けれどバスや電車を使えば楽に移動できる、病院も充実している、不便なことは多々あるけれど、ものすごく困ることもありません。都会の便利な生活か田舎ののんびりとした生活か、どちらを選んででも社会保障がしっかりしているからこそ、どちらでも好きなほうを選ぶことができるのです。だからこそ、私達の町は、安心して田舎で古い町の文化を残せているのだと思います。

しかし、ウガンダではまだ自由に選べるような状況ではありません。病院は気軽に行ける場所ではないし、道路は舗装されておらず穴がポコポコ、電気も水道も満足に普及していません。

ウガンダでの一週間を通し、必要なことはまず都会と田舎、両方の生活水準を上げることであり、ひいてはそれが文化を守ることに繋がるのだと思うようになりました。



病院は特別な場所(トロロ病院)



笑顔(あしながウガンダ)

そして…

日本政府が日本人から集めた税金を使って、他国へ国際協力活動を行う理由はとてもシンプルなものだと思います。駐ウガンダ日本国大使の皆川氏は「隣人が貧乏で自分だけがご飯を食べられる状況であなたは普通に生活できるのか。」とおっしゃっていました。隣人の生活が困窮していても、気にせず生活することができる人もいるでしょう。けれど私はきつとできません。そんなできない人達の気持ちが集まって、日本のODA活動に繋がっているのだと思います。国際関係を円滑に進めるために、貿易による利益のために、世界での日本の地位向上のために等々様々な理由はあるでしょうが、結局はこの考え方の比率が一番大きいのではないかと思います。

今回視察したあしながウガンダ、ナカワ職業訓練校、コメプロジェクト、フェニックス社、エンテベ動物園、村落開発(ブワヤ村)、エンテベ病院やトロロ病院、そのすべてに共通することはお互いのために協力し合う、援助ではなく「協力」し合っているという姿勢でした。そしてウガンダの内側から豊かにしていくことを目的に活動が行われていました。

内側、つまりは文化・習慣を変えることは難しいです。けれどウガンダに一方的に「援助」をして、満足いく利益をウガンダが得た後に撤退してしまったらどうなるでしょう。病院内はバラバラのカルテと乱雑な病棟に逆戻りし、技術を教えるものがないければ、次の世代に繋がりません。そう考えるとじっくり時間をかけてやっていくことはとても意義のあることだと思います。

● 日本の皆さんに伝えたいメッセージ

私が自分一人でウガンダに行き、各案件を視察しても同じように考えることはできなかつたと思います。いろんな地域、職業、年齢、他大学の他学部、異なる考えや感性を持つ人と視察が終わるごとに意見をかわせたことで、自分では思いつかない考え方や感情に出会うことができました。

今回の経験はとても貴重なものでした。けれど普通はウガンダへ簡単に行けるものではありません。他の発展途上国もまた同じだと思います。ですので、日本にいる皆さんにはいろんな人の話を聞いて疑似体験してもらいたいです。全然境遇の違う私達レポーターの話聞くことで、視察を体験し、すこしでも共感して頂けたら幸いです。



日本みたい(コメ振興プロジェクト)

国際協カレポーターの視察を通じて

青年海外協カ隊 ウガンダ共和国
23年度1次隊 大塚 泰法

今回、JICAが主催する2012年「グローバル教育コンクール」写真・映像部門において国際協カ機構理事長賞を拝受した副賞として、国際協カレポーターのウガンダ共和国(以下、ウガンダ)視察に同行させていただきました。そこで、得たことを3点レポートさせていただきます。

● ウガンダの日常を伝える機会をつくることができた

国際協カレポーターの皆さんは、若い方が多いという印象を受けましたが、選ばれてみえただけあって非常に熱心にそれぞれのプロジェクトについて見聞きしたことを書き留めていました。私は協カ隊員の代表として、現地の様子を日常会話から少しでもお伝えできればという思いでした。私自身、赴任前は何となくアフリカは貧しくて暗いイメージが先行していたのが、実際に来てみるとゆったりした時間の流れや、人々のエネルギー部分を目の当たりにしてきたことで、肯定的に見ることができるようになりました。

そういったプラスの面を伝えるきっかけとして、今回グローバル教育コンクールに出品した教材のプレゼンテーションをする時間をいただきました。制作した教材を発表するのは今回が初めてでしたので、どのように伝えたら効果的か検討したことで、満足だと思っていた教材の様々な課題も見えてきました。今回は実際に水運びの映像を教材の中に取り入れたり、ジェリカンを準備してもらいました。発表後、一部のレポーターの方より“今まで水運び=貧しい、大変なイメージ”しかなかったのが、“限りある水をどうやって有効に使うか”知恵を働かせることを学んだという感想を拝聴することができ嬉しい思いでした。ODAの現場を実際に見たレポーターのみなさんが、日本に帰ってそれを日本の多くの方に伝えられることは、私一人が発信するよりもずっと大きな波及効果があります。その情報の一つとして、少しでも現地の人々の暮らしの様子を伝えることができたなら幸いです。

● 他の隊員の活動から学ぶことができた

赴任してから1年が経ちましたが、ほとんど他の隊員の任地へ出向く機会がありませんでした。今回、トロロ、マナファ、カンパラ、エンテベに赴任している隊員の活動を実際に見ることができ、それぞれの隊員が専門性や個性を生かしてユニークな活動していることに刺激を受けました。

特にマナファの若杉隊員は同期ということもあったので、どのような活動をしているか非常に興味深く、多くの地域グループまた地域住民と連携した活動をしているのが印象的でした。私が住むカチリは首都から車で1時間弱の距離にあるベッドタウン的な都市なので首都の生活スタイルが浸透しつつあります。

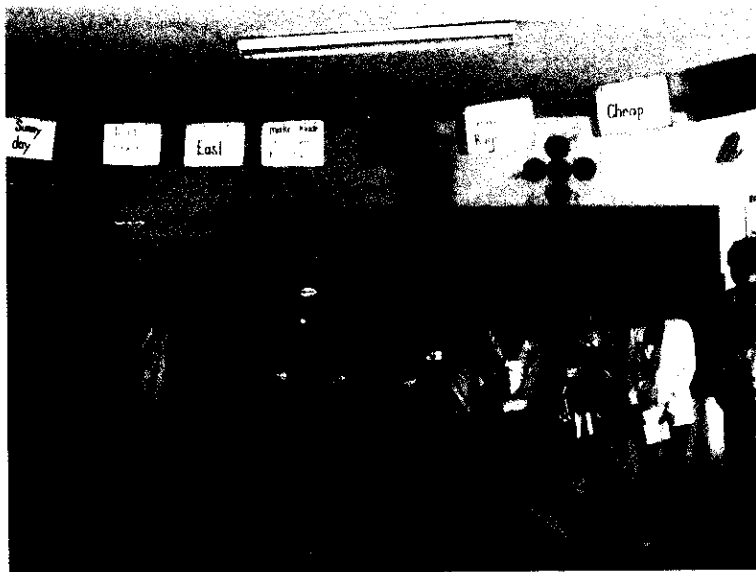
一方で、マナファの山村部では地域のつながり、伝統や習慣を尊重する文化があるので、彼女の苦勞も人一倍多いのではないかと推測されました。赴任して1年が経過して、良くも悪くも生活や仕事に慣れ始めてきた私にとって、隊員の活動を見られたことは非常によい刺激になりました。



地元の女性グループにインタビューする若杉隊員とレポーター(マナファ県プワヤ村)

● マクロな視点から任国の国際協力について知ることができた

今回の視察はその他にJICAが支援しているジンジャの水力発電や、民間企業のフェニックス社等にも見学に行きました。これらの国際協力は協力隊の活動にとって直接関係はありませんが、自分がボランティアをしているウガンダで、日本人がどのような支援をしているか、そこではどのように現地の人にアプローチしているのか、学ぶべきことは少なくなかったと思います。つまり、JICAの組織の一人として、長い間培われてきた国際協力活動の技術を学ぶことは、2年間という限られた任期を少しでも有効に活用するチャンスにつながると思ったからです。大きなプロジェクトをしよ



あしながウガンダで日本の歌を披露するレポーター(ワキソ県ナンサナ)
(あしながウガンダ)

うとすれば、現地の人はもちろん、同じ日本人のたくさんの協力が必要になるのは、協力隊でも同じです。1年の間に忘れがちになってしまった初心を今回の視察によって思い起こされた気がします。

今回の視察は“自分の国を再発見する”非常に貴重な経験となりました。国際協力レポーターの方とは違い、すぐにそれを日本の方々に還元するチャンスは少ないかと思えます。しかし、1年後、帰国した際にさらにウガンダの魅力が伝えられるよう、協力隊としてこの経験を生かし残りの任期を全うしたいと思っています。

一日に使う水の量を知っていますか？

グローバル教育コンクール
写真・映像部門
受賞作品



青年海外協力の
人達 巻末

水を使う生活には笑顔がある



自動化されたものは楽ですが、水を汲みに出かけたり、洗濯を手洗い
でする生活の中には苦労があり、人々には笑顔や会話が絶えません。

水に感謝し水と共に生きる



あなたが今、使おうとしている水は本当にそれだけ必要ですか？

「グローバル教育コンクール2011 写真・映像部門 作品」

【草の根・人間の安全保障無償資金協力】NGOあしながウガンダ

概 要

「あしながウガンダ」は2001年の設立された、HIV/AIDSで親を亡くした子どもたちに対する教育支援と心のケアを行っている国際NGO。
2007年には「草の根・人間の安全保障無償資金協力」で「寺子屋教室」を建設し、そこで、読み書き・算数などの基礎教育を提供している。

安達 紗奈美

印象的であったのは、教育は家と学校での分担が必要であるため、1タームに1度は保護者の面接を行い「一緒に子どもを育てる」というメッセージを発信し、親の教育も続けるということ。
また、そのように、親子の教育を行ったとしても、首都であるカンパラが発展するに伴い、地価、物価が高騰し、生活がしづらい環境になり、あしながウガンダに登録している子どものいる家族も田舎へと転出し、教育の継続ができない場合もあるという難しさに直面しているということもわかった。

今村 沙織

ウガンダでは、無償で初等教育を受けられるにも関わらず、家庭環境問題や経済状況のせいで学校に行けない子どもがいる。中でもHIV孤児が多い。教育支援をしているあしながウガンダでは、10代の女の子が望まない妊娠をした話を伺った。このような現実を目を背けることはできない。同時に、勉強する機会を得たことによって、自らの未来を明るくした子どももいる。今まで字も書いたことがない子どもが、前回のテストで初めてクラスで1位になったと目をキラキラさせていた。色んな状況があるとはいえ、子どもが子どもらしく過ごすという、当たり前のことだが、教育の重要性を再認識し、彼らの将来の可能性を広げるものであると感じた。

内尾 晶子

ウガンダの公立小学校の学費は無償だが、制服代などで学校関係費が約2000円必要である。日本では高校生のお小遣いが5000円だ。でもウガンダではこの2000円を払えず、学校に行けない1～4年生のエイズ孤児が55人もいる。ウガンダは東アフリカで教育水準が高いと言われているが、まだ支援を必要としている人は多くいると感じた。あしながウガンダのように日本のNGOが今よりもウガンダに入って支援することや、あしながウガンダが将来規模を拡大し、すべての教育を受けられない子ども達のためになってほしいと感じた。

金古 浩美

非常に印象的だったのが、あしながウガンダの奨学生として海外に留学をする生徒がウガンダに戻り、ウガンダの発展に寄与するといった人材育成の難しさについて、所長である沼さんが話してくれた時だ。やはり、教育を受けて外国で生活すると、外国で職を得て帰って来ない人も多い。その対応策として、あしながウガンダでは、留学準備中の奨学候補生が1年間、寺子屋に来ている子供たちの家庭訪問を担当して家庭の状況を聞いてまわり、寺子屋で学ぶ子供たちの良きお兄さん、お姉さんとして活動するようにしているとのことだ。彼らが奨学生として勉強を終えた時、国に戻り、彼ら自身がアフリカの問題解決をリードするような人材になること、それをあしながウガンダの目標としていると力強くおっしゃってきた沼さんの姿は力強く印象的だった。

柴山 葉奈

レインボーハウスでは識字教育などが受けられるだけでなく、つどいや留学制度、図書館、給食などがあり、公立学校以上に充実した施設であることがまず印象深かった。加えてHIV孤児特有の設備として、ケアプランやVOLCANOルーム(子ども達の鬱憤を発散できる場)があった。これらの設備があることで、ここに通う孤児たちは、あしながウガンダと接する機会がなく生涯を過ごす子どもたちと比べて、どのくらい救われているのか、と気になった。しかし、少なくとも良い影響を子どもたちにもたらしていることには間違いないし、ここで救われている子どもも多い。このような施設を外国人が実施するのではなく、ウガンダ人自身で積極的に運営し、ウガンダ人自身でHIV孤児問題を解決できるようにすれば素敵だと思う。そして、ゆくゆくは外国人がそれをサポートする黒子に徹する役割にシフトできればいいと思った。

視察先別報告/ウガンダ共和国

ウ
ガ
ン
ダ

<p>高橋 篤子</p>	<p>出迎えてくれた子どもたちの笑顔が意外だった。なぜなら、彼らはHIV/AIDSで親を亡くした子どもたちだからだ。 あしながウガンダは、亡くなった彼らの親に代わって、復学に向けた教育・心理社会的な支援を行っている。教育を受けたか否かは将来を大きく左右するので、その存在意義は大きい。 また、一部の優秀な学生に対して留学を支援しているようである。留学後、彼らが帰国し母国やアフリカの貧困に立ち向かうことを目的としたものである。しかし、留学先からそのまま戻ってこない者も多いと聞いた。人材の育成はもとより、育った人材が帰国し能力を発揮できるようなシステム、雇用などの環境を整えていくことが今後の課題だと思われる。</p>
<p>永原 実</p>	<p>あしながウガンダの運営は独自で行っているが、寺小屋だけODAで建てられた。ここでは年齢に関係なく1人1人の学力によってクラスが分けられている。また朝食や昼食が提供されていたり、遠足があったりして学ぶ環境が整えられていたり、海外留学で日本の有名大学に留学する生徒がいたり、金銭的に厳しい環境に置かれている子供たちにとって明るい未来を切り開く希望の場になっているように感じた。実際現地の子供達が真剣なまなざしで勉強に励んでいる姿と元気いっぱい振付けのついた歌で歓迎してくれたことがとても印象的で感激した。</p>
<p>畠山 佑介</p>	<p>経済的困窮により公立小学校に通うことができない遺児に対して寺小屋教育を行うことで、英語を話せない就職が難しいウガンダにおいて遺児たちが将来就業できるようにする取組みは、遺児の将来のために必要かつ重要度が非常に高いものであると感じた。遺児たちの心のケアのためにサンドバッグを設置してストレスを発散させたりドラムを置いて遊ばせたりと、遺児に寄り添った細やかな配慮がされていることに感動した。子供たちと歌の交流をすることができ、一人ひとりウガンダネームを付けてもらい文化交流で心の繋がりを作ることができ嬉しかった。</p>
<p>原田 美緒</p>	<p>NGOとJICAはそこまで密には関わっていないだろうと思っていたので、寺小屋、図書館、学生ボランティアのための女子寮などのあしながウガンダの一部の施設がODAで建設されていたことにまず驚いた。あしながウガンダが行っていたエイズ孤児の教育支援や心のケアプログラム、また学生ボランティアの受け入れなど、細かい草の根の活動はNGOだからこそできるものである。そのためウガンダでのNGO進出、また既存のNGOの活動継続に対する一助をJICAが担うことは、資金不足になりがちなNGOにとっても、またODAの多様性の観点からみても、有意義であり必要不可欠なものであると感じた。</p>
<p>安元 久美子</p>	<p>あしながウガンダで出会った子どもたちは英語の発音もうまく、もっと喋りたい、英語を使いたい、という気持ちが伝わってきました。子供たちの笑顔は可愛くて、とても楽しい触れ合いの時間でした。あしながウガンダでは普通の小学校に戻っても大丈夫のように給食はあまり出さずすぎないようにしており、加えて豆のスープを少しだけとトウモロコシを練ったものを少しというのを聞いて、日本の給食と比べてものすごく質素だと感じました。けれどこれは、ここの子どもたちにとっては普通のことだと考えると複雑な気持ちになりました。</p>

【技術協力プロジェクト】コメ振興プロジェクト

概 要

ネリカ米(New Rice for Africa)とは、高収量のアジア稲と病気・雑草に強いアフリカ稲の交配によって1994年に開発された稲。JICAは2008年から「ネリカ米振興プロジェクト」で、ウガンダにおけるネリカ米の普及に取り組んできた。2011年11月からは、新たに「コメ振興プロジェクト」を開始し、コメ栽培技術の開発と農民への栽培技術普及とともに、コメの品質改善に取り組んでいる。

<p>安達 紗奈美</p>	<p>農業従事者が人口の70%を超えるウガンダにおいて、米の生産量・生産性の向上は農家の収入向上に大きく寄与する。アジアの米の多収性とアフリカの米の生命力の強さを持つ米の普及に努める。過去25年で米の生産量は3%増えたが、生産性の向上からではなく、農地面積の増加によるものであるため、生産性の向上につながる支援が、農家の収入向上には不可欠であることを学んだ。日本から遠く離れたアフリカの地で働くJICAの専門技術者の熱い思いに触れて感銘を受けた。また、今後の課題として、技術指導をする日本側の若手人材(日本での就農者)の不足ということが心に残った。</p>
<p>今村 沙織</p>	<p>アジアとアフリカ稲を掛け合わせたネリカ米に注目し、10年間以上にもわたり力を注いでいる。アフリカの雨量と気候に合い、さらに水稲でも陸稲でもでき、いつでも始められるというメリットがあるため、8割が農業に従事しているウガンダ人には導入しやすい。大きな現金収入源になり、貧困削減へすぐに繋がる。主食のトウモロコシとお米では価格が3倍以上違うが、これからの人口増加が想定されるアフリカでネリカ米を普及することは非常に有効であると感じた。ミスターネリカ米こと、坪井さんの熱意に感動した。「100年後のウガンダのために、僕は今ここに懸けているんだ」と。今後、若者の食生活は変わり、今以上にお米の需要は増えるだろう。そうすれば、経済事情だけではなく、教育事情や医療事情にも好転すると期待できる。</p>
<p>内尾 晶子</p>	<p>このプロジェクトではアフリカ稲とアジア稲の交配によって誕生したネリカ米を研究、普及している様子を見学した。普及だけでなく研究もしていることがこのプロジェクトの特徴で、国際協力としては珍しい形である。しかし将来、支援が必要ないほどウガンダが発展するためにはこのような研究の技術は確実に必要だと考える。農業の技術支援は他のどの国よりも日本が優れていると思うので、このように研究まで視野に入れて支援することはとても大切なことだと感じた。ただ、ウガンダでネリカ米や農業支援での日本の存在の大きさを知っているのは農家の一部でしか無いので、多くの人に知ってもらえる機会があればより良いと考える。</p>
<p>金古 浩美</p>	<p>コメ作りは、ウガンダの国家計画に沿った日本の支援の重点分野のひとつであり、日本のお家芸のひとつである。懇親会で坪井さんにお聞きしたところによると、ミスターネリカ米といわれる坪井さんの後を継ぐ人材をウガンダ国内で育成する他、アフリカ各国(エジプト、スーダン、南スーダン、ケニア、ウガンダ、ルワンダ、マラウィ、ザンビア等)にも定期的に積極的に出張をし、アフリカ人の稲作専門家の育成に尽力をしているそうだ。また坪井さんは、会議などの依頼は多いが、会議などには出席しないとのことだ。「会議で米は作れない!」という彼の言葉は大変印象的だった。米文化の無かったアフリカに、換金作物として農家の生活向上にミッションを持って取り組んでいる坪井さんやナムロンゲ研究所の日本人の方々には大変感動をした。</p>
<p>柴山 葉奈</p>	<p>コメをウガンダで普及させる意義を質問させていただいた。ウガンダでは食物として主食としてコメが受け入れられるようになってきている。しかし、国産のコメが輸入品に勝てず、わざわざ外からコメを買わなければならない。つまりウガンダでコメの需要があるということに、普及させる意義があるのでは、ということだった。しかし、ネリカ米自体あまり美味しくなく、単品では売られていないことから、普及させるならばもっと活用性のある品種の方が良いのではと感じた。ウガンダ人の中には研修する際にやはり休んだりやる気のない人もいて、いかに声をかけてやる気を持たせるかが重要と聞いて、技術協力ならではの難しさを知ることもできた。</p>

視察先別報告/ウガンダ共和国

ウ
ガ
ン
ダ

高橋 篤子	<p>日本で情報収集していた時は、「ネリカ米」というブランドが現地で確立しているものだと思っていた。しかし実際は、農家の間では知られているが、市場ではあまり知られていないとのことだった。他のコメとブレンドされ、陸稲という意味の「アップランド」という名前で作られているらしい。自国や近隣国の富裕層が主な買い手だという。</p> <p>このように、現在は自分たちで食べるというよりは、換金作物としてコメは位置づけられている。それならば、コメの先進国である日本が支援しているということをもっと前面に押し出し、「ネリカ米」というブランドを確立していったほうが、商品としてのイメージ向上に繋がり、農家の人たちの収入も増えるのではないかと思った。</p>
永原 実	<p>ここでは日本の農業専門家の坪井さんを中心にネリカ米の研修を行い、ネリカ米を普及させている。これまでの研修人数は1万人を超えている。</p> <p>ここで印象に残ったことは、坪井さんが抵抗のある農家に対し、陸稲は簡単だと言って苦手意識をなくし、まずは小さい面積でいいからやってみて無理そうだったらまた考えればいいと教えているということだった。1人ひとりに親身になって教えていることがものすごく伝わってきて、こういう人がいるから日本とウガンダの間に信頼が生まれるのだと感じた。またこのプロジェクトにおける課題を尋ねたときに、若手の人材が少ないということを知って日本と同じ問題を抱えているということが意外で印象的だった。</p>
畠山 佑介	<p>本プロジェクトは、生産性が高くまた耐病虫性も高いネリカという品種を推奨し、今後5年間で4万人の稲作農家への研修を行い、それを通してウガンダの稲作の生産性を高めることを目標にしている。ここでは、種蒔きや除草についての試験結果を農家に実際に見せて効果を実感してもらう手法を取り入れている。農家の資金獲得のための商品作物であるコメの収穫量の多さを見せることで、稲作による高収入を期待できることを実際に現地の農家の方に示すことができるため、この手法は非常に有意義なものであると思った。稲作の手法の教育と試験結果の公表という2本の柱を上手く組み合わせ、稲作技術の高さを生かした日本らしい協力の形であると感じた。</p>
原田 美緒	<p>アフリカの土地に適したネリカ米は、ただ単に食糧不足を補うためだけではなく現金収入としての役割も果たすため、貧困削減の基盤になるものである。しかしその普及のためには目の前の利益ではなく長いスパンを見越したそれがあることを現地の人たちに理解してもらうことや、彼らのモチベーション維持など、一筋縄ではいかない課題がまだ多く残っているのを感じた。日本国内においても深刻な問題である農業分野における若者の人材不足は、ここウガンダの地のネリカ米普及においても同様に課題となっている。日本の農業技術は世界的に見ても卓越し、強みとなっているというのに後継者が不足しているという事実は日本国内においてもっと注目されるべきだと感じた。</p>
安元 久美子	<p>コメプロジェクトの坪井さんや時田さんら日本人スタッフからは、「陸稲のネリカ米(水稻もある)は簡単だからとりあえず蒔いてみな!」という謳い文句でウガンダ人達に薦めるといってお話を聞き、実際本当に蒔いただけで実がなる様子を見て、日本の水稻しか見たことのない私は驚きました。しかしまだ、ネリカ米はブランドとしての知名度は低く、大量に生産されているバナナが細かいブランドに分かれているのに対し、ネリカ米は陸稲としか認識されていないとのこと。日本のコシヒカリや夢つくしなどのように、ネリカ米がこれから更に広まって欲しいです。</p>

【技術協力プロジェクト】ナカワ職業訓練校

概 要

ナカワ職業訓練校では、1997年から無償資金協力や技術協力により、指導員の能力向上や訓練コース内容の整備など、職業訓練の体制整備のための協力を行ってきた。現在は青年海外協力隊のPCインストラクター隊員が活動している。

安達 紗奈美	<p>ウガンダには公立の職業訓練短大が4箇所、私立の職業訓練所が400弱あるが、ナカワ職業訓練所の有する設備はとても良いもので、2000人の応募者から500名ほどしかこの職業訓練校に入校することができない。ナカワ職業訓練校を訪れた時期が夏休みの期間であったため、校長先生たちが学校運営のためのコースを受講していた。また、電気や自動車の技術指導の場所では、5S(整理、整頓、清掃、清潔、躰)の徹底が励行されていたことが印象深かった。</p>
今村 沙織	<p>以前、ウガンダ主要企業は、外資系の旧宗主国系企業とインド財閥であった。ウガンダ人が自分たちで国を担っていくという意識と実力を持ってこそ、ウガンダの発展に繋がる。ウガンダでは国民の8割が農業に従事しており、産業界による人的資源の開発が重要だ。同校では、就職してすぐに必要となる訓練を行い、即戦力として活躍できるような幅広いコースが整えられている。小学校を卒業してすぐに入る子どももいる程、信頼の厚い、ウガンダ屈指の職業訓練校である。同校の職員の熱意には、若者世代から優秀な人材を輩出していこうとする姿勢を感じた。近年、ウガンダでは初等教育に力を入れてきたが、彼らの働く機会を増やすことが次なる課題である。</p>
内尾 晶子	<p>ウガンダの職業訓練校は日本で言う高等学校と並立して存在するものであるが、ナカワ職業訓練校はその中で最もレベルの高い学校と言われている。視察において印象的だったのは、教師の多くが日本に研修に来ており、日本語を話せる人もいたということだった。また、視察前にはこの訓練校は、経済的または学力的に高校に通うことのできない若者のための、レベルのそれほど高くない学校だと考えていたが、日本の支援もあって機材の数も多く質の高いものが入っていた。ウガンダ人がウガンダの若者たちに質の高い教育をし、将来はその若者たちがウガンダを発展させると考えると、それを日本が協力していることを誇りに思った。</p>
金古 浩美	<p>ナカワ職業訓練校は、40年以上の歴史を誇るウガンダのリーディング職業訓練校としての位置付けで、数年後には、短期大学として国に認定をされるとのことだ。ウガンダは東アフリカ諸国の中でも大変教育水準が高いと言われているそうである。しかし、ウガンダ最大の大学であるマケレレ大学等においてさえ、文学や社会学等文系科目での学位の保持者は多いものの、国の発展に寄与する技術職等は極めて少ないとのことだ。そのような技術者不足を補うためにも、このナカワ職業訓練校は非常に大切な位置付けのように思った。ウガンダの中でも高い技術力を持つ先生方(その多くが日本で一定期間研修を受けている)が情熱を持って教えられていたのが印象的だった。ナカワ職業訓練校は、日本のウガンダにおける支援においてもっとも歴史が長い。その歴史の中で、様々な試行錯誤をしたうえで、5Sなどの考え方が定着しているのではないかと感じた。</p>
柴山 葉奈	<p>専門性のある細かい訓練をしている様子が学校の設備から伺われた。訓練校では就職ガイダンス等を行う以外は就職活動にはあまり介入していないらしく、以前日本の専門家が駐在していた頃は就職率9割だったが、現在は6割に留まっているらしい。(※現在は6割が就職、2割が進学、残り2割が自営もしくは短期雇用とのことである。)</p> <p>就職できなかった人は村に戻り農家の仕事をしたり、たまに訓練したことを生かした仕事をする。そもそも就職の受け皿自体があまりないことが原因のようだ。せっかく訓練をしてもそれを生かせなければ、もったいないような気がした。また、訓練校に入学する人が高学歴化しており、教育を受けていないような貧しい人は対象にしていないという話を聞き、貧困層には他のNPOなどが介入しているのかどうか、しているとすればこれがODAとNPO・NGOとの役割分担ではないかと思った。</p>

視察先別報告/ウガンダ共和国

高橋 篤子	<p>日本と言えば「ナカワ職業訓練校」というイメージがあるくらい、長い支援の歴史と現地での知名度があると聞いた。この近辺のドイツ支援の職業訓練校に比べて、施設や教師陣などの面において人気があるとのことであった。それが関係しているかは分からないが、現在ドイツはその職業訓練校から撤退しているという。日本と他国のODAの違いを垣間見た気がした。生徒を募集する際の手段は、新聞広告や冊子もあるが、メインはHPのようである。</p> <p>しかし、ウガンダでインターネットを利用できる家庭環境が一般的とは思えないため、少し門戸が狭く感じた。また、卒業しても受け入れ先がないという問題がある。人材の育成に加え、雇用の確保が今後の課題だと思われる。</p>
永原 実	<p>ここではパソコンに関しては協力隊の方が派遣されているが、基本的には日本で研修を受けたウガンダ人が講師となり学んだ技術を教えている。ウガンダ人がウガンダ人に指導し、伝えていくという仕組みがいいと思った。また応募率や就職率の高さがこのナカワ職業訓練校がいかに現地の人にとって重要であるか物語っていると思った。またここには学校の校長や教頭先生が学校での運営の効率化のためにパソコンを学びに来ているということであった。日本ではエクセル等できて当たり前だがウガンダではできるほうが稀である。改めて日本の技術支援の重要性を感じた。</p>
畠山 佑介	<p>単に技術力をつければ良いという考えではなく、JICAの理念の人作りを取り入れて人間開発や倫理水準を高めることも重視しており、職業人としての自覚も育てることを目標にした熱意ある教育機関であると感じた。現在では、インストラクターやマネージャーの教育も可能であり、私たちが訪問させていただいた際も中高の校長・教頭がパソコンの研修を受けていた。今後は、カレッジとなることでより高度なカリキュラムを提供して学位を与えられるようになることを目標とするなど、将来像も明確であり、さらなる発展が楽しみである。</p>
原田 美緒	<p>日本人が現地のウガンダ人に対して職業訓練を実施していると思っていたので、実際行って見て、日本で研修を受けた現地の人々がトレーナーとして活躍しており、日本人がほとんどいないことに驚いた。校内では5Sが徹底されておりとても綺麗で、一番に安全を重視している姿も伺えたこと、また一般の学費よりも訓練校の費用の方が安く、就職の斡旋もあることなどから、現地の人達にとってナカワ職業訓練校は非常に整った環境にあると感じた。全体的に、日本からウガンダに対して一方的に援助しているのではなく、日本のサポートを受けながらウガンダ人が中心となって実施している取り組みである印象を受けた。</p>
安元 久美子	<p>ナカワ職業訓練校では「自助努力」を促す姿勢を強く感じました。技術をウガンダの人々に根付かせるためには、一方的な受け身の体勢から、彼らが自分たちで自国の人々に技術を伝えるよう能動的になる必要があります。私たちが見学した際、学校の校長先生等といった教える立場の人達への授業が行われていました。ウガンダが自力で発展できるように協力することが本当の意味での国際協力なのだと感じました。</p>

【無償資金協力・青年海外協力隊】トロロ病院

概 要

無償資金協力により病院施設建設と機材整備の協力を行ったトロロ病院では、現在、青年海外協力隊の看護師隊員が配属され、5S(整理・整頓・清掃・清潔・躰)活動の手法を用いた病院内職場環境の改善活動を実施している。

<p>安達 紗奈美</p>	<p>国民の約40%が絶対的貧困状態にあると言われるウガンダ。高い乳幼児死亡率や妊産婦死亡率など、保健・医療システムの改善は、国家開発計画が掲げる重要課題のひとつである。 看護師として3人の協力隊員が派遣され、5Sの活動普及に努めた結果、整理整頓が行き届いた薬保管、診察室となっていた。また、自分たちの手で病院を変えるという自立した活動を間近で見ることができ、継続的な支援がゆっくりではあるが、結実していると実感した。</p>
<p>今村 沙織</p>	<p>最初に目に飛び込んできたのは、病院の建物の中庭にいる人の多さだ。まるでピクニックをしているかのように、家事洗濯など家族で生活をしている様子だ。彼らは、患者の世話をするために自分の家から大勢の家族で来ているのだ。看護師が不足しているため、入院時はベッドが用意されているだけで、十分なケアはされていない。医薬品や施設なども不足しているので、望ましい治療を受けているとは言い難い。しかし、そこで必要なのは、物資の支援だけではなく、どのように現実にある問題を解決していくかという方法であった。衛生状態が悪かったトロロ病院では、改善するために5S活動を導入した。医師や看護師が5Sチームを作り、自主的に改善していく姿勢が見え、不衛生であった病院内も少しずつ改善されている。</p>
<p>内尾 晶子</p>	<p>5Sを徹底させるための様々な院内研修があり、それぞれが週・月・年に1度行われている。実際に拝見した写真で2007年の様子と比べると、現在の病院では当時よりもずっと5Sが徹底され、清潔であった。そして、公立の病院の中ではサービスの質もとても良いそうで、トロロ県以外からも患者が来るそうだ。しかしながら、蚊帳がすべて揃っていない病棟や清潔なものと不潔なものを同じ場所に置くことなど、改善の余地も多くあると感じた。最後に病院の事務長が「この病院には病院の努力と日本の支援(努力)の両方が必要である」とおっしゃっていたのだが、確かに今はまだ技術的にも資金的にも日本の支援が必要だと感じた。だが、この病院の方のポテンシャルは高く、日本の支援の成果がとても出ているとも感じたので、近い未来、日本の支援が必要なくなることを願う。</p>
<p>金古 浩美</p>	<p>トロロ病院は衝撃の連続だった。一言でいうと汚い。ないものが多い、病院とは言えないほどの衛生レベルでアフリカの保健衛生の現状を垣間見られた気がした。 病院での問題点は色々あったが、清潔なものと不潔なものが混在されていたり、5Sのモデル病院とは言えないレベルの衛生状態だったように思う。アフリカの病院では院内感染が非常に問題になっているそうだが、院内感染があっても想像に難くないというような状況であった。特に、院長が問題としてあげていたのが、看護師などのモチベーションの低さであるそうだ。スタッフ自身が、改善をしなければならぬという自覚を持たなければ良い方向には改善されないが、給料があまり良くない看護師たちのモチベーションを昇給等以外で変えるのは非常に難しいとのことだ。</p>
<p>柴山 葉奈</p>	<p>病院の中で5Sが徹底されているのは日本では当たり前のこととして過ぎてきたが、ある程度は予想していたものの、実際に病院内での清潔・不潔の区別が徹底しきれていない様子を見て驚いた。しかし、5Sが根付く前はもっと衛生環境が悪かったことを知り、病院スタッフの努力の結果が感じられた。 5Sの内の整理・整頓は、色つきシールの使用など、視覚的にきれいにすることであり、モチベーションアップにもつながるため導入しやすい。その一方で、床に患者の私物が置いてある、手洗い場にペーパータオル等拭くものがない、土足で病棟に入れる環境、これらの清潔に関することは治療や回復に大きく影響することであり重要であるものの、視覚的に不潔だということが分かりにくいためあまり徹底されていないように感じた。</p>

視察先別報告/ウガンダ共和国

高橋 篤子	<p>日本の無償資金協力により手術棟、外来棟、管理棟などのハード面が新設されたほか、5S運動を励行してきた病院である。</p> <p>今年3月には5Sが政府の事業に組み込まれたということで、5Sを励行してきた日本のソフト面からの支援が評価されたものと考えられる。</p> <p>しかし、日本人である私達の感覚からすると、普段、私たちが病院に求める5Sには一部を除いてまだ程遠いものであった。5Sのパイオニア的存在であるトロロ病院でさえこの状況であるから、他の病院のことを考えると悲惨である。ハード面に加え、ソフト面の支援の重要性を実感した。</p>
永原 実	<p>ここで一番感銘を受けたのは、5Sの徹底である。5Sにより何をどこに置くかということが明確にされ、薬の在庫の管理や患者さんのデータ管理を行えるようになった。この5Sはトロロ病院では2007年から実施されていたが、初期のころはモチベーションがあまり上がらずそれほどしっかりと行われていなかった。しかし、2009年に協力隊の方が来られて皆に促していくにつれて徹底されていくようになった。この話を聞いて改めて協力隊の偉大さを感じた。また最後に案内してくれた現地の方が、日本からの支援に感謝していると言ってくれたことが印象的であった。</p>
島山 佑介	<p>ここで驚いたのは、2007年から5Sを導入するプロジェクトが開始されていたにもかかわらず、ゴミ箱を置く位置を示すシール貼りや4分割された掲示板での情報整理が行われていたのが5つある診察室の内のたった1つのみであったことである。</p> <p>たしかに、全く5Sの概念がない国においてこれを導入しようとするには苦労もあるであろうが、政府が5Sを公式政策として実施しておりこの病院がその有効性を示してきたというのであれば、導入のスピード自体についての改善が望まれると感じた。</p>
原田 美緒	<p>2007年から5Sの取り組みを行なっているとのことであったが、まだまだ経過途中である印象を受けた。「整理・整頓」に関しては、床にテープで印をつけてベッドや医療器具の位置を固定していたりゴミを分別していたりとそれなりに進んでいたが、「清掃・清潔」に関しては、手洗いなどに対する注意喚起が患者に対しても行われてはいたものの、床が土まみれであったり清潔な物と不清潔な物が一緒にあったりと、課題が山積みであると感じた。施設の老朽化や医療器具不足、人材不足などにおいても日本の支援継続、支援増加が必要であると痛感した。</p>
安元 久美子	<p>綺麗に並べられた薬類に私は感動しましたが、それに対し、看護を学んでいるメンバーの一人が日本では当たり前のことであると指摘し、土だらけの待合室の床を見て驚いていました。</p> <p>もし私一人でウガンダに来ていたら、ただただ綺麗に並べられた薬類を見て感動してただけで終わっていたと思います。それでも隊員の方の努力により、ほとんどのベッドに蚊帳が付いていました。後から視察する都会の病院には設置しておらず、どの病院にもそれぞれまだ解決していくべき問題がたくさんあるのだと思いました。</p>

【青年海外協力隊・草の根無償】ブワヤ村

概 要

青年海外協力隊(村落開発普及員)が、地域村落コミュニティの活性化を目指している現地NGOに配属されており、生活改善のための提言活動や、現金収入向上のための野菜栽培支援を実施している。2011年には、草の根・人間の安全保障無償資金協力で重力式水道を建設し、住民の安全な水へのアクセスを改善した。

安達 紗奈美	<p>若杉さんの活動のひとつである農業支援では、外貨を得ることを目的としてグループでマーケティングを行い、山を越えた先のケニアで販売している。案内されたキャベツ畑は日本で目にするキャベツ畑とは違い、丘のような緩やかな斜面にキャベツがバラバラと点在していた。植物が育ちやすい肥沃な土地と気候によって、効率にこだわらずに作物を育てることのできる環境なのだ実感した。日本は水と農村開発の2つのプログラムを支援していて、この村には8000リットルを貯水できる真新しい水タンクとポンプがある。この村で暮らす人々は人的にも、資金的にも援助されることに慣れているのか、「援助のお陰で暮らしが豊かになった」という謝意の言葉と「これからも人的・資金的な協力をお願いします。」という村長の言葉が印象的であった。</p>
今村 沙織	<p>村人はウガンダ式の声を立てて歓迎してくれた。笑顔が絶えない村人という印象の一方で、子どもたちのお腹が膨らんでいることが目立ち、その原因は食事の栄養バランスの偏りであるようだ。そこで若杉隊員は、この実情を踏まえ、収入にもなるようにキャベツやオクラなどの野菜の栽培の指導を活動に加えた。この地域では、くみ上げた水を貯蓄したタンクをいくつかの村で共同で使用する。運ぶのに片道1時間以上かかる場合もあること、タンクの水は汚れた水で衛生的であるとは言えないことが問題として挙げられる。そこでODAによりブワヤ村の飲料水として水タンクが支援された。村人の「ありがとう」という声には、劇的な生活の変化がうかがえた。しかし、便利になって失う習慣もある。昔は長い道のりで見つける男女の出会いがあったようだ。</p>
内尾 晶子	<p>青年海外協力隊の村落開発普及員として女性グループの野菜作りの支援、農協作りなどをされている若杉哉恵氏の活動を視察した。任地はケニアの国境近くの自然豊かな村だった。この村では青年海外協力隊の派遣のみならず、8000Lの水タンクを作る事業も行われていた。村人達はこの水のプロジェクトの重要性を強調し、日本政府に感謝していた。この水タンクが無かったとき、村の女性と子どもは2~3時間かけて重たい水を運んでいたと聞く。私の力では同年代の少女が持っていたジェリカンをその場で持ち上げることすら困難であった。このジェリカンを2時間運ぶなんてとても信じられないことで、村人が水タンクの重要性について強く語ることの理由を垣間見た気がした。また、この村には栄養失調だと思われる子ども達もいて、電気も少なかったのでまだまだ必要な支援が多いと感じた。</p>
金古 浩美	<p>日本の草の根無償資金協力によって作られた水タンク、井戸について視察した。しきりに、日本からもっと支援がほしいといていた姿に違和感を覚えた。井戸が作られ、住民の生活の質が格段に向上したことと、圧倒的な貧困の中で暮らしている村民の姿は、イメージしていたアフリカそのものだった。子供たちのほとんどが裸足、服はボロボロだった。また、栄養失調の子供たちも多いうでお腹のふくれた子供たちが多かった。生活の質が向上し、都市での生活を楽しんでいるカンパラのウガンダ人からはかけ離れた、もうひとつのウガンダの姿を若杉隊員の活動視察で目にしたように感じる。</p>
柴山 葉奈	<p>実際に村に住み、村民との信頼関係を持ち、村民と対等な立場で活動している若杉さんの様子を見て、このように村民ととても近い形で活動を行うことは、目に見えない援助ではなく、その協力隊と村民との直接の信頼関係の上に成り立つ援助なのだと感じた。協力隊がその村を好きになり、村民を信頼し、村民の一部となって援助を行うこのような村落開発というODAプロジェクトは、他のプロジェクトに比べると小さいかもしれないが、すごく大切なことだと思う。地域に入り込み密着し、その地域をまずは自分で体感して知ることが、その地域を支援することの第一歩だと思うからだ。</p>

視察先別報告/ウガンダ共和国

高橋 篤子	<p>若杉さんはウガンダ人と一つ屋根の下で共同生活をしながら、地元住民の収入向上のための野菜作りやクラフト販売に力を入れているという。資金や物資などの支援が多い中、こうした協力の形もあるのだと知った。異国の地で文化の違う人々と暮らすのはどんなに大変なことだろう。しかし、現地の人たちに「カナ」と呼ばれて慕われている若杉さんは生き生きとして見えた。</p> <p>また、日本の草の根無償資金協力で建設された給水タンクを見ることができた。8000Lの給水タンクから、4km先の3つの村まで給水路が設置されているという。多大な時間を要し、生活や教育機会の面で負担が大きかった水汲み作業が、この事業により大幅に軽減されることは大変有意義に感じた。</p>
永原 実	<p>協力隊員は、普段の活動は多岐にわたるが、農林水産に関わる住民の組織化による食物の収入向上の手伝いや、母子健康促進などを行われている。農村地では女性の地位が低かったり、栄養に偏りがあったりといった様々な問題を抱えている。そこで協力隊の方が農家グループを作り収入向上を支援したりしている。今後は栄養改善と収入向上のため、トマトやピーマンを育てたり、農協をつくることといったことを計画しているそうだ。作物が盗まれてしまうなど問題はあがるが、店一つない地で現地のウガンダ人とともに生活し、悩みながらも現地目線で問題の解決に取り組んでいる隊員の姿にとても感銘を受けた。</p>
畠山 佑介	<p>この村では視察中に村民から援助を求める声がかかなり多く、援助慣れしている様子が伺えたので、援助と自助努力の線引きが非常に難しいことを痛感した。また、若杉隊員が6名の村人とキャベツを栽培した農場では、盗難被害や、他の作業のため人が集まらなかったりしたために失敗したという話をお聞きして、協力隊員の活動に対する苦勞がうかがい知れた。国際協力の現場において、若杉隊員のようにコミュニティの中に溶け込んで村人から信頼を得るためには、真摯な態度とコミュニケーション能力が重要であると感じた。</p>
原田 美緒	<p>若杉さんの行っていた活動は、肉体的にも精神的にも容易ではないものだという印象を受けた。農協作りや女性グループに対する支援などの幅広い活動を日本人である若杉さん一人で受け持つということは、村落の人達の信頼が何よりも必要であり、いかに彼女が現地の人達に受け入れられているのかが見て取れた。これからの方針である、野菜を個人で育ててグループで売る、という運営をすることによって一人一人が責任を持てると同時に、グループとしての利点も活かせるものだと感じた。村落開発は、まだ人々の意識、住環境や設備においても発展途上であるが、よそ者がどこまで介入するべきなのかが非常に難しい分野であると感じた。</p>
安元 久美子	<p>若杉隊員の活動視察では、女性との交流会や村の給水タンク、民家、若杉さんが村の人と耕している畑を見学しました。洋風の大きな家を見た後に、小さな窓の付いた一般の小さな家を見学させてもらいました。最初に大きな家を見た後に、一般的な小さな家を見ると全く違っており、二つの家の距離が近いのと相まってさらに個々人での貧富の差があるように感じました。給水タンクは学校の屋上にあるような大きさでしたが、それで三つの村に水を送っていました。蛇口から出る水を嬉しそうに見る村の人を見て、日本がどれだけ水を垂れ流しにしているのか、日本での自分の生活はどうだったか考えさせられました。</p>

【有償資金協力】ブジャガリ送電網整備事業

概 要

アフリカ最大級の民活電力事業であるブジャガリ水力発電所(250MW)に連系する送電線及び変電所を新設・増設し、「官」と「民」の適切なパートナーシップにより同国の経済・社会の発展にとって必要不可欠な電力供給システムを整備する。
※アフリカ開発銀行との協調融資。工事はインドの企業が受注。

安達 紗奈美

前日に夜の街を見て、暗闇の深さと電気のついた家屋の少なさを見ていたので、農村部の電化率は都会と比べてまだまだ低いものであることがわかった。
年に3~4回モニタリングを行ったり、周辺に住む人々の環境社会への配慮も合わせて進めながらの開発支援。
途上国の発展のための支援はどの国や組織も協力的で反対派などいないと思っていたが、開発にはいい面だけがあるのではなく、環境負荷が大ききという理由で建設や協調融資に反対したり、賛成しない組織があるということを知った。今回は電気が作られて便利になっている地域を視察したが、今後新しく別の発電所が建設されることが検討されていることを知り、その地でも便利さと引き換えに何かを失ったり、傷ついたりしていることがあるということをおぼろげに思い出した。

今村 沙織

日本の資金は国際協力には欠かせない重要な支援であると現場の監督は言う。村から町にかけて電線は2倍、3倍に増え、人口が上がるに連れて需要も上がっている。インフラを支える電力は、停電が1日に何度も起こり、十分には足りていない。しかし、外貨獲得のための手段にしようと他国に売却するための電力を作ろうとする思惑もうかがえたように感じ、改めて国際協力の透明性は現地や自国に必要であると感じた。

内尾 晶子

ブジャガリ送電網の流す電気は水力発電で作っており、協調出資として日本も送電線の支援をしている。この発電所の建設の際に約2000人の雇用が生まれ、ウガンダ全体で390MWだった発電設備容量が640MWまで増加した。国際協力の中でも有償資金協力は国民に見えにくく、私も国際協力レポーターになるまで全く知らなかった。しかし今回、有償資金協力の仕組みを知り、無償資金協力や青年海外協力隊等の草の根の活動とともにこのような国単位への協力も行っていることを嬉しく思った。そして、このような協力があることを国民にアピールする必要性があるとも感じた。

金古 浩美

円借款によって作られた送電網は、水力発電所地域の住民の生活向上、また電力の安定供給を通じてのウガンダの経済、社会発展に寄与しているものであると、案内をくださった南アフリカ出身のジョンさんの説明を聞いていて感じた。この発電所は、地域に雇用も生んだ。一方で、ウガンダ人を雇い、指導するにあたり、ジョンさんは、彼ら自身のモチベーションの確保と、施設などを清潔に保つことを定着させる点が難しいとおっしゃっていた。発電所のような重要な施設でも、5Sのように施設をより長く使うことができるように指導がなされたらよいと感じた。

柴山 葉奈

ここでは「環境社会配慮」や、発電所やダム建設によって家を失った人への補償がなされている。「公共の福祉を住民に押し付けるわけにはいかない。だからこのような補償をする。」とおっしゃっていた。住民の生活を便利にするためのものであるはずが、住民の生活を奪うものであってはならないと思うので、発電所の建設によって家や仕事を失ってしまった人たちに対して、それに見合う補償がこのようにきちんと行われていることを知って少し安心した。また、送電網を見学して有償資金協力の規模の大きさや与える影響の大きさ、関わる人の多さなどに驚いた。

視察先別報告/ウガンダ共和国

ウ
ガ
ン
ダ

高橋 篤子	<p>現在、ウガンダの電化率は、首都カンパラで約40%、地方では10%を切っている。この低い電化率はウガンダの発展に大きな影響を及ぼしており、例えばウガンダでは国民の8割が農業に携わっているが、電気が通っていないと脱穀機などの機械も使えない。農業にかかわらず、電化製品を寄付されても、利用できないという現実がある。そして、何といたっても医療現場や企業進出に大きな影響を与えるため、電力の普及が急務だと思われる。</p> <p>一方で、日本の資金協力で行われた事業でありながらインドの企業が受注しており、なぜ日本企業が受注していないのかという疑問も残った。</p>
永原 実	<p>ウガンダでは電力不足が問題となっている。電力は国民の生活や経済・社会の発展に不可欠なものである。ここでは水力発電が行われていた。それはナイル川という広大な自然を利用したウガンダに合った発電方法である。日本の円借款で送電網が作られた。この送電はトロロ、ナルバシ、カワンダと3つの地域に送られている。</p> <p>視察中も何度も停電に遭い、電力不足は身をもって感じていた。普段も停電は頻発しているようで、停電が起こった際はろうそくの火をともしたりして生活しているようだ。この発電所の電気はウガンダの発展には欠かせないものであると感じた。また保障はきちんとしてあるが立ち退いた人もいるという話を聞き、その人たちへのケアが重要であると感じた。ここではそういう人たちへの配慮はきちんとしていていると感じたが、発展のために不利益を被る人がいてはいけなと改めて感じた。</p>
畠山 佑介	<p>他の視察先と異なり、日本人が技術協力しているわけではなく、日本の資金がウガンダのインフラ整備に使われる形での援助であった。円借款の場合に工事を受注するのは日本企業に限らないので、ODAを日本の国益のために使用すべきであるという立場の方からの反対意見が上がるのが容易に想像できた。ウガンダの発展により間接的に日本国民に対しても利益が生ずるともいえるし、そもそもODAは日本の利益のためだけに行われているのではないとも反論できると思うが、それ以前に、円借款に関しても技術協力等のように国民に対する情報発信及び説明が求められると感じた。</p>
原田 美緒	<p>円借款事業としては唯一の視察であったが、その規模の大きさに驚いた。発電所、送電網、変電所に対して様々な国や銀行が協調融資をしており、人々の生活の基盤となる「電力」の重要性を感じた。国内の電力も十分に足りていない中、今後外貨獲得の手段として電力を外国に売っていくこと、開発を進めていく上でナイル川の滝がなくなったり住民に場所を移動してもらったりすること等、規模が大きいのがためにないがしろにしてしまいがちな現地の人々へのきめ細やかな説明責任を十分に果たしているのか疑問に思った。どこまで情報提供がなされていて、どこまで国民の理解が得られているのか、という所も知りたい。</p>
安元 久美子	<p>水力発電所は私にとって最も印象に残った視察地です。日本では国際協力と聞くと草の根ボランティアや無償資金協力のイメージが強かったです。</p> <p>日本の発展途上国への支援額は第5位です。にもかかわらず、印象が薄いことが不思議でした。今回、日本政府がウガンダ政府に貸し出した資金を使用し建設された送電線を見ましたが、水力発電所全体の建設の権利を得たのはインドであり、日本が支援したことを示す国旗のマーク等は見受けられませんでした。日本の協力を前面に押し出すことができないため、今ひとつ資金協力が地味な扱いになってしまっているのだと感じました。</p>

【民間企業】フェニックス・ロジスティクス社

概 要

ウガンダにおいて唯一オーガニック・コットン（有機綿）のみを使用した有機綿シャツの生産（紡績から縫製まで）のすべての工程を一貫して自社で行っている企業。

※ODAとは直接の関連はないものの、かつて国際協力銀行（JBIC）の国際金融等業務による融資を受けた経験があり、民間の立場からウガンダ経済に貢献してきた企業であることから、今回、視察先に加えました。

安達 紗奈美	<p>柏田社長が初めてアフリカの地にシャツを売りに行くときに言われた「裸の国になぜシャツが売れるんだ」という言葉。50年たった今でもアフリカはやっぱり日本からは遠い国で、日本人のアフリカに対するイメージはそんなに変わっていないのではないかとそれが一番の課題なのではないかと考えさせられた。実際ウガンダに来て、抱いていた町の発展や人々の暮らしのイメージは大きく変わった。縫製工場では、ウガンダで実った原料である綿花から、糸、布、縫製とすべての工程がウガンダの人の手によって行われる。長い年月をかけて柏田社長とフェニックスロジスティクス社で働くウガンダの人がともに働き作り上げてきた成果だと感じた。</p>
今村 沙織	<p>今でも熱くウガンダを愛し、国際競争を相手に闘っているのはフェニックス社の柏田社長だ。「安価な中国製品とだって戦える。なぜならば、絶対的に価値のあるオーガニックコットンが、私たちにはあるのだから。」イギリスやインド系の企業が目立つ時代に、ウガンダの豊富な環境下で育つ品質の良い綿花に注目し価値をつけ、オーガニックコットンで合併企業として会社を建て直してきた。社内教育は「躰」。5S活動を徹底して行い、ウガンダ人の熱い精神に火をつけ会社を発展させた。政情が不安定な中、共に乗り越え、現地での雇用を多く生み出したこと、そして、ウガンダ人が誇りを持って働くことができたことは、まさに、現地に根付いた取り組みとして、“ウガンダの父”と呼ばれ、ウガンダ人に愛されている。</p>
内尾 晶子	<p>この工場が一番感動したのはミシンでTシャツを作る工程の所で、ミシンがきちんと整列された場所だった。そこは以前読んだことのある柏田社長の本に描かれていた場所で、50年間全く変わらず今も存在し、多くの女性が働いており、すべてはここから始まったのだと感銘を受けた。また、柏田社長は躰を徹底されており、工場は非常に綺麗でゴミ一つ落ちていなかった。他の視察先でも日本の整理整頓を取り入れて努力されていたが、ウガンダ人だからできない、日本人だからできる、というような差はなく、その人がやるかやらないか、その人をやる気にさせるかさせないか、それだけだと感じた。</p>
金古 浩美	<p>フェニックス・ロジスティクスで何よりも印象に残っているのは柏田社長にお話を伺った時間である。安い中国製品に打ち勝つ、高品質なウガンダ綿を使ったオーガニックコットンのTシャツの生産、社員の人材育成をしておられる柏田社長の姿に私たち自身が勇気もらったように思う。ヤマトシャツの海外進出としてウガンダに工場を開いて半世紀、ウガンダの様々な政変を乗り越え、2000年ムセベニ大統領に依頼され、再びウガンダに戻り工場を開いたそうだ。その際つけた名前が「フェニックス=不死鳥」だそうだ。柏田社長は、ウガンダ人への教育の中で何よりも大切にしていることは「躰」だとおっしゃっていた。私たち日本人には成長の過程で根付くこの考えも、ウガンダ人が理解し、彼らの中に根付かせるのは非常に難しいという社長の言葉が印象に残っている。</p>
柴山 葉奈	<p>民間企業としてウガンダに貢献している柏田さんのお話を聞いて、ウガンダの人と共に歩み試行錯誤してきた柏田さんの様子に感動した。ODAは技術提供や資金協力だが、柏田さんの場合、何かを提供するというよりは一からウガンダ人と共に開発し、歩んできた。そのような協力の形は、民間の企業であるからこそできるものだと思う。政府間協力では共に歩むというよりは、ある程度成果が求められる分、そのような形は難しいのかなと思う。しかし、もともと地域や人に密着していた民間の企業であるからこそできる協力もあるのだと思う。政府からの支援、民間からの協力、形が違うからこそ役割分担として両方必要なのだと改めて感じた。会社に対する柏田さんの情熱を感じ、この情熱に惹かれて多くの人がこの会社に引き込まれた感じが感じられた。</p>

視察先別報告/ウガンダ共和国

高橋 篤子	<p>シャツ工場を見学させてもらったが、日本の工場のようにきちんと整備されており、約350人の従業員にとって働きやすそうな環境であった。柏田さんの話によると、やはり「整理・整頓・清掃」が基本であり、従業員にもそのように指導しているとのこと。「トロロ病院」視察の際も感じたが、私達が想像する以上に、ここウガンダでは整理・整頓・清掃の指導が必要なのかもしれない。</p> <p>民間企業として国際協力に貢献している柏田さんを、同じ日本人として誇りに思うと同時に、民族性や文化の違う国で起業することの難しさを感じた。それらを乗り越え、もっとこの地に企業が進出し、共に発展していけないものかと思った。</p>
永原 実	<p>フェニックス社で生産過程を見させていただき、その後社長の柏田さんのお話を聞かせていただいた。柏田さんは50年近くウガンダにおられる方であり、多くの大統領と知り合いであった。そこではネットで掲載されていることとは異なる実情などを教えてもらった。</p> <p>いかに間接的な情報より自分で直接見て聞いて情報を得ることが重要であるか、ということが思い知らされた。私自身ウガンダに来る前、ウガンダは貧困がはびこっているという印象しかなかった。しかし、貧困はたしかにあるが自然豊かで温かい人たちがいるということは来てみなければわからなかった。また、政府だけではない、民間レベルでのウガンダとのつながりを見て、ウガンダを近くに感じることができた。</p>
畠山 佑介	<p>柏田社長は、ウガンダで50年以上繊維業界をリードしていらっしゃる方で、その情熱に敬服した。賤をコアとする日本の精神を導入したウガンダでの企業運営によりウガンダ人に対して職業意識教育を行っていることには、今後この国を変えていく大きな力が込められていると感じた。日本企業がウガンダに進出することに対してはまだハードルが高いと思われるが、それはウガンダに対する情報不足が大きな原因になっていると思われる。</p> <p>JICAとしても、JETRO等他の関係機関との棲み分けが難しいところではあるが、国際協力の最前線に立っているという強みを生かして、日本企業の進出による開発援助という観点から有益な情報をさらに積極的に発信していくことが望まれる。</p>
原田 美緒	<p>工場内がとても綺麗でゴミ一つなく、5Sが徹底されていたことに感銘を受けた。また柏田社長の、「綺麗にすることは精神状態にまで影響を及ぼす」という言葉がとても印象的であった。</p> <p>ナカワ職業訓練校もそうだが、5Sが現地の人にきちんと習慣づいていることがうかがえ、それが成功の秘訣なのだと感じた。100%オーガニックのコットンで作られたTシャツは質が良く、現地の人達の間でも広く認知され普及していて、長い歴史を通して得た信頼が基盤となっているのだと感じた。現地の人たちの顔が生き生きしており、17時のベルがなるとニコニコしながら帰っていく様子から、とても充実して働いているのが伺えた。</p>
安元 久美子	<p>フェニックス社では従業員の教育にも力を入れており、「賤」を意識した柏田社長の教育姿勢には感銘を受けました。たくさんの機械があり、何回も綿を裂き、繋ぎ、裂きを繰り返し強く上質な糸を紡いでいました。中国製品など低価格を売りにしたものに値段では対抗できなくても品質では絶対に負けないという自信を持ってらっしゃいました。柏田さんの言葉で印象深かったのは「得意分野を活かすべき」というものです。日本のODA活動に対しての答えではなく、大学生のうちにやっておくべきことに対する答えでしたが、Yシャツの価格ではなく品質で勝負する柏田さんの姿勢を表しているように思います。</p>

【BOPビジネス連携促進・青年海外協力隊】エンテベ病院

概 要

エンテベ病院では青年海外協力隊の看護師隊員が配属され、5Sの指導を行っている。さらに2011年1月からは、BOPビジネス連携として、サラヤ株式会社が、アルコール手指消毒剤の本格導入に向け、受容性の調査と啓発活動を実施している。

安達 紗奈美

日本とは異なる病院事情に適応させて手洗いを根付かせる活動をしている。例えば、ベッドの出し入れが多いので、アルコールスプレーをベッドではなく壁に設置するなど。現在はアルコールスプレーやジェルを輸入して使用しているが、いずれはウガンダで廃糖蜜(はいとうみつ)を原料として、手指消毒用のアルコールスプレーを生産する計画があり、ものを売るだけに留まらず、社会に根付き、雇用創出をし、ウガンダの中で生産と消費のサイクルを創ろうとする姿に感動した。

今村 沙織

エンテベ病院では、試験的にBOPビジネス事業が開始された。サラヤ株式会社のアルコール消毒だ。医者が患者ひとりひとりに対し清潔に診療するということが可能になり、患者自身にも使用してもらい院内感染を防ぐことができる。

現在は日本で生産したものを送っているが、今後は原料の調達から生産までをウガンダで行う予定だ。雇用を生み出し、現地のを活かすことで、経済を動かす新たな効果を狙える。消毒することが直接命を守ることに繋がるとは驚いた。ビジネスと結びつくことで現地へ与えるインパクトは大きい。

内尾 晶子

エンテベ病院は空港から近く、ヴィクトリア湖にも近いので利用者が多い。また首都から近く、青年海外協力隊員が派遣されていることもあり、トロロ病院と比べると綺麗で整理整頓もされていた。そして、この病院はBOP連携の技術支援としてサラヤ株式会社のアルコール消毒液が多く取り入れられていた。水道が故障している場合でも消毒液さえあれば99%の殺菌ができるので助かっていると聞いた。現在は日本製のアルコール消毒を輸入しているが、今後は現地で生産したアルコール消毒液を使用し、コストを抑えることが目標だとサラヤ株式会社の方から伺い、企業が国際協力へ関わることの重要性を感じた。企業が直接関わることで現地の要請を聞くことができ、実現に動くことも可能になる。ウガンダでよく聞いたのだが、今後は企業に関わる国際協力が必要になると感じた。

金古 浩美

病院などの医療機関では一般家庭よりもさらに多くの水が必要になるが、ウガンダの多くの病院では雨水をためて使っているようだ。水道があるところでも、水が出なかったり故障していたりとウガンダでの水の確保は難しい。そこで、石鹸を使った手洗いではなく、サラヤ株式会社のメイン商品であるアルコール消毒液を用いた消毒により、院内感染などを防ぐ取組を始めたようだ。病院のスタッフが口を揃えて、アルコール消毒液の使用は手洗いよりも格段に時間短縮できることなど、アルコール消毒液の利点を述べられていた。このように、日本の企業が自社製品を用い、BOPビジネス、CSR活動に取り組んでいくことは素晴らしいことであると感じた。

柴山 葉奈

病院には、看護師は1つの病棟に1~3人しかおらず、医師は診療所と掛け持ちしていて忙しい、またはやる気がないなどの理由でいたりいなかったりするらしい。このようなスタッフ不足から、初めの診察はタダで働いてくれる医学生のボランティアが行うのが基本であると聞いたが、学生は医師としては未熟であるため、きちんと診察が行われているのか気になった。人員や資金不足のため仕方ないことだが、いつか必ず改善が必要な部分だと思った。また、医療道具が部屋に見当たらず、気になって聞いてみると、道具は盗まれるため医師と患者が揃ってから運んでくるようだ。カルテは、フォーマットを作っても普通の用紙として使われてしまうために、結局フォーマットはあまり使わず真っ白な用紙に書き込むらしい。このような、日本とは違う条件の中で病院としての質を上げるには、指導や教育を徹底しつつ様々な工夫のある支援が必要であると感じた。

視察先別報告/ウガンダ共和国

ウ
ガ
ン
ダ

<p>高橋 篤子</p>	<p>日本の民間企業であるサラヤ株式会社のBOPビジネスを見ることができた。現在、サラヤ株式会社はこのウガンダで手指消毒剤をはじめとする衛生製品の事業を展開しようとしているが、そのパイロットとして選ばれたのがこの「エンテベ病院」である。簡単に言うと、病院側はアルコール手指消毒剤とそれに関する知識を提供してもらい、サラヤ側は病院にビジネスモデルになってもらいモニタリングとフィードバックをしてもらうというものだ。</p> <p>このような、有償でも無償でもない、相互にとってメリットのある支援・協力の現場を実際この目で見ることは、大変貴重な機会であった。ただ与えるだけ、与えられるだけという従来との関係ではない、こういったBOPビジネスという新しい関係が今後も増えていくことを期待したい。</p>
<p>永原 実</p>	<p>ここでも目に付いたのは5Sの徹底であった。ウガンダ人自身が衛生問題や感染症の問題に積極的に取り組む姿勢を見て感じ取ることができた。ここでは至るところにアルコール消毒液が置いてあった。それは大阪の企業「サラヤ」がBOPビジネスとしてJICAと連携してアルコール消毒液を普及しているからだ。ウガンダでは安全な水を十分に得ることは難しい。清潔にすることが大事な病院にとってアルコールがいかに画期的で役に立っているか計り知れない。材料の問題などはあると思うが市民にももっと普及していけばいいと感じた。</p> <p>5Sにしてもアルコール消毒も日本ではやって当たり前であるが、ウガンダでは知識や物がないうえに日本での当たり前が当たり前ではないのである。だからこそ日本が協力し、改善していけることはまだまだあると感じた。</p>
<p>畠山 佑介</p>	<p>必要な情報を提供するという民間連携を通して日本企業のウガンダ進出を促進して、それによってウガンダの衛生環境を改善していくという取組みであるが、これは日本企業が有する技術をウガンダに導入して開発が進むという大きな意義を有した援助の形態である。患者が消毒後に素手で食事をするので、苦い味がする消毒ジェルが嫌われてしまったというまさに現地に入らなければ想像もできないような困難に直面しても、それに対応する手法を検討するなどという民間企業の逞しさを心強く感じる視察となった。</p>
<p>原田 美緒</p>	<p>部屋の前、トイレの前、壁、ベッドの柵等々、サラヤのアルコール消毒液があらゆる場所に設置されていた。ベッドの出入りが激しい場所では壁に設置する、アルコールの匂いが強いと食事の際に食べ物に匂いがつく(手で食べるため)ので匂いを弱めるなど、現地で実験的に取り入れて試してみないとわからないことが多いのだと感じた。</p> <p>その試験期間にJICAがBOPビジネス官民連携プロジェクトとしてサラヤ株式会社に対して資金援助をしていることは双方にとって有意義なことであり、ウガンダに対しても衛生面、また(今後生産をこちらで行うとのことから)雇用面においても貢献でき、WIN-WIN-WINの関係が成り立つ素晴らしいものだと感じた。</p>
<p>安元 久美子</p>	<p>エンテベ病院は首都の近くにある病院ですが、郊外にあるトロロ病院が抱える問題と同じ問題を抱えていました。まず5Sの徹底の必要性、そして慢性的な資金面の不足です。院内は綺麗な建物と古い建物の差が激しく、古いものは築100年近いそうです。</p> <p>一方トロロとの大きな違いは、サラヤの消毒液が設置されていることです。日本でも学校や公共施設でよく見かけるものがエンテベ病院の診察室や病棟にたくさん設置しており、驚きました。それを「変な味がするから嫌だ」といって患者さんが嫌がったと聞き、さらに驚きました。なぜならこちらの人々は手でも食事をすることをすっかり忘れていたからです。自分たちの生活に当てはめてしまい、ウガンダの人々の生活を私はすっかり忘れていました。</p>

【草の根技術協力・青年海外協力隊】エンテベ動物園

概 要

横浜市立動物園(よこはま動物園ズーラシア、野毛山動物園、金沢動物園)が希少動物の保護・繁殖・獣医師による野生動物の診断や治療、教育普及活動についての知識や経験を「ウガンダ野生生物教育センター(エンテベ動物園)」に技術移転する草の根技術協力を実施している。同センターには青年海外協力隊の環境教育隊員も配属されて、活動を行っている。

安達 紗奈美

動物の保護というのは動物の生息環境を保護することも含むという点が印象に残った。元々ウガンダに生息する動物を展示するので、無理なくその動物の生息環境に近い状態を作り出すことができる。またそのような環境を見せることで、動物の生息する環境を保護する重要性も学べる施設となっている。横浜市立動物園の、限られたスペースでの生き物の行動を引き出す展示指導など技術の交流が行われていた。

密猟から動物を保護し、回復してまた同じところに放すと再び密猟されてしまうという難しさがあることがわかった。周りの住民の教育が必要とされていて、学校の先生を教育し、生徒もキャンプを通じて動物や環境の保護の重要性を学んでいる。動物園で働くスタッフが次のビジョンを描いているので、日本人スタッフはそれをサポートするという話があり、長期間の支援を通じて動物園側も自立し、ウガンダで暮らす人々にどのようにすれば教育効果が上がるかという考え方ができていることがわかった。

今村 沙織

クジャクやアフリカンロックパイソン、サイなど絶滅危惧種も保護されている。園内は動物たちが別々の檻で飼育されるのではなく、同じ生態系は一緒に檻に入れて、なるべく自然界と同じになるような環境にしていた。動物の目線に合わせる展示方法や檻の中の動物の遊ぶ道具の位置など工夫している。

人間よがりの世界ではなく、人間の動物や自然と共存して暮らす世界を目指すため学校に出張講座に出向き動物への理解を深める。当日は、中学生が遠足で動物園に訪れていた。動物を見て楽しむだけではなく、絶滅危惧種の動物たちについて学ぶことは素晴らしい取り組みであると感じた。お土産用としてサイフォンで作ったカードが現在開発中である。

内尾 晶子

エンテベ動物園では動物の飼育だけでなく、野生動物の保全教育や学校での出前授業、動物のリハビリ等も行っている。この動物園には青年海外協力隊員が派遣されており、横浜市の草の根技術協力がされていた。ウガンダには獣医が少なく、動物を診察することのできる施設も少ないのでエンテベ動物園はとても大切な施設だと言える。

青年海外協力隊の方が「この動物園の職員は『こうしたい!』って向上心が強くあるから、自分自身も励まされる」とおっしゃっており、それが印象的だった。この動物園に日本は多くの支援をしているが、この動物園の動物を学校に連れて行く取り組みや直接動物に触れることのできる環境は日本では創れないウガンダの長所だと思った。

そして、日本の国際協力は日本の形を押し付けるわけではなく、現地に合わせた形で行われているということを感じた視察場所だった。

金古 浩美

エンテベ動物園の視察は全行程の中で一番感銘を受けた視察先であった。この動物園に対しては、横浜市の3つの動物園(よこはま動物園ズーラシア、野毛山動物園、金沢動物園)による草の根技術協力が行われており、動物の手術用の医療器材の支援や技術移転などを行っている。横浜のこの3つの動物園から年間数名のスタッフが派遣され、技術指導や意見交換が行われるそうだ。具体的には、エンテベ動物園は、「人の目から見て自然な手法」で動物を飼っている。

一方、日本では多くの動物園で檻やケージの中で動物を飼っている。日本は小さな檻の中で動物がより快適に暮らすための高い技術を保有しており、エンテベ動物園においても檻などで飼わないと逃げってしまう動物などは、日本の技術を参考にしているそうだ。

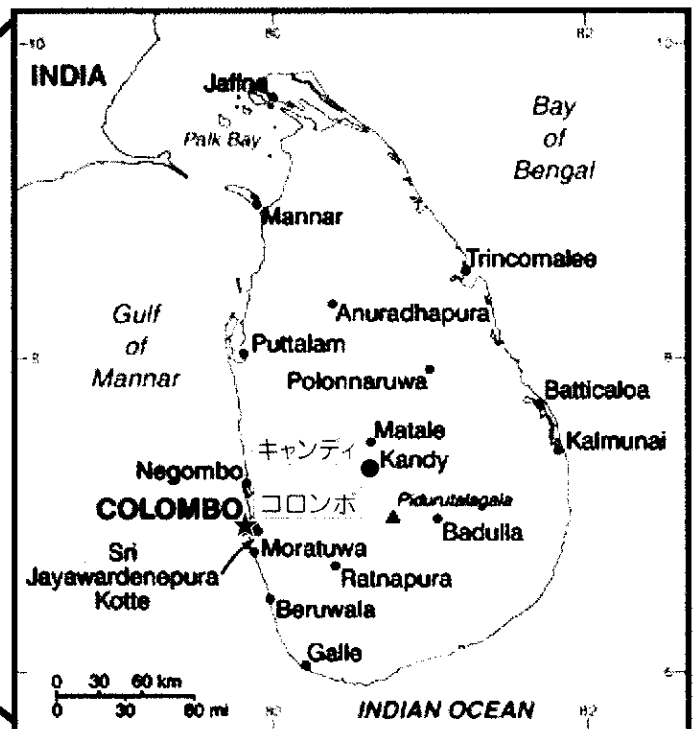
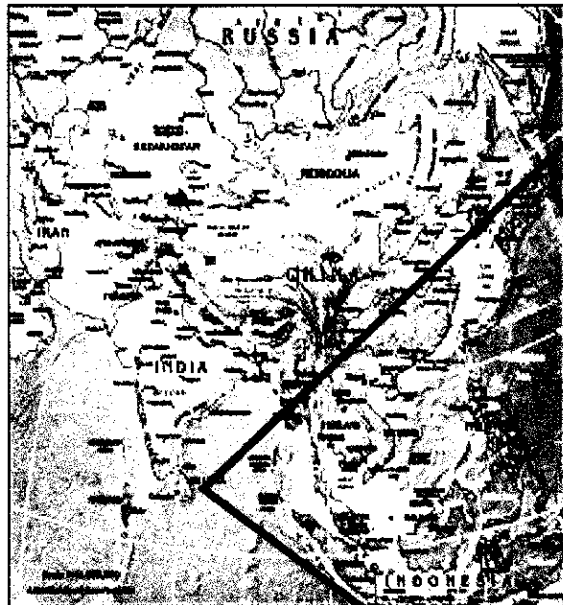
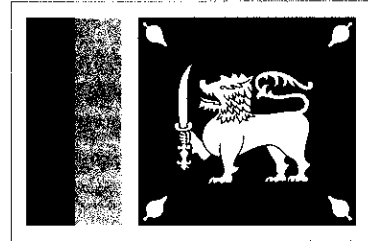
視察先別報告/ウガンダ共和国

ウ
ガ
ン
ダ

柴山 葉奈	<p>日本の動物園とは異なり、動物の鑑賞目的ではなく、保護を目的としている分、できるだけ生態系に近い形で保護されていた。異種の動物でも生態系が同じであれば同じ柵にいたり、勝手に入ってきた動物もいたり動物に優しい環境であると思った。特に、人の目線と動物の目線をなるべく近づけるための柵の工夫は、動物を鑑賞用としないで、動物と共に暮らしてきたウガンダ人ならではの発想なのかなと思った。</p> <p>日本の動物園しか知らない人からすれば、このような動物園は動物との距離も近く楽しめるのではないかと思う。観光場所として推していくのなら、日本のような先進国からの観光客にとっては刺激があって楽しめる場所になるのではと思う。</p>
高橋 篤子	<p>日本の動物園との大きな違いは、野生動物の保護を目的とし、動物病院としての役割も果たしているという点である。そのような重要な役割を担う動物園に、日本の動物園が飼育・管理や獣医などの面で技術協力をしているというのが意外であった。自然な生態系を保つように、限られた敷地の中で飼育・管理する技術は、狭い国土にある日本の動物園が優れているとのことである。</p> <p>また、国民に対する保全教育にも力を入れており、例えば密猟者から動物を守らなくてはならないと教える際は、「単に動物がかわいそうだからというのではなく、それによって現地の人も何らかの利益を得られるのだ、と教えないと理解が得られにくい。」と協力隊の方がおっしゃっていた。その国の文化に合わせた教育を行っていくことの難しさを実感した。</p>
永原 実	<p>私はこういったインフラ整備以外の協力もとても重要であると感じている。なぜなら私はウガンダの一番の魅力は雄大な自然であると感じていたからだ。この自然があるからこそウガンダの人たちの人柄があり、ウガンダを訪れた人々を心地よい気分にさせてくれるのだと感じた。</p> <p>またこの自然があるからウガンダは発展できると感じた。そのためには日本と連携し環境教育が浸透していくこと、動物たちが絶滅することなく繁殖していけるよう協力しあうことが大事であると思った。</p>
畠山 佑介	<p>磯野隊員から、人の目から見て自然に見えるような動物の展示方法等のちょっとした技術の交流の重要性について説明を受け、様々なレベルでの協力を組み合わせることで適切な国際協力となるということを学んだ。また、協力隊員の活動の成果が2年では良く分からないと言われることに対して、環境教育は元々時間もかかるし成果も見えづらいものであるとの意見を聞いた。</p> <p>このお話を通して、協力隊員の方が派遣先の国で抱いた思いについて日本国内でお聞きする機会がさらに増えれば、国民一人ひとりが国際協力活動及びODAについて自ら考えるきっかけとなるので、ぜひそのような機会を増やしていただきたいと思った。</p>
原田 美緒	<p>エンテベ動物園では、同じような生態系を一緒の場所で飼育することで、なるべく野生に近い状態においており、また見る側にとっても地面を深く掘り、目線に柵が見えないようにして自然な状態で観察できることなど、日本の動物園との違いに驚いた。</p> <p>日本の動物園では種類ごとに柵に入れられ、人間目線の娯楽としての側面が強く、野生保護の観点から考えたことはなかったので、自分の中で「動物園」について考えるきっかけになった。</p> <p>ここでは密猟によって傷ついたオウムの一部も保護されていたが、そういった密猟は国外の「オウムをペットにしたい」という欲望から生まれるものであり、先進国側の搾取の一例として考えさせられた。</p>
安元 久美子	<p>エンテベ動物園で私が一番気になったのは教育機関としての役割の部分です。学校に動物を連れて行き授業を行うのは、環境問題や野生動物に対する知識を得てもらうためです。</p> <p>私のアフリカのイメージは、たくさんの野生動物、猿やライオンが身近な存在として家の周りをうろちょろしているものでした。けれど実際は住民の野生動物への知識が足りないために、うっかり蛇の住処に家を建ててしまうこともあるそうです。子供たちの間で知識が広がることで、これから先、野生動物と人間との距離がよい意味で近づいていってほしいです。</p>

派遣国基礎情報(スリランカ)

- (1) 正式名称 (和文)スリランカ民主社会主義共和国
(英文)Democratic Socialist Republic of Sri Lanka
- (2) 政体 共和制
- (3) 首都 スリ・ジャワフルダナブラ・コッテ
- (4) 面積 6万5,607平方キロメートル
- (5) 人口 約2,063万人(2010年央推計)
- (6) 民族 シンハラ人(72.9%)、タミル人(18.0%)、スリランカ・ムーア人(8.0%)(一部地域を除く値)
- (7) 言語 公用語(シンハラ語、タミル語)、連結語(英語)
- (8) 宗教 仏教徒(70%)、ヒンドゥ教徒(10%)、イスラム教徒(8.5%)、ローマン・カトリック教徒(11.3%)(一部地域を除く値)
- (9) 略史 1505年のポルトガル人来航を皮切りに欧州諸国の侵略を相次いで受け1802年から1948年まで英国植民地となる。1948年英連邦王国として独立。
1951年サンフランシスコ講和会議で、ジュニウス・リチャード・ジャワフルダナ大統領が「憎悪は憎悪によって止むことはなく、慈愛によって止む」と仏陀の言葉を引用し、対日賠償請求を放棄した。
1978年にジャワフルダナが大統領として就任し、国名をスリランカ民主社会主義共和国に改称。
1983年シンハラ人とタミル人の民族対立が起こり、2009年に至るまで内戦状態が続いた。
2010年大統領選挙でラージャパクサ大統領再選を果たし、総選挙で与党統一人民自由連合(UPFA)が圧勝。
- (10) 政治 大統領制と議院内閣制が混合した体制。政治や経済、安全保障上、隣国インドと良好な関係維持に努める。南アジア地域協力連合(SAARC)の原加盟国であり、南アジアや東南アジア諸国との協力関係も重視している。
- (11) 気候 南・西部と北・東部で気候が変化する。コロンボの平均気温は27度。
- (12) 通貨 スリランカルピー(LKR)



視察日程

派遣国:スリランカ

ウ
ガ
ン
ダ

ス
リ
ラン
カ

	月 日	曜日	時間	内 容	場 所
1日目	8月19日	日		✈ 成田→コロンボ	コロンボ
2日目	8月20日	月	午前	【表敬】日本大使館	コトマレ
			午後	【ブリーフィング】JICAスリランカ事務所 コロンボ→コトマレ	
3日目	8月21日	火	午前	【有償】アッパーコトマレ水力発電所	キャンディ
			午後	コトマレ→キャンディ	
4日目	8月22日	水	午前	【無償・技プロ】ペラデニア大学歯学部	キャンディ
			午後	【技プロ】小規模酪農改善プロジェクト	
5日目	8月23日	木	午前	キャンディ→クルネガラ	クルネガラ
				【技プロ】健康増進・予防医療サービス向上プロジェクト	
			午後	【青年海外協力隊】ソーシャルワーカー活動	
6日目	8月24日	金	午前	クルネガラ→クリヤピティヤ	コロンボ
				【青年海外協力隊】環境教育活動	
			午後	クリヤピティヤ→コロンボ	
				【報告】JICAスリランカ事務所	
7日目	8月25日	土	午前	【有償】コロンボ港緊急改良事業	
			午後	✈ コロンボ発	
8日目	8月26日	日	午前	✈ 成田着	

※有償：有償資金協力。無償：無償資金協力。技プロ：技術協力プロジェクト。これらの用語の説明は88頁に記載

スリランカ視察先情報

◆アッパーコトマレ水力発電所

■【有償資金協力】アッパーコトマレ水力発電所建設事業(Ⅱ)

- 借款契約締結 2010年3月
- 借款契約額 45.52億円
- 借入人 スリランカ民主社会主義共和国政府
- 実施機関 セイロン電力庁
- 事業内容 スリランカ中央部を流れるマハヴェリ河支流コトマレ川(既存コトマレ・ダム上流)における流れ込み式水力発電所(150メガワット)の建設。



◆ペラデニア大学歯学部

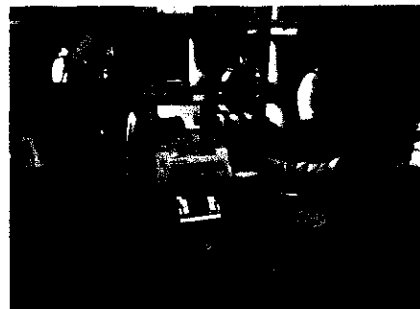
■【無償資金協力】ペラデニア大学歯学部改善計画(Ⅰ期、Ⅱ期)

- 交換公文締結 1996年5月
- 供与限度額 Ⅰ期4.94億円、Ⅱ期17.51億円
- 事業内容 ペラデニア大学歯学部及び附属病院の施設整備と機材供与
- 実施機関 ペラデニア大学歯学部



■【技術協力プロジェクト】スリランカペラデニア大学歯学部教育プロジェクト

- 協力期間 1998年2月～2003年1月
- 協力金額 7.3億円
- 実施機関 ペラデニア大学、高等教育省、保健省
- 事業内容 スリランカにおける国民の口腔保健を向上させるため、歯科医療従事者の教育システムの向上を図る。



◆【技術協力プロジェクト】小規模酪農改善プロジェクト

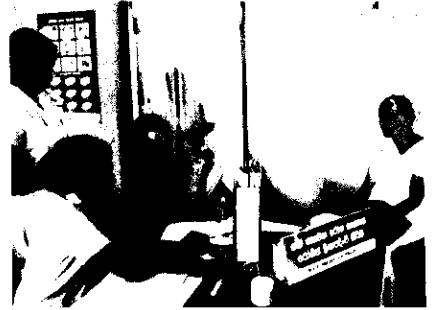
- 協力期間 2009年4月～2014年3月
- 協力金額 3.6億円
- 実施機関 家畜開発省家畜生産衛生局、国家畜産開発公社(NLDB) 牧場
- 事業内容 育種体制及び飼養管理の改善により、小規模酪農家の収益向上を図る。



<http://www.jica.go.jp/oda/project/0800416/index.html>

◆【技術協力プロジェクト】健康増進・予防医療サービス向上プロジェクト

- 協 力 期 間：2008年5月～2013年3月
- 協 力 金 額：3.8億円
- 実 施 機 関：保健省
- 事 業 内 容：生活習慣病及びその結果としての心血管病対策のための効果的・効率的な実施戦略の策定。



◆【青年海外協力隊】ソーシャルワーカー活動(クルネーガラ)

- 活 動 先：北西部州社会福祉省社会福祉局
- 職 種：ソーシャルワーカー
- 活 動 内 容：体操やレクリエーションの指導を通し、高齢者の健康への意識向上や知識の普及を図る。



◆【青年海外協力隊】環境教育活動(クリヤピティヤ)

- 活 動 先：全国廃棄物処理支援センター(クリヤピティヤ市役所)
- 職 種：環境教育
- 活 動 内 容：配属先市役所の実施する廃棄物処理事業に対する支援や助言とともにリサイクルや廃棄物減量の啓発活動を実施。



◆コロンボ港

■【有償資金協力】コロンボ港緊急改良事業

- 借 款 契 約 締 結：1999年8月
- 借 款 契 約 額：20.48億円
- 借 入 人：スリランカ民主社会主義共和国政府
- 実 施 機 関：スリランカ港湾公社
- 事 業 内 容：これまで10件に及び円借款事業を通じて支援してきたコロンボ港北側の北航路を整備することにより大型船舶の北航路通過を可能にし、港湾サービスの向上を図る。



<http://www.jica.go.jp/oda/project/SL-P67/index.html>

ODAで築く信頼関係

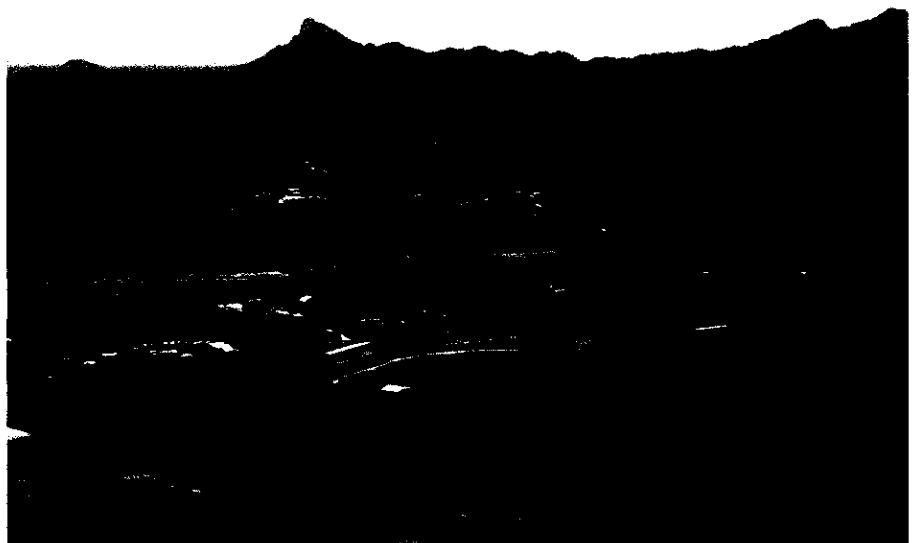
坂田 有輝(石川県 学生)

国際協力において最も重要なことは何でしょう。途上国の経済を成長させること、途上国の人々が豊かな生活を送れるようになること、世界の国々が協力し合って平和を築き上げること、色々なことが考えられると思います。そして、考えられるあらゆることの殆どは国際協力において大切なことです。その大切なことの中でも特に考えられなければならないことは何でしょうか。そのようなものはあるのでしょうか。今回の2012年国際協力レポーターの視察で、スリランカでの日本の国際協力の現場を実際に目で見て体験していく中で、その答えを知ることができました。それは、国と国との間で人々の信頼関係を築くことでした。途上国のGDPを上げること、乳児死亡率を下げることに、貧富の差を縮めること、具体的で少し難しいことを挙げるなら、以上のようなことが国際協力の現場で目指され行動されています。このように羅列されると、国際協力が様々な目的を持つ複雑な活動に思えてしまいます。しかし、それらの活動全てにおいて当てはまる最も大切なことは、実は単純で、実は最も難しいことかもしれない、信頼関係を築き上げることだったのです。

私の初めの国際協力に対するイメージは、あまり良いものではありませんでした。支援する国と支援される国との間の関係は、支援する側の利益が前面に押し出されたトップダウンの垂直構造になっていると思っていたからです。「途上国の経済の発展のためだから」という理由だけで必要のない橋を支援国の資源を使って建造し、必要のない支援国企業の製品を販売していく、支援国側の利益ありきの実態が広がっていると思っていました。途上国を利用して日本企業の利益を上げることが目的なのであれば、日本が所得格差や東日本大震災等の様々な問題を抱えている状況なのに国際協力をわざわざ進めることにも一応の納得がいくとも思っていました。自身の国の状況を正確に把握することのできていない途上国の人々を巧みな言葉で騙し支援国だけが利益を享受する、そのような搾取の構造が国際協力の現実にはある、それが私の抱く国際協力に対するイメージでした。

しかし、実際にスリランカでの日本の国際協力の現場を目の当たりにして、これまでの悪いイメージは大きく変わるようになりました。実際にはスリランカと日本の間にしっかりとした信頼関係があり、両国の信頼に基づく協働によって様々な支援活動が行われていました。スリランカの人々の生活、現状、環境にあわせた日本の支援はトップダウンのものではありませんでした。むしろ、スリランカの人々が主役となり、日本はその先導者、補佐役となっているように感じました。

スリランカの小規模酪農プロジェクトでは、日本が酪農に関する様々な技術をスリランカに伝え、スリランカの酪農家の収入を安定させようとするプロジェクトです。これは日本に既に存在する酪農機器を無理やりスリランカの酪農家に購入させ、日本側が一方的に酪農技術を与えていくものではありませんでした。まずは、今その国でできることを考え、できることの範囲内で酪農技術を向上させていく本プロジェクトは、スリランカ人にとっても決して難しい要求ではありません。



多くの自然を残すスリランカの地(クルネガラ町)



日本が支援し、スリランカの地で活躍するダム(アッパーコトマレ水力発電所)

酪農家の人々に自ら体験させ「気付かせる」ことで、彼らが自主的に学び考えていく姿勢を促すことができていました。教えていることも難しいものではなく、まさに今できる範囲内のことに収まっていて、貧しい酪農家であっても実践していくことができます。

相手国のレベルにあわせた、できる範囲での支援は、同国でのNCDプロジェクトの活動にも見られました。NCDとは、非感染症のことで、主に生活習慣病のことを指します。スリランカでは生活習慣病による死亡率が高く、大きな問題となっています。そこで始まったのが生活習慣病を予防することを日本が教えていくというプ

ロジェクトです。ここでも、酪農プロジェクトと同様に今できる範囲内での予防技術支援がなされていました。できる範囲内の活動であれば、プロジェクトが終了した後もスリランカの人々の手によって予防を続けることが可能です。以上のような、相手国のレベルにあわせた国際協力には、継続可能性と相手国の主体性があることが大きな特徴だと思いました。スリランカの人々が主体となることで、支援する側と支援される側との間に、教えてくれる人、学びたい人という信頼関係を作ることにもつながっています。そもそも、信頼関係がなければ相手国に学ぶ姿勢が醸成されず、教えるという支援そのものが上手くいかなかったでしょう。

日本の利益ありきの支援でなかったとすると、日本もたくさん抱えている中、国際協力をするこの意味が弱くなると思う人もいることでしょう。また、日本が信頼関係の構築のためだけに必死になって支援していると思われるかもしれませんが、しかし、日本の国際協力は被支援国だけが利益を受け取っているわけではありませんでした。アッパーコトマレ水力発電所を視察した際に、特にそのことを感じました。日本は水力発電に関する高い技術力を持っていますが、日本国内には技術を十分に活用するのに適した土地が多くはありません。一方、スリランカのアッパーコトマレには雨による大きな溜め池が存在しており、日本の水力発電技術を十分に発揮させるのに適しています。スリランカでの水力発電所建設という国際協力がなかったら、日本の持つ水力発電に関する高い技術力はただ保持されるだけで無駄になるところだったかもしれません。また、日本が持つ高い技術をスリランカの地で十分に発揮できたのは、水力発電所の建設が相手国の環境や先住民の人々への配慮が行なわれ、両国の間に信頼があったからだと感じました。

最後に、昨年の東日本大震災に対する外国の援助に関して思ったことを述べます。おそらく、日本に援助した多くの国々は、それぞれ自国内でも様々な問題を抱えている中での援助になったと思います。なぜ、自身の国も大変な状況にあるのに日本に援助をしてくださったのか。それは、日本の国際協力が信頼関係を作ること一番に重要なことと捉えて行われてきたからではないかと思います。スリランカで行われている様々な国際協力は現地の多くの人々に受け入れられていました。そして、彼らは日本へのたくさんの感謝を抱いてくださっていて、そのことに私自身とても感動させられました。この感動を、もっと多くの日本人の方に知っていただきたいです。

世界の中で今を生きる

佐藤 眞梨(神奈川県 学生)

● そもそも国際協力って?

『国際協力』と聞いて思い浮かべることは何でしょうか?

「困っている人達を助けられるんだよ。すてくない?」と、国際ボランティアをしているという大学生団体に勧誘され、なんとも言えない嫌悪感を抱いたことがあります。私にとって国際協力というのは、「助けてあげる」という、どこか上から目線の印象がありました。ODAに関しても、「外交の手段」「予算に見合った収穫を得ていない」といった声を耳にし、私の中で、そもそも国際協力とは何なのかという疑問が浮かんでいました。

私は日本の各地域が好きです。実際に現地に行き、人の話を聞いたり地域の文化や特色を感じたりすることに魅力を感じています。ですから、海外に特別な知識があるわけでもなく、今回のレポーターに参加するまで途上国と呼ばれる地域に自ら進んで行こうとは思いませんでした。「日本国内が大変な今、国際協力をする必要性があるのか」それを自分の目で確かめたいと思いました。渡航前の私は、「日本」「海外」と自然と線を引いてしまっていたのだと思います。

● 国を越えて繋がっている

スリランカに着いてまず驚いたことは、空港がとても綺麗だということです。これも日本のODAによるものでした。コロンボ市内に出てみると、そこはとても発展していて私の中でのスリランカのイメージががらりと変わりました。2009年に内戦が終わり、急激に経済成長率が上昇している中で、ここがスリランカにおいての重要な都市であるということが一目見て分かりました。一方、視察では郊外にも行きましたが、そこで地方と都市の格差があることを肌で感じました。

視察先では常に「ありがとうございます」と日本に感謝の気持ちが向けられていました。お礼を聞きながら私は不思議に感じていました。知らないところで誰かが日本に感謝をしているのだと、そして私は何も知らなかったのだということ。

視察をしていて感じたのは、「日本」「海外」と切り離して考えているのではなく、同じ「世界」という中で「今」問題になっていることを「一緒」に取り組むという姿勢でした。

電力供給、地域格差、医療、福祉、農業、環境問題…と、見てきた案件は、形態は異なりますが、全て日本でも共通する問題です。単に支援するのではなく相互に学び合うという点に感銘を受けました。国は違えど、皆、同じように世界の中で生きているのです。

「日本は大変なのになぜ海外なのか」ではなく、問題に対し、各々が解決出来ることを各々の役割の中で実践していく結果、国を越えていた、なのではないかと感じました。中でも青年海外協力隊の方の活動は印象深いものでした。実際に現地に入り込み、現地の人と一体になりながら活動することは気力も体力もいることですが、彼らの活動が地についているからこそ、現地の人々が初対面の私たちにも笑顔で話しかけてくれるのです。こうした彼らの活動が日本への信頼感を築きあげているのだと思いました。また、ソフト面だけでなく、水力発電開発やコロンボ港整備などといったハード面の支援にも尽力しています。スリランカに行ってみて、改めて日本の技術は質が高いということを実感しました。国際協力は、ソフト面、ハード面という双方の面で行われているのだと思いました。



青年海外協力隊による体操の指導(ソーシャルワーカー活動視察)



水力発電所への地下トンネル(アッパーコトマレ水力発電所)

● 見えづらいのは時間がかかるから

この視察に参加しなければ、私はおそらくスリランカにおけるODAによる国際協力について知らないままだったと思います。実際に、「ODAって何をやっているのかよく分からない」といった言葉を聞きます。私もそう思っていました。しかし、現地に行ってODAの現場を実際に見て感じたのは、国際協力が見えづらいのは「時間がかかる」からだということです。

例えば、視察したペラデニア大学では、日本は歯学振興の支援を行いました。案件開始は1998年です。今、同大学では「第三国研修」として他国から研修生を受け入れ、歯学の技術を教えています。最初は日本から歯学を教わるという立場でしたが、今ではスリランカが他国に教えるという立場になっています。このような状況になるまでにはやはり時間を要します。

ODAは、施設を造ったから、機材を提供したから終わりでは決まてないのです。目の前に食べ物がなくて困っている人がいたとして、ご飯を用意するというわけではありません。どうしたら今後も継続的に食事が出来るかという取り組みなのだと思います。だから短期間では成果が見えづらく、私たちは情報を手に入れ難いのです。

視察を通して何度も「人材育成」という言葉を聞きました。「支援」とはずっと支援をし続けるのではなくて、相手が自立できるように促していくためのものであると私は感じます。「支援する側」と「される側」で線が引かれ、依存関係になってしまう危険性があるからです。「人材育成」をして、現地の人々が主体的に行動できるようになることで、日本の支援がなくなってもスリランカ国内で継続的に物事が動くようになります。だから、与えるだけの支援ではなく「国際的な技術協力」が必要なのではないかと思います。



ペラデニア大学の看護婦の皆さん

● 答えがない、だからこそ

私がスリランカで現場を見たのはほんの1週間です。それでも実際に現場で生の声を聞いたことは私にとって「目から鱗」の連続でした。様々なことを体感し、渡航前に考えていた海外の見方も変わりました。しかし、私がこのような経験が出来たのは運が良かったからなのです。多くの人は現場を気軽に見に行くことが簡単ではありません。

「ODAは必要か、そうでないか」「そもそも国際協力とは何なのか」を、私は出発前に調べました。いまだに明確な答えを出すことが出来ません。しかし、答えがないからこそ、向き合うことが必要なのではないかと私は思います。

例えば、震災で被害にあった東北の方から次のような話を聞きました。

「もう二度と津波の被害に遭わないように防潮堤を建てる、という計画が持ち上がったとすると、津波から家族を守りたい親の世代の人たちは賛成をし、その家族を養う漁師の方々は漁が出来なくなるので反対をする。どちらも『家族を守りたい』という想いは一緒に関わらず、立場が違えば『賛成側』『反対側』と分かれてしまう。」

国際協力においても「困っている人を助けなくて良い」という考えの人は少数だと思います。ただ、その助けるという過程で、お金、社会情勢、政治が絡んだりすると、考え方によって賛成、反対に分かれてしまいます。様々な視点から物事を考える必要性があるのだと痛感しました。

だから、私が今回の視察を通して一概に「ODAは良いことなんだ」と分かったふりは出来ません。ですが、現地の人々が日本のODAに対してとても感謝していて、そこには沢山の笑顔がありました。それは事実なのです。ODAが無かったらこのようなことはありません。実際に現場を見ることが出来て本当に良かったと思っています。そして、今後は私たちが、世界の中で今を生きている一員として、日本にいても主体的に関心を持ち続けることが大切なのだと感じました。

● おわりに

スリランカでの経験は私にとって大切なものとなりました。国際協力レポーターとして現地を視察するという、またとないチャンスを与えてくださった関係者の方々、温かく迎えて下さった現地の方々、忙しい合間を縫って時間を割いてくださった青年海外協力隊の皆様、ともに過ごした10人のメンバー、皆様に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

人づくりから始まる国づくり

高野 文(富山県)

私が今回のスリランカでのODA視察を終えて感じたことは、大きく分けて3つある。

まずはJICAが考える途上国支援のあり方の「国づくり人づくり」を実感できたこと。2つ目は「支援をしてあげる」という上からの意識ではない援助の考え方の重要性について。そして最後はスリランカという国と日本との繋がりから見えてきた、世界の中の日本という視点から、今私たちが日本人としてすべきことは何かということ。以上3点から日本のODAに関して私が感じ、学んだことをレポートした上で、JICAのこれからのODAプロジェクトとその知識を世間一般にどのように広めていくべきかを考察したい。

まず一点目については、私は国際協力に関しては以前から関心を持っていたが、自身としては政府の援助については、使っているすべてのお金が一体どこまで現地の人々に本当に役立っているのかが不明瞭だと感じるところがあった。また援助をしているのが政府であるため、人から羨まれるような地位や名誉を築いた人々によって成される、どこか現場のニーズとはかけ離れたものになってしまうのではないかという疑念があった。また、自身ではなかなか自分のお金を使っての支援というものができていないことに対して、少なからずのフラストレーションがあった

のだが、ODAという形で自分の税金が使われ、支援の一端を担っているという事実があることを受け止め、その内訳がどうなっているのかを見たいと思った。実際にスリランカに行って感じたことは、視察した案件はどれも、今だけの援助ではなく先を見据えたものであったこと、またその根本にあるのは、国づくりをするための人づくりという意識であったと感じた。スリランカという国を援助するために、お金をばらまいて見せかけだけの豊かさを提供することは簡単かもしれない。しかし、それではスリランカが継続的に発展し続けることは不可能だ。技術であれば、最終的には現地の人々がリーダーとしてプロジェクトが続いていかなければいけないし、モノであれば、それを安定して管理していく人を育成しなければならない。

案件の中で重要視されていた点として、それを継続して動かしていく現地の人々の育成があった。これは日本語で言葉にしてしまえばプロジェクトの一環のようで、さほど難しそうに見えないかもしれない。しかし現地に行ってみて感じたのは、当然のごとく、日本人とは考え方が違うということだ。スリランカの人々は、良くも悪くもおおらかで、日本人に対してする教育とは手順も変えなければいけないだろうし、根気強さも必要だろう。それは、常識が異なるのだから当たり前なのである。私は海外の人と生活するときは、自分の常識を常識と思わないことが必要だと日々感じてきたが、これが途上国支援となると、どれだけ大きな壁になるかが想像させられた。国づくりには人づくりが一番重要なことであり、難しいことでもあり、そこには強く心に残っており、そこに他国のODAと日本のODAの違いもあるのではないかと感じた。



健康診断の様子
(健康増進・予防医療サービス向上プロジェクト)



酪農プロジェクト・モデル農家(小規模酪農改善プロジェクト)

次に印象に残っていることは、現地で働く日本人の方々が、上から目線の支援してあげようという意識が全くなかったことだった。私は今まで、自分が先進国の日本という恵まれた国に生まれたのだから、自分に出来ることをやってあげたいと思うし、それが世界に対してすべきことなのだという意識が少なからずあったように思う。しかし援助のあり方というのは、援助する側が全く同じ目線に立って初めて成り立つものであるということを感じさせられた。彼らが働き生きていく場所が今はスリランカであり、自分や自分の所属する地域の発展のために、スリランカの現状を変え、発展に結びつけようと本気で考えていらっしゃるということだ。どのような支援の形が正しいのか、多くの議論がなされる場所であり、私自身の中ではまだ勉強不足で答えが出ていない。しかし少なくとも自分たちが裕福だから余ったお金で貧しい人を救済しようという意識からは、持続可能な発展へ向けての援助は難しいであろう。共に考え、共に生きることがスタートなのだとして強く認識することができた。そうした中で日本を好きになってもらい、それが、ひいては日本の発展にも繋がっていくということが、



ソーシャルワーカー福田隊員と

援助の目的として忘れてはいけない一つではないだろうか。

最後に自分の無知さを恥じるべきとも考えさせられた、スリランカと日本との歴史的な関係性から生まれた繋がりについては、特筆すべき点がある。スリランカは国民の約7割が仏教徒であり、日本に対しては同じ仏教国として大変親日であると聞いていた。しかし話を聞くと、あまりにも日本人がスリランカのことを知らなさ過ぎではないかと思うのだ。

というのも、日本が敗戦後のサンフランシスコ対日講和会議において戦争賠償責任を負わずにすんだのは、当時のスリランカ(旧セイロン)大統領が、同じ仏教国であることから「憎しみは憎しみによって止まず、ただ愛によってのみ止む」と発言し、他国を納

得させたからだというのである。このことを知っている日本人がどれ程いるのだろうか。正直なところ、今までであるとすれば紅茶のイメージしかなかったスリランカなのだが、こうしてはいられないぞと思ってしまった。私はまずこのことを少しでも自分の周りに伝えていかなければならない。少しでもそこから繋がるものがあるのなら、それが今私にできることだ。

今回の視察では素晴らしい面を沢山見せていただいた。しかし現地に行ってまで視察してきた私たちだからこそ、ODAにただただ両手を上げて絶賛してはいけないのだと、自分に強く言い聞かせることが必要だと感じている。私たち同じ地球に生きる日本人として、途上国支援の形を考えなければいけないし、また日本の市民社会の一員として、私たちの税金がいかんして使われているのかはチェックしていく義務がある。これらのことを、JICAが与えてくれたこの機会があったからこそ、本気で自分の周りに伝えていこうと考えたし、知ってもらわなければいけない。

だから私は今回のODA視察、どうだった?と聞かれたら、「JICAがこんないいことをしていたよ」ではなく、「現状はこうだったから、一緒に考えていこうよ」ということを伝えたい。なぜなら私だって現地に行ったけれども、ほんの数週間で専門家になれるわけがなく、まだまだ知らないことの方が多く、また国際協力のあり方についても、一方的に聞くだけではなく、それぞれの意見交換の中で培われるものに優位性を感じるからだ。つまり、これは私にとってこれからの人との繋がりのはじめにすぎないのだと考える。ここがスタートであり、これは決して、終わってしまった旅のレポートではない。

そして、その繋がりの一役であり、今回の視察が私にとって本当に有意義なものになった理由の一つが、スリランカと一緒に行った仲間、そして同行していただいた方々が本当に素敵なメンバーだったということがある。素晴らしいオンとオフの切り替えで皆をまとめてくださった武原団長を中心に、本当に一人一人が個性的で親しみ易く、まだまだ話足りない気持ちでいっぱいだ。これからもこの絆を絶やさず、いつか皆でスリランカの数年後を見に行ったりできたら…!?と夢は膨らむばかりである。

今回このような機会を与えてくださったJICAや関係者の方々に感謝は尽きないが、JICAの方とお話の中で、私たちは広報が苦手だとおっしゃっていたのが気がかりである。

ODA視察に行くとそこで日本のODAのおかげで笑顔になっている人々がいるのに、それを日本人に知らえていないというのである。もちろんそこに抱えている問題点はあり、ぜひ広く国民一般に知られるものであってほしいと願う。

しかし広報の形としても、誰もが目に見えるが一瞬で消えてしまう一発の花火のような広告をいくつも出すのではなく、私たちは少ない人数ながらもこうして現地を見て聞いて、感じる経験ができた。それによって、決して薄れることのない国際協力への意識が芽生えたことには違いなく、これはやはりJICAが得意とする人づくりの一環なのだろうと感じずにはいられなかった。そういった点を含め、私はこれからの自分の活動に意識を持ち続けたいと考え、これからの人との繋がりをより一層大切にしていきたいと思う。



ゴミ処理場にて(環境教育活動)

伝えることで変える～ 国際協力 吾 知ることをランカから始まった ～

スリランカ視察

武原 智明(広島県 教員)

「国際協力レポーター」に参加するまで、私はODAを含めた日本の国際協力のことをどの程度知っていたのだろうか。国際協力＝青年海外協力隊の活動・ボランティア活動ぐらいのイメージでしかなく、資金援助も無償・有償などの様々な形があることを詳しく知らなかったというのが本音だ。また、スリランカという国に対しても、首都はコロンボではなく、スリジャヤワルダナプラコッテという長い地名であること、紅茶の国というイメージぐらいでしかなかった。視察前の私の状態が、一般の認識そのものではないだろうが、多くの一般市民が私と同様に日本の国際協力や開発途上国の現状を知らない、まさに「知ることなきなり」なのではないだろうか。

今回の視察に向けて事前にいただいた資料や事前説明会で現地のお話を聞いたことで、ある程度の知識を得ることができ、スリランカ視察中もその知識が大変役に立ったが、スリランカの視察を終え、帰国してからより深く国際協力やスリランカについて知ろう、語ろうという意欲が強くなった。水力発電所に行って、説明を聞き、設備や機材を見て、あまりのスケールに圧倒されただけで、どうやって発電されているのかが今一つわからなかった。事前の勉強不足を痛感し、帰ってから早速調べてみようと思った。調べ始めると止まらなくなる。例えば、水力発電の仕組みを調べ始めると、ついでに火力、原子力、風力や太陽光などを知り、現在の政治に関することや環境問題にもつながっていった。また、視察先の建設会社や黒部ダムをはじめとする日本のダムについてのHPもチェックした。大規模な電力事業の改善面だけでなく、酪農業においても、日本の技術は世界でもトップクラスである。限られた条件の中で、いかに効率よく収入を得るのかをしっかりと研究されている。現地では分からなかった人工授精や飼養管理について、単純に牛の種類や牛乳、ヨーグルトの種類まで調べてみた。妻に頼まれて買ってきたスパイスは、スリランカの主要輸出品。そのうちのひとつコリアンダーは、今までモロヘイヤスープにしか使われていなかったが、あまりにも大量購入したため、新たなメニューの開発が妻の課題となった。私も、スリランカ・カレーを研究し、得意料理の一つとしたいところ。そして、いつか学校の職員や子どもたちにも、ぜひスリランカ・カレーをふるまいたい。右手の指の第2関節あたりまでを使って手で食べさせたい。繊維製品は、つくりがしっかりしていて色やデザインなどのセンスも良い。世界のトップブランドがスリランカに繊維製品の製作を依頼するのもうなすける。紅茶は、「スリランカに行きまして…」と切り出しながら、親族、友人や職場へのお土産として多方面に配った。年配の方々には「国名が変わったところよね。」、同年代には「首都が長いところよね。」と答えが返ってくる。紅茶をふるまうと「フレーバーティーがおいしい、特にバニラ。」と大変好評。その方は、インターネットでスリランカのフレーバーティーを後日購入したそうだ。「ところでスリランカへは何しに行ったの？」と聞かれれば、待ってましたとばかりに「実は…。」、自分が見てきた日本の国際協力の様子を話す。インフラ整備の促進や地方開発支援、自然災害に対する脆弱性軽減のための整備など。話すたびに、国際協力やスリランカのことをあまり知られていないということを感じる。このように、視察によって、自分の知識を広げ、コミュニケーションの輪を広げ、生き生きと生活するための活力を養うことができた。まさに、知ることから可能性が広がっていったのだ。どんな形であれ、とにかく伝えることが大切だ。伝われば、何らかの影響を与えることができる。周りを変えることができる。視察後の私たちのミッションがいかに重要であるかを考えさせられる。

今回の視察に参加し、ODAの必要性を十分に認識することができた。電気や水道、道路や港、医療施設など、日本では当たり前前に存在するものが、現地には全く揃っていなかった。日本がODAを行うことで、今までなかったものが整備され、現地の人々の生活や経済は大きく改善されている。また、世界各地に実績をつくり、日本の産業の技術力を向上させ、日本の技術力に対する信頼を深めることができる。日本製品や施設、日本人の技術力が世界から評価されていることは、今回の視察の中でも数多く目にする事ができた。スリランカ市内の道路を走るのほとんどが日本車で、海外からの観光客は皆日本製のカメラを手にしており、街中に日本企業のロゴが溢れていた。コトマレ水力発電のダム・発電所やコロンボ港、ペラデニア大学歯学部など、日本の資金援助や技術協力が入ったものは、施設の内部だけでなく、その周辺の設備から現地の建物とは異なり、手すりや歩道に至るまで一目で日本が関わっているのかどうか分かる。これらは、スリランカ支援の一つ「成長のための経済基盤整備」であり、スリランカ国民の生活に直接つながっているもので、国民の生活向上、経済発展に大きく貢献していることが担当者のお話



健康指導をする福田隊員(ソーシャルワーカー活動)

資料の具体的な数値からもわかる。NCDプロジェクト、小規模酪農、青年海外協力隊の活動は日本人の知識・経験、技能を伝える、あるいは広めていくものである。日本式のものをそのまま取り入れるのではなく、スリランカの歴史や伝統文化、国民性、宗教観などを踏まえたスリランカ方式を導入し、それを継続することで習慣化、データ化を図り、効率性を向上させる。それらに加え、機材の供与、技術指導や技術支援によって生産性、生活水準、社会サービスの向上に寄与している。日本は、高い技術力と優れた製品で世界とのつながりを強め、自国の経済と共に世界の経済をも発展させてきたことを実感した。世界とつながっていなければ今後の日本経済自体の発展も成しえないと思われる。



ゴミ処理場の説明をする大村隊員(環境教育活動)

それぞれのプロジェクトに関わる企業や技術者、専門家、外務省、JICAの方々にはこれまでの功績に対して敬意を表すとともに、現在行われていること、将来計画されていることに携わっておられる方々には、お体の無事とプロジェクトの完成、成功を祈るばかりである。レポーターとして参加した者、とりわけ学校教育に携わっているものは、これまでの日本人の功績を多くの人に伝え、将来、国際貢献や、国際協力をしたいと思う人材を育てていかなければならないと思う。そのために、JICAには、文部科学省や各都道府県の教育委員会と連携し、国際理解教育のより一層の充実を図ってほしい。また、現場の学校も、学年に応じて国際理解教育を年間の学習計画に含めていくなど、積極的に児童・生徒に国際協力について学ぶ機会を増やす必要がある。しかし、現状は、各都道府県・市町村の公立学校で組織される研究部会に外国語(英語)活動はあっても、国際理解や国際協力に関する部会が存在しない。国際理解や国際協力を研究している学校は数少ない。私が所属している国際理解教育研究協議会も、在外教育施設に勤務経験のある教員がつくる任意の団体で、学校の業務や研究とは全くつながっていない。国際理解が教育の一部、子どもたちが学ぶべきものの一つとして認められていないのが現状だ。

今までの私は、所属県や自校で国際理解教育が十分に行われていないことに苛立ちながらも、それを周りのせいばかりにしてきた。日々の業務に追われ、それを推進できないと言い訳ばかりしていたような気がする。しかし、青年海外協力隊や専門家の献身的な活動を目にして、今までの自分は不満ばかりを口にして、自分からは何も行動していなかったのだと気づいた。バスで何時間もかけてへき地の福祉施設に行き、数人の高齢者に体操を指導して、高齢者に笑顔と生きる活力を届ける。毎日、自転車でごみの集積地に向かい、進捗状況と問題点を確認する。民家一軒一軒を回り、ゴミの分別や衛生状態を住民の生の声を聞き取りながら確認する。小さな町の診療所でお年寄りや体の不調が感じられる方々への健康増進、予防医療サービス向上のための指導者を養成する。小さな酪農家の家族と一緒に、品種改良や収入向上のための手立てを考える。目に見えないこと、地図上ではほんの小さな1点でしかないものにも一歩ずつ着実に前へ進む姿は、上り坂や下り坂でもペースを崩さず、ゴールを目指すマラソンランナーのように輝いて見えた。海外生活での苦勞を察しながらも、情熱を燃やし走り続ける様子はうらやましくも思えた。今までの自分に一軒一軒、一人一人あたっていく覚悟があったのか。海外の問題への興味を広げ、国際理解教育への理解を深めるための努力をしてきたのか。彼らの姿を見て、今までの自分の行動は彼らに遠く及ばないと反省した。たとえ、すぐに形にならなくても、成果が目に見えなくてもいい。小さなことから少しずつ、あきらめずに続けてみよう。そこから何かが変わってくると信じて。国際協力、スリランカについてほとんど知ることあらなかった私が短期間で変わることができたのだから。あらんから光り輝く島という意味のスリランカへ。知ることから何かが始まり、自分の周りの人々を変える。そして、日本や日本人の可能性を広げていくことにつなげていく。その先に光がきつと見えてくるはずだ。そのためにはどうしたらよいか、精一杯考え、行動し、努力していきたいと思う。自分もODAや青年海外協力隊活動に関わった者の一人だという自覚をもって、もっともっとスリランカや国際協力のことを知らせたい。

今回の視察を通じて、新しい目標ができた。自分が知ったことをできるだけ多くの人たちに伝えること。そして、少しでも何かを変えていくこと。強制的にやらされるのではない。好きだから、そして、自分がやらなければならないからと思ったから。そうした気持ちにさせてくれたのはスリランカの皆さんの光輝く笑顔と海外で懸命に働く日本人の姿。自分を変える場を提供してくださったJICA、外務省の関係各位の皆様、そして、スリランカ視察団9名の素晴らしい仲間たちに感謝。

地球人であることの任務

千葉 真美(宮城県)

私は29歳の時に初の海外経験をしました。行き先はお隣の韓国です。期間は僅か1泊2日で宿泊ホテルから一切街にも出ずに帰国しました。理由は日本以外の国は治安が悪く危険、そして感染症等の病気になるだろうからというものでした。一方で、日本が好きかというとなんにも好きでもありません。私の日本に対するイメージは良く言えば我慢強く、冷静沈着、頭脳プレーというものでした。

このように「国」というものに対する知識がほとんど白紙に近い頭を持つ私にとって、今回経験する全ての時間は人生の大きな起点になるだろうと確信していました。そして、私の日本と海外に対する表面的なイメージを覆して欲しいという期待感で一杯でした。日本は自分の国自体が上手に稼働出来ていないのに、他国の面倒を看ている八方美人な部分があると感じています。見返りを求めるしたたかな国とは裏腹に、日本の他国に対する愛情の真意は何なのか？ODAの必要性には穴があるんじゃないか？など様々な疑問を背負いスリランカへ入国をしました。

今回の経験を通じて、本当に多くの事実と発見を得る事が出来ました。中でも特に印象深かったのが、国際協力が必要な「途上国」と、それを支援する「先進国」の関係は、実は“真逆の関係”であるという発見です。

様々なプロジェクトの視察をしていく内に、ある共通点に気がつきました。それは、我々日本人からの技術を絶えず継続し、更に向上を続けプロジェクトを行っている現地の方々は、日本人には無い“高いポテンシャル”を持ち合わせていたという点です。必死さ、達成感、仕事の味わい方、諸々の度合いが少し違って思えました。このように、現地の方に協力をしていた側がいつのまにか逆に勉強させられている側に逆転している、そんな関係が成り立つように感じました。それは言い換えれば、お互い相乗効果となって共に成長を遂げられる理想的な関係だと考えます。

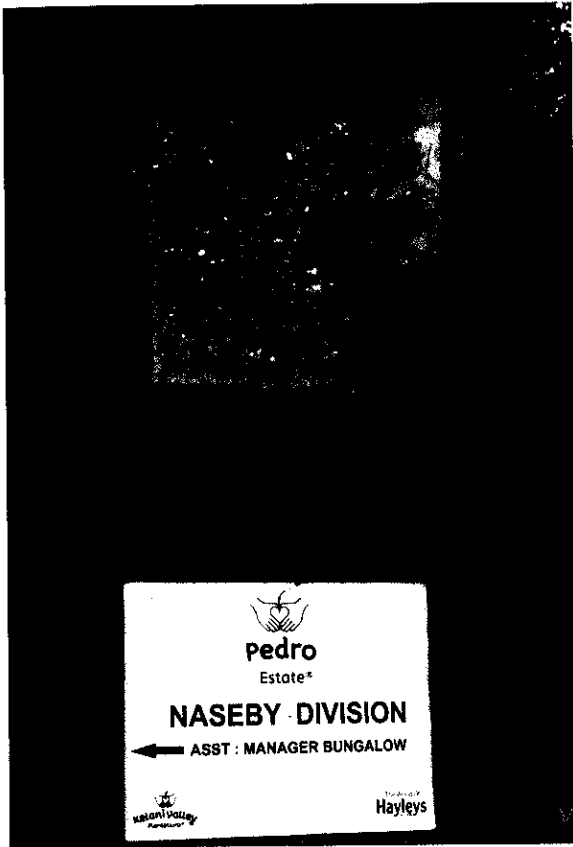
そして、ODAの必要性について改めて感じる事は、誰かが発信をしない限り誤解をされ続けるであろうという事実です。私も今回実体験をしてようやく理解が出来ました。ODAとは、人と人との信頼関係が造り上げる国際協力の事です。全てのODAの基盤は日本と海外を結ぼうとする人間同士が、互いに国造りをしていこうというもので、と考えています。正直、莫大なお金がかかるものもあります、一方でかからないものもあります。先に申し上げた通り、途上国にとってのみ有益なものでもありませんし、国同士が相乗効果をし合い両国の成長を支え合っていくものなのです。



JOCV活動は現地での信頼関係が継続を生む(ソーシャルワーカー活動)

この事実を日本中の極僅かな人が知っているだけでは、やはり普通なら誤解は起ころでしょうし、税金の無駄使いと言われるかも知れません。

私かもし、幼稚園、小学校、中学校と義務教育の中でODAを体験できる教育を受けていたならば？JOCV(青年海外協力隊)に参加出来ていたら？多分、今回の国際協力レポーターの存在も必要なかったかも知れませんし、ODAを知らない事が世間的に非常識と認識され、恥ずかしい思いをしていたかも知れません。



スリランカには日本との記念碑がよく見られる

これから日本の義務教育の中で、ODAもしくはJOCVの教育が受けられるようになれば、日本は確実に変わると考えています。

地球上に生きている人間なのに、自国以外の国の現状も知らないまま一生を終えていくのは、少々無責任です。地球に住まわせてもらっている限り、国際協力の事を知るべきですし、それ以前に“知りたいと思える様に発信していくこと”が重要です。

近年、手軽に海外旅行に出かける事が可能になり、老若男女様々な日本人が海外を訪れています。日本を出て海外へ降り立った際に、現地で日本がどんな風に思われているのか、日本がその国に対してどんな事を行っていたのか、いるのか、これらを気にしてみると自然と行き着く先にはODAの存在があると思います。それを辿り、知りえた情報について自分達の子どもや親、友人などと会話をし、意見を言い合い、考えること自体が、実は既に国際協力をしていることとなります。私はこの視察を体験しなければ一生を無駄にするところでした。

日本に暮らす皆さんに是非お願いしたいことがあります。一度、地球儀もしくは世界地図を引っ張り出して日本列島を見つけて下さい。日本列島の周りにはかなりの数の国が存在しています。どの程度、他国の名前を知っているでしょうか？海にも何種類もの名前が付いています。大陸にも名前があります。日本はこんなに小さな島国ですが、周囲の国に向けてどんなことが行われているか、周囲の国は日本に対してどんなことを欲しているのか、考えてみて下さい。地球人でしたらきっと考えたいと思うはずです。



日本に対してスリランカ国民はどう感じているのか

イメージの外

中島 杏子(北海道 学生)

あなたは今チョコレートを持っています。目の前に、ぼろぼろの服を着ているけれどお腹はいっぱい少年と、きらきらのドレスを着ているけれど実は3日前から何も食べていない少女がいたら、あなたはどうするでしょうか。きっと私を含め、普通の人にはぼろぼろの服を着た少年に自分のチョコレートをあげてしまうと思います。なぜなら彼の苦しさは目に見えてわかりやすく、少女の苦しさは一見してもわからないからです。

スリランカは貧困にあえぐ国ではありません。日々の暮らしがままならないような国でも、伝染病が蔓延して常に病気と隣り合わせの国でもありません。最初私が、スリランカがそういった意味合いでの「発展途上国」ではないと知った時、それならば日本のODAがわざわざスリランカに対して支援を行う必要はあるのかと疑問に思いました。ODAとは、最貧国に対して優先的に行うものであるからこそ意義があるもので、比較的開発が進んでいる国に対して行うのはお門違いではないかと思ったからです。

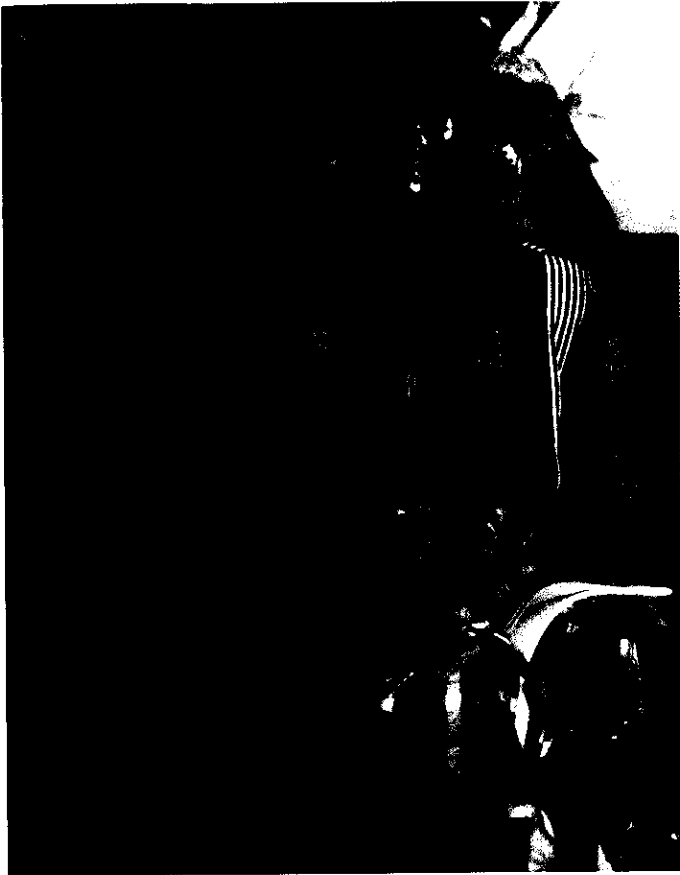
ですが、実際にスリランカの状況と日本のODAのプロジェクトを視察してみて、私の考えは根本的に間違っていたことがわかりました。確かにスリランカは、大都市コロンボを始め、国全体として元気があり、今後さらに自力での発展と経済成長が見込める国でした。だからといって日本がODAを通して協力する必要が全くない国とはいえません。今回の視察で最も興味深かったものに、「NCD(非感染症)プロジェクト」が挙げられます。

スリランカでは、心臓疾患やガン、生活習慣病などの非感染症が死亡原因として感染症を上回るようになり、この原因としてスリランカの伝統的な生活習慣(大量のミルクと砂糖を入れた紅茶、ご飯に塩を入れて炊く、など)が挙げられています。そこで日本のODAのプロジェクトで対策が講じられているのですが、最初は、栄養の過剰摂取が原因であるこの問題がODAの対象としては少しずれている印象を受けました。しかし、実際に現場を視察してみて、この問題がスリランカの社会にとって想像以上に大きな問題である現状を感じました。しかも自分たちの生活習慣を自分たちで変えていくことは非常に困難です。そこで、日本のODAプロジェクトが、現地の医者と協力して非感染症の予防を進めています。これによって、一家の大黒柱の早逝を防ぎ、家族たちが路頭に迷うことも防ぐことができます。病気の原因を客観的に見つけること、それに対して予防を進めること、ここに日本の価値観を取り入れることは、この社会問題への効果的な対策であると考えます。加えて、このプロジェクトを視察した時に私が感心したことは、JICAがスリランカに対してこのようなプロジェクトを進めているという事実そのものでした。私たちが一般的に、国際協力と聞いてイメージするのは、「アフリカの子ども」「インドのスラム」「東南アジア」など、かなり対象が限られています。私たちのイメージする「世界」には一面性があり、自分が認める「世界」以外に対して関心を払いにくく、だからこそ私は最初、スリランカへのODAと聞いて、すんなり納得ができなかったのだと思います。しかし実際に視察し、スリランカに日本のODAが入っていること、スリランカの現状にマッチしたプロジェクトが行われていること、緻密な計画による大きな効果が上げられていること、それらすべてに圧倒されました。私たちが日ごろ思っているよりも「世界」は広く、様々な国があります。

そしてその国その国で、政府や協力機関が取り組むべき問題の質が違うのです。私たちの持つODAのイメージとは違っていても、スリランカにとってはこのプロジェクトが目下重要であり、その需要に応えているという状況であると知りました。



街中は車やバイクの往来が激しい



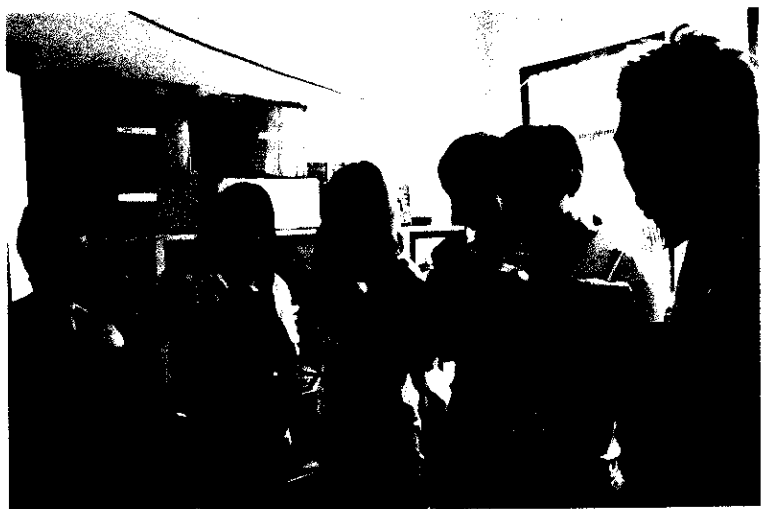
医師の指導を受ける親子(健康増進・予防医療サービス向上プロジェクト)

冒頭の質問「ぼろぼろの服を着たお腹いっぱい少年と、きらきらのドレスを着た3日間食べていない少女」に戻しましょう。私が今回国際協力レポーターに参加して感じたことは、もしチョコレートを持っているのが日本のODAだったら、少年にチョコレートをあげることはないだろうということです。少年の持っている問題と、少女の持っている問題の質は違います。ふたりの話を聞いてみただで、少女にはチョコレートをあげ、少年にはコートをかけてあげる、それがJICA事業を含めた日本のODAであると感じました。相手が本当に欲しがっているもの・必要なものをプロの目で見抜き、相手と相談を重ね、一番効果的な方法で実現させること、個人のボランティアや営利目的では困難と思われるこれらの特徴が日本のODAにはあったように思います。

それでは、プロではない私たちが世界のためにできることは一体何でしょうか。それはきっと、今まで興味がなかったものに、耳を傾けるところから始まると思います。「そもそもODAって何?」「ODAにかかる時間とお金があったら国内の問題を解決すればいいのに」私もスリランカへ行く前は、このように思っていました。日本では一般的にODAについて深く語られることが少なく、情報量の少なさという点でも、ODAの本質をつかむことは難しいと思います。また、絶対的に正しいODAは存在しない

でしょうし、だからこそODAに対してさまざまな意見が寄せられるのだと思います。今回私は幸運にも、実際に現場を見ることのできる機会を与えられ、「百聞は一見に如かず」という言葉どおり、教科書や本から学ぶよりも多くのことを肌で感じました。スリランカの空気や、日本やODAに対するスリランカ人の好意的な態度、プロジェクトに携わる人たちの情熱。公式文書には綴られない様々な「実物」を目にした私は帰国してから、すっかり日本と、日本のODAのファンになりました。

世界には、偉い人が書いた本や、膨大な数字データとにらめっこしていてもわからないことがたくさんあります。知識や経験がなくても、興味や感心を持って知ろうとすれば、最初の一步が踏み出せるのだと知りました。初めて見るもの、初めて聞くものに、ほんの少しだけ耳を傾けてみてください。新しいものの見方や考え方、あなたにとって新しい世界が開けてきます。そこから私たちにとっての国際協力が始まってくると思うのです。



健康のため砂糖の代わりにフルーツをNCDプロジェクトの西野専門家と(健康増進・予防医療サービス向上プロジェクト)

『真の国際協力』のあり方～「知る」ことから始まる。日本人としての「誇り」を感じる国へ～

林 真理 (東京都 主婦)

● 志望動機

幼い頃より世界に強く興味を抱いていた私は、18歳の夏、初めてのアルバイト代を貯めてアフリカに渡った。その後も、ケニア、タンザニア等を中心に、欧米、南米と50ヶ国程旅をした。長い時は3ヶ月程滞在し、現地の人々と共に過ごし、タンザニアではスワヒリ語も覚えた。私にとっては、“故郷”とも思えるほど愛しい国である。

しかし、旅から帰国して友人に話をすると、決まって異次元の世界から帰還したような反応。日本で過ごす人々には、情報がなく、全く分からないため、あまり身近に感じることはできない。世界を旅して実感したことは、彼らの生活は、私たちが家族を想い、日々健康で、安全で、平和な暮らしを望むそれと、全く同じなのである。世界各地の現状や活動を人々に理解してもらうには、まず興味を持って耳を傾けてもらわなければならない。それは「知る」ということから始まるのだ。だから私は、その大切な橋渡し役となるべく、現地の生の姿を見て伝えたいとこの視察に志願した。

● 国際協力活動について、海外派遣前に抱いていた印象や考え

正直、ODAによって国民の税金が果たして有意義に使われているのかについては疑問があった。旅先で、途上国での援助慣れや汚職の話を目にする事もあった。日本の縦構造の支援というイメージも強かった。だからこそ、自分自身の目で国際協力の現場を見て、肌で感じたいと強く願っていたのだ。

● 国際協力活動についての帰国後の考え

ODAのあり方について考えさせられた。日本の国際協力の現場を視察して、支援の仕方が国によって大きく異なることを強く感じた。支援する側の国が、後に大きな利益を得られる大型のインフラ建設等ばかりを行う国があるのに対し、人材・費用・時間をかけて技術協力を行い、根本からの解決、成長を促す日本の取り組み方は本当に素晴らしい。トップダウンではなく、ボトムアップ方式で結果を出していた。現地の文化に合わせた支援をしなければ、浸透しない。共に悩み、技術や知識を伝える、それは心の支援でもあった。資金のみを投資して「モノ」を支援する「ハード」の国際協力ではなく、人を送り込み「技術」を伝える「ソフト」の国際協力の姿がそこにあったのだ。

スリランカにとって日本は、「支援してくれる国」ではなく、「共に歩んでくれる国」である。支援する国、される国ではなく、どこか50/50の関係であり、完全受け身の体制はなかった。あくまでも、自国で自活するための協力であり、今の支援が未来の自立へ繋がる日本式の支援、これこそが「真の国際協力」のあり方であると確信した。



スリランカの子ども達



アッパーコトマレ水力発電所



健康的な生活習慣のアドバイス(健康増進・予防医療サービス向上プロジェクト)

● 日本の方々に伝えたいメッセージ

この度の視察を通して、ODAによって日本国民の税金が有意義に活用されていることを目の当たりにした。とても豊かな気持ちになったと同時に、この実情があまり知られていない現状を残念に思った。また、スリランカの人々が日本を知り、身近に感じ、親日的であるのに対し、日本国民はスリランカを知らない。スリランカのみならず、支援を受けた国は相手国への知識があるが、支援をしている日本は意外と知らないのである。

そして、この滞在のなかで大きな発見があった。それは、今日に至るまでの日本とスリランカの関係である。敗戦後、日本が大きな岐路に立たされた際、それを助けてくれたのが「スリランカ」であった。日本の戦後処理であるサンフランシスコ講和条約において分割統治されずに済んだのは、スリランカのJ.R.ジャヤワルダナ閣下の演説の影響が大きかったのだ。それは、「自由にしてかつ独立した日本の復活」「憎悪は憎悪によって消え去るものではなく、ただ愛によって消え去るものである」との仏教の教えによるものであった。ドイツは分割されたが、日本は分割されず、その後今日の繁栄を迎えた。日本の最大の危機をスリランカによって、救われたのである。なお、1951年のサンフランシスコ講和条約締結後、世界で一番早く正式に日本と外交関係を結んだのもスリランカであった。しかし、このことを殆どの日本人が知らない。我々がこれを学校で学んだことは無かった。

明治時代にトルコのエルツール号を救った日本人の逸話がトルコの教育の場で現在も語り継がれているように、歴史的な背景を踏まえた世界各国との繋がりを、日本ももっともっと教育の場で発信して行くべきだと強く感じた。それは、真の国際化に不可欠ではないか。国民一人ひとりが、日本人であることをもっと「誇り」に感じる国にしたい。それには、やはり教育が重要なのである。すべては、「知る」ことから始まるのだ。

国籍、宗教、文化、性別、年齢…全部違って、同じ「人間」
遠い国の何処か、誰かではなく、自分の生活と重ねて想像してみる。
もっと身近に、もっとシンプルに感じる事ができたら、何ができるのかが見えてくる。
そして、そこには…「平和な明るい未来」が待っているのだ。
「世界平和」は夢じゃない。私はそう信じている。



スリランカ人は、親日家が多い。
決して、日本が先進国だからではない。日本の悲惨な時代も、親日家だったのである。
(ソーシャルワーカー活動)

最後に、今回の国際協力レポーターに参加させて頂き、現地JICA事務所や各地での担当者、同行して下さったコーディネーターの方々等、関係各位に心より感謝申し上げます。

『人間同士の協力関係』

安井 美貴子 (神奈川県 学生)

今回、国際協力レポーターとしてスリランカを訪問するにあたって、国際協力に関する事前学習を様々な角度から行った。「(国際協力とは、)広義には、一切の国際的事項に関する諸国家間の協力。狭義には、経済的、社会的、文化的、人道的、技術的事項に関する諸国家間の協力をいう。」(ブリタニカ国際大百科事典より引用) 日本に居たまま資料を読むだけでは、国際協力の実際の現場を想像しにくく、国民の税金が具体的に如何なる形で運用されているのか分からない。しかし、こうした定義や説明とは裏腹に、私が実際に現場を視察して感じたことは、極めて単純な人間同士の関係性であった。私が考える国際協力とは、そこに困っている人が居るときに、自らの立場に拘わらず必要な手助けを与え合う、人間と人間との関係から生まれる働きである。実際、複雑な利害関係を抜きにして慈悲の心だけで自他の関係を成立させることは、特に、文化も政治も異なる他国との関係において、理想論でしかないと言えるかもしれない。しかし、昨年3月11日の東日本大震災における他国からの支援活動は、利害よりも純粋な応援や恩返しを優先した結果だと言えるのではないだろうか。今回我々が訪問したスリランカは、2004年に発生したスマトラ沖地震における日本による緊急援助の恩返しとして100万米ドルを寄付した。また、同様に台湾は、1999年9月の台湾中部大地震や2009年8月の南部台風災害に対する日本の援助に感謝する形で1億台湾元(約2億8千万円)を寄付している。こうした応援は、先進国や発展途上国という自国の立場に拘わらず、単純にそこに居る、困っている人間を救うためになされたものだった。

私が今回国際協力レポーターに応募したきっかけの一つは、東北にてボランティア活動に従事していた際、上記した国を含め、多くの国の国旗が支援物資に貼られていたのを見たことであった。もちろん、こうした支援に一切の利害関係が含まれていないとは言えない。しかし、東日本大震災の際、支援を出した160カ国もの国々、その中の多くを占める発展途上にある国々から、莫大な援助を受けたのである。現在、東日本大震災を含め、日本国内には様々な問題が山積している。自国の危機に際してまで他国への援助を続ける理由は、まさにここにあるのではないだろうか。緊急時でなくとも、問題を抱えている人間を救うことができるのは、問題を抱えていない国ではない。レベルの違いさえあれども、問題を抱える国に対して、与える技術や資金を相手の目線で提供することは、難しい利害関係を超えて、人間同士の単純な行動に過ぎないのではないだろうか。

東日本大震災の際に送られたスリランカからの義捐金や大統領及び外務大臣の震災発生直後の訪日のように、自らの利益重視ではなく、相手の目線に立った支援は、日本のODAにおいても最重要視されている。途上国に対して日本が上から支援を与えるのではなく、効率的に支援が行き届くよう相手国が導入しやすい形で提供されているのである。私は派遣前、国際協力に関する知識をほとんど持ち合わせていなかったものの、イメージとして、途上国を先進国が理想とする形で発展させるために行う上からの支援行為だと考えていた。文化の差異に拘わらず進歩のゴールは現在の先進国の姿として、文化の破壊に繋がる一方的な活動、というネガティブな認識を抱いていたのである。しかし実際には、技術や資金は一時的に投入されているのではなく、日本側は時間をかけて相手側の意見を聞き入れる姿勢をとっており、試行錯誤の末、資金援助による設備や技術などが相手の望む形で導入されていることが分かった。今回視察した中から何点か例を挙げたいと思う。2003年に無償資金協力と技術協力の組み合わせの末に完了したペラデニア大学歯学部への支援プロジェクトは、その代表例であると言えよう。研究



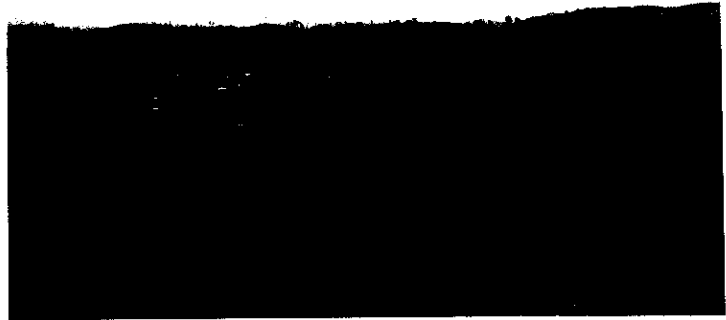
モデル農家の方が自ら作成した、理想の牛舎模型。
自発的な改善がなされる環境がある。
(小規模酪農改善プロジェクト)

用機材や治療用設備など高度な設備を提供された際、同大学は、使用方法に留まらず維持管理に関わる技術まで、時間をかけて伝えられたため、プロジェクト完了から13年が経過した現在でも、当時の設備が使用され続けている。支援の際の作業効率ではなく、その後の発展の効率を考えた結果、相手の目線に立った援助がなされたため、現在では、地方の病院や他国への技術研修が行われており、同大学を中心とした技術発展が広く行われているのである。また、2008年から行われているNCDプロジェクトは、食生活の悪化や交通手段の発達などの生活習慣の変化から、スリランカで近年増え続けている生活習慣病の予防目的でなされている活動であるが、

それまで予防の概念が無かったため、基礎的な改善や検診から導入されている。BMIやカロリーの概念を知らない人々に対して、早期発見のための高度な設備を導入することは、一時の珍しさと好奇心により注目されても、健康増進活動の基礎づくりには繋がらない。体重計や血圧計といった簡単な機材の導入や生活習慣の改善を促す指導などの地道な働きかけを行うことにより、人々の健康に対する意識を変化させることが重視されている。

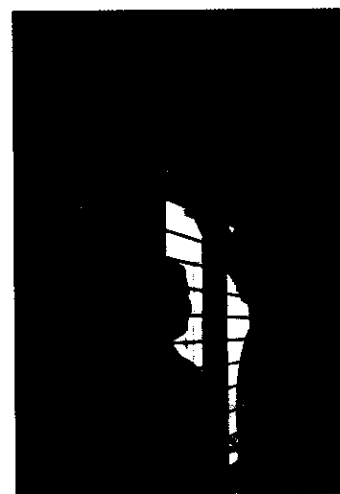
2009年から行われている小規模酪農プロジェクトは、牛乳の自給率が低い現状を打破するため、乳牛の質を上げることを目的にした活動であるが、人工授精や後代検定などの高度な技術を用いて一

代限りの上質な乳牛を生み出すのではなく、現地の酪農家にも出来る方法を伝えている。日本人専門家のサポートのもと行われている高度な技術提供のほか、定期的で開催される研修会において、「草は事前に細かく切って与える」「乳牛はきつく縛らない」「カレンダーを用いて記録をつける」など、乳牛飼育に伴う簡単なルールを指導し、基本的な部分から改善を促しているのである。このように、現場ではトップダウンの支援国よがりの支援ではなく、同じ目線、立場での協力が行われていたのである。



水力発電所建設に伴い開発された家々。人々の暮らしが今まで通り保たれるよう、配慮がなされている。(アッパーコトマレ水力発電所)

出発前、国際協力に関する知識を何一つ持ち合わせていなかった私は、事前学習として様々な資料に目を通す中で「国内の問題が深刻な現在、外の課題に目を向けている場合ではないだろう」という批判的な意見に出会った。昨年、東日本大震災や今年7月の九州北部の豪雨災害などの度重なる天災や国家の財政問題、いじめや職場環境が原因の自殺行為などを考えると、日本に山積した課題が未解決であるにも拘わらず、他国に資金や人材を流すことに対して、国民として疑問を抱くことは、決して間違った考えとは言えないだろう。しかし、冒頭にも述べたように、日本の課題と世界の課題は、並列しているようで、ある種別次元の話であると、今回のスリランカ訪問で感じた。国内の課題は国外の課題と切り離せない関係にあり、途上国の開発や発展は、将来的に支援する側のメリットに繋がる可能性も、十分にあり得るのである。例えば、環境問題や経済市場の課題は、国境を超え全世界に影響が及ぶものであり、日本が他国の環境問題に取り組むことは、日本の環境を保護することにも繋がり、日本が途上国の経済発展の手伝いをするには、いずれ支援された側が日本製品を購入し、日本経済が発展することにも繋がるのである。(実際、スリランカを走る自動車の大多数が日本製であった。)



高度なものを導入しなくとも、そこにあるもので色々作れる。(健康増進・予防医療サービス向上プロジェクト)

日本が保持する技術や資金によって、国外の課題に取り組むことができるのであれば、国境にとられず協力関係を結ぶのは、やはり人間同士の心理としてなされるべきものであると言えよう。いかなる立場の国であれ、協力が行われたことは、相手国に対する恩として、国家的に忘れ去られることのないものとなる。日本も、第二次世界大戦後のサンフランシスコ講和会議にて助けられた恩、そして、東日本大震災で、余震の恐怖が残るにも拘わらず真っ先に訪日し、お見舞いの言葉をかけてくれたスリランカに対する恩を忘れる事のないよう、今後も継続的な協力関係を結ぶことが求められる。それは国同士の関係というよりも、人間同士の恩の関係のように感じられる。

今回の訪問により、ODAの視察とは関係なく、純粋にスリランカの人々の穏やかさや思いやりの精神に感動し、彼らに畏敬の念を抱いた。そして、再び訪問したいと強く感じた。今まで目を向けていなかった魅力的な世界、そしてその国々への援助に大きな可能性が存在することを知りえたことは、今後日本の将来を考える際に強く影響すると思う。スリランカ固有の文化は残されながらも、より彼らが幸せを感じる開発が進められることを願う。

日本の国際協力～知ること・知ろうとすることの重要性～

山口 佳奈子(長崎県 会社員)

ウ
ガ
ン
ダ

ス
リ
ラン
カ

● 派遣前に抱いていた印象・考え

青年海外協力隊が途上国の人々と共に汗を流し、活動をしているテレビ番組を見て感動した私は、小学校の授業の中でなりたい夢を「青年海外協力隊員」と書きました。しかしそのときの担任に「これはダメだ!」と突き返されました。なぜダメなのか理由がわかりませんでした。そのため国際協力とは実態のよくわからない何か敷居の高いものだという印象を長年持っていました。

現在私は大学で留学生の生活支援、学修支援を行っています。多くの留学生は途上国から来ており、中には日本からの奨学金を受給しながら勉強に励んでいる学生もいます。しかし、日本が奨学金という形で経済的支援を行なっていることを理解していても、自分たちの国で日本人が共に汗を流し国際協力活動を行なっていることを知りません。また、日本人の学生たちも日本が世界中でさまざまな国際協力を行なっていることをあまり知りません。そして、その活動現場というものを目にする機会は少なく、わかりにくいものだと感じていました。

これらのことから、実際の現場を見て、学生や身近な友人たちに現状を伝えたいと思いました。また、なぜ夢として「青年海外協力隊員」はダメであったのか自分の目で確かめてみたいと思い今回の国際協力レポーターに応募しました。



コンポストプラント作りに取り組む大村隊員(環境教育活動)

● 視察を通して・帰国後の考え

到着して2日目、在スリランカ日本国大使館一等書記官蓑谷優氏より「スリランカ政府はもはや平和構築・貧困脱出などを目指す段階を脱しており、急速な発展を遂げている新興国であると自負を持っている。ODAを卒業する時期を迎えつつある」という話を伺い、今回の視察ではどのように日本がスリランカの経済的自立を支援しているのかという点に着目しながら視察をしました。

今回視察したプロジェクトは大きく二つに分けることができます。一つは、協力が成功し、終了、または終了に向かいつつあるもの。もう一つは、いま正に協力が昇華しつつあるものです。前者は「アッパーコトマレ水力発電所」「ペラデニア大学歯学部」「コロボ港」です。これらのプロジェクトは社会インフラ整備に対する協力です。この視察現場ではスリランカのプロジェクトスタッフの方々が日本の技術について尊敬を持ち、かつそれらを自分たちのものとして次世代へ教育するまでになっており、優れた人材育成が進められていることが印象的でした。また、「私たちは日本の支援を忘れない」という言葉を聞くことが多々ありました。

後者は「小規模酪農プロジェクト」「NCDプロジェクト」「ソーシャルワーカー福田隊員」「環境教育大村隊員」のプロジェクト現場です。これらのプロジェクトは基本的なインフラ整備が整った上でできることであり、スリランカ国内の経済を活性化し、国を成熟化する協力です。今回の視察現場の多くがこういった分野が中心であったことから、日本の協力が経済的自立に向けたものへシフトしてきていることが分かりました。これらの現場では、日本人専門家・協力隊員とスリランカのプロジェクトスタッフ、施設利用者の方々の間にしっかりと信頼関係が築き上げられていました。また、新しい技術協力が、途上国の人々に生産性への目覚めや生活習慣の改善といった意識革新をもたらしていることを目の当たりにすることができました。



健康運動指導を行なう福田隊員(ソーシャルワーカー活動)

これら両者のプロジェクトから、日本の協力が「郷に入っては郷に従え」で成り立っていることがわかりました。日本と異なることが多々ある現場においても、生活習慣や考え方などその地域の人々の声に傾け、人々が必要とするものを理解しようとする姿勢で協力活動が行われていました。また、日本による協力は経済的協力に留まらず、協力が終了しても現地の人々が自立して運営できるような仕組みになっており、優れた人材育成、働く意識改革までをもたらしていることがわかりました。

● 伝えたいメッセージ

青年海外協力隊員の方や日本人専門家の方々から多く聞かれたことは「このスリランカが今よりも良くなるのが日本のためにもなる」ということです。

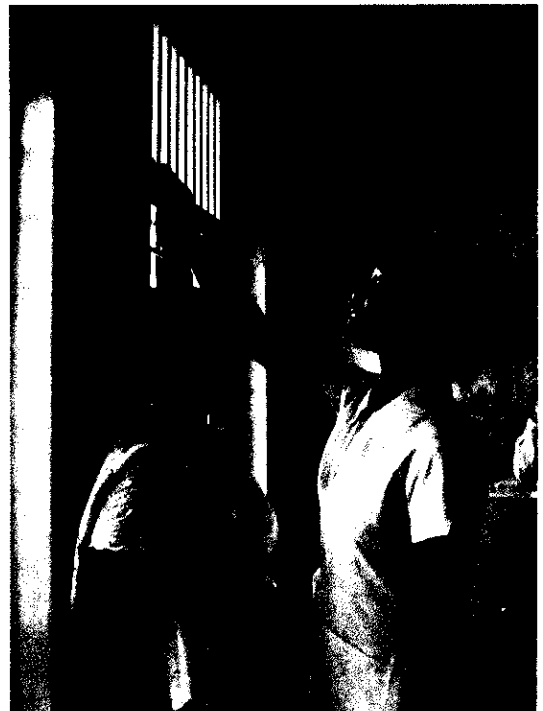
日本国内においてODAが批判の対象となることは少なくありません。しかし、途上国への協力活動で日本が国際的信頼を高めてきたことにより、得られたこともあります。

東日本大震災のように日本が困難なときには途上国からの支援がありました。スリランカからは震災の際、8000万円の義捐金をいただきました。駐日スリランカ大使は震災から間もない4月に宮城や福島に出向き、紅茶やカレーを振る舞ったと聞きます。

また、スリランカは宗教的部分や島国、資源が少ないなど日本と同じキーワードを持つ国です。その国が今エネルギーに張り、著しく経済発展を遂げてきていることから、日本が立ち返って多くのことを学ぶことができると思います。そして、それが日本の復興、成長のヒントとなるかもしれません。

この視察を通して、やはり青年海外協力隊員を夢として持つてはいけない理由が見つかりませんでした。今回お会いすることができた隊員の方々は情熱・信念を持って取り組まれており、スリランカのスタッフの方、地域の方々に慕われながら仕事に励まれ、輝いていました。きっと私にダメだといった担任も「何をしているのかわからない、知らない」という知識の乏しさからあのような言葉が出たのだと思います。「知ること」「知ろうとすること」の重要性を改めて認識しました。

今後はまず私の今回の参加について「スリランカになんばしに行ったとー?！」と尋ね来る学生や友人たちに今回の視察で得たことを分かりやすく伝えたいと思います。そして、生活の身近なところからも国際協力に取り組んでいこうと思います。



身長を測定する女性(健康増進・予防医療サービス向上プロジェクト)

国際協力は人づくり ～一人の意識が国をも世界をも変える～

荒尾 敏雄(小学校教員)

私にとってスリランカ人との出会いは、学生時代までさかのぼる。当時、中国留学中に会った同じ留学生のスリランカ人は、敬虔な仏教徒であった。彼はいつも穏やかで温かく、笑顔の絶えない人であった。カレーをみんなでご馳走になったことを今でも覚えている。それから十数年。私は教員となり、今では国際理解教育に力を入れて実践している。そしてこの度、彼の国を視察できるチャンスをいただいた。

スリランカを訪れて一番驚いたのは、スリランカ人の人柄である。「アーユーボワン(こんにちは)」と挨拶すると必ず笑顔で答えてくれる。気さくに話しかけてくれたり、世話を焼いてくれたり、人柄の良さを肌身で感じることができる。スリランカ人は、親日家であると言われている。しかし、恥ずかしながら、現地を訪れるまでその理由を知らなかった。また、教員として学校現場で国際理解教育を進めながら、JICAの国際協力活動についても、実際の様子についてはよく分かっていなかった。

まず、スリランカの人がなぜ親日家であるかということである。それはお互いの国で、仏教を信じる人が多いということが挙げられる。仏教はシルクロードを通してスリランカ、日本にそれぞれ伝わった。

仏教以外にも、スリランカ産の香料が海のシルクロードを通して、日本に届けられたこともあった。スリランカと日本は、シルクロードを介して交流があったのである。

いや、現在でも交流は続いている。直接のきっかけは、日本の戦後賠償問題に関する、スリランカの対応に始まる。1953年、サンフランシスコ講和会議において、スリランカは日本の戦後賠償を放棄した。

スリランカのジャヤワルダネ蔵相は、「偉大なる仏陀の言葉に『憎しみは憎しみをもって止まず、愛をもってのみ止む』とある」と講和会議で語った。これにより、スリランカは日本に戦後賠償を求めなかった。それ以来、日本とスリランカは継続的に友好関係をもち、日本は政府開発援助を通じてスリランカの発展に寄与してきた。JICAも1954年以来、継続的にスリランカを支援している。

また、2004年に起こったスマトラ沖地震の際には、日本は津波被害で苦しむスリランカを支援した。その支援に対する恩返しとして、2011年に起こった東日本大震災直後には、スリランカは日本に支援隊を派遣した。こうした経緯も忘れてはならない。今回の視察を体験させていただいたことにより、スリランカと日本の深いつながりを知ることができた。

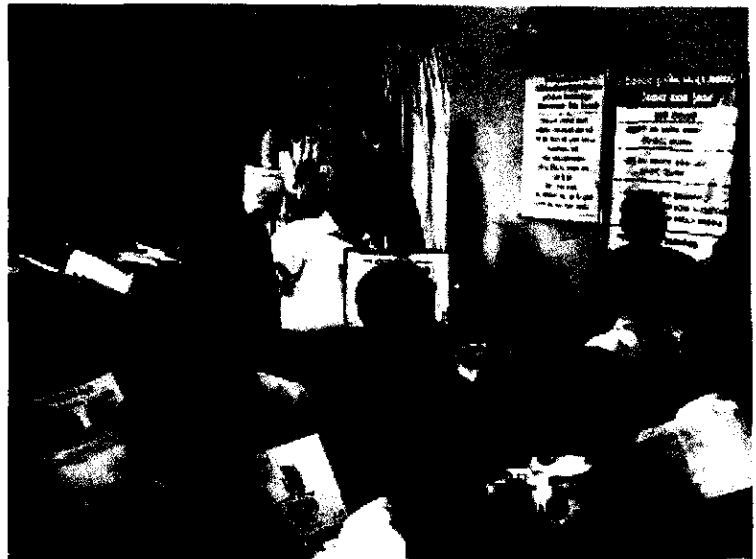


ゴミ処理場で働く人(環境教育活動)

次に、JICAの国際協力活動についてである。スリランカでは、有償資金協力のアップーコトマレ水力発電所、無償資金協力・技術協力のペラデニア大学歯学部、技術協力の小規模酪農プロジェクト、技術協力のNCDプロジェクト、JOCV(青年海外協力隊)のソーシャルワーカー活動、環境教育活動、有償資金協力のコロンボ港を視察させてもらうことができた。視察前に、在スリランカJICA事務所長からスリランカに対する日本の協力活動、ODAについて説明があった。ODAはOECD(経済協力開発機構)の下部組織であるDAC(開発援助委員会)によって、諸外国への経済協力のうち三つの要件を満たすものを指すと定義されている。要約すると、

一つ目は「政府ないし政府の実施機関によって供与される」、二つ目は「開発途上国の経済開発や福祉の向上に寄与することを主たる目的としている」、三つ目は「供与条件が開発途上国にとって重い負担にならないようになっている」ことである。JICAは、ODAの二国間援助を担当し、技術協力や有償資金協力、無償資金協力を行っている。

今回の視察で一番印象深いのは、JICA職員の方がお話しされた言葉である。国際協力とは、結局は「人づくり」であるということ。自分の国を発展させていくという強い意識を持った人、つまり志の高い人をつくることこそ、その国の最大の援助になるということであった。確かに、有償資金協力のアッパーコトマレ水力発電所では、日本企業の協力を得ながら、現地スタッフが熱心に働く姿が見られた。そして、無償資金協力・技術協力のペラデニア大学歯学部では、被援助国としての受け身の姿勢ではなく、自らが積極的に日本の援助を生かして活動していた。今度は自分たちがリーダーとなり、近隣諸国への技術協力も行っていった。



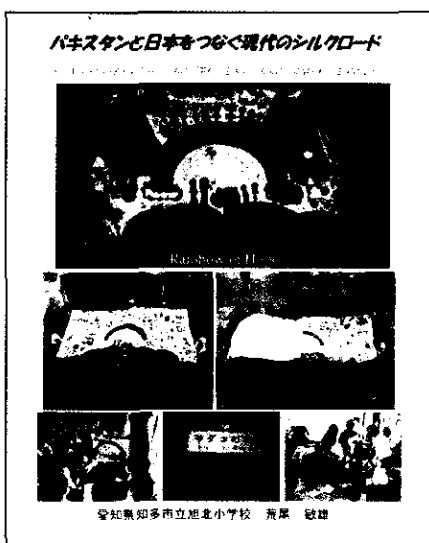
健康推進活動を行う医師(健康増進・予防医療サービス向上プロジェクト)

他にも、技術協力のNCDプロジェクトでは、指導者が生活習慣病予防のために健康推進活動を行い、その活動を現地に根付かせていた。青年海外協力隊員もスリランカを我が国のごとくに考え、地道な活動を熱心に行っていた。こうした様子を見るにつけ、JICA職員の方が言われた「国際協力は人づくり」との言葉を実感することができた。

今回の視察を終え、教員の立場において「人づくり」とは、どんなことを指すのであろうかと考えた。国際理解教育は、多くの学校では、総合的な学習の時間において学ぶ。「総合的な学習の時間」の学習指導要領には、「問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。」とある。

今、教員の自分にできることは、今回の視察を通して学んだことを子どもたちに伝え、共に自己の生き方を考えていくことである。教員という立場からだけではなく、世界に生きる一人の人間として、自分にできることは何かを考え、グローバルに考えローカルに行動することができる人間になっていくことである。人をつくることこそ、国をも世界をも変えていくための最大の事業だと考える。

最後になりましたが、視察訪問させていただいた関係諸機関の皆様、お世話になったJICAの職員の皆様、JOCA(青年海外協力協会)の職員の皆様、そして共に研修をしたスリランカチームの素晴らしい仲間へ厚く御礼申し上げます。今後、日本の多くの方に、日本のODAやJICAの国際協力活動の様子をぜひ知ってもらえたらと思います。



「グローバル教育コンクール2011 国際協力レポート部門 作品」

【有償資金協力】アッパーコトマレ水力発電所

概要 スリランカ内陸部に水力発電所を建設することにより、増大する電力需要に対応し、持続的な経済成長に不可欠な安定的な電力供給体制を整備するもの。
※本邦技術活用条件(STEP)により、施工監理・本体工事ともに日本企業が受注。

スリランカ

<p>坂田 有輝</p>	<p>アッパーコトマレ水力発電所のダムを見た時、その周囲の環境の中に溶け込んでダムが存在していることに感心させられた。それだけでなく、水を放流するタイミングは、現地の環境に考慮して決めているという。具体的には、川から流れる水を利用して人々の生活、滝の景観のことに配慮して放流しているそうだ。スリランカにとってコトマレ水力発電所は電力供給源として大変重要な役割を果たしている。しかも、水力発電所施設周辺の環境、住民の生活を壊さないような配慮もしっかりとなされている。日本のODA支援が、あらゆる方面を考慮して行われていることを強く感じた。</p>
<p>佐藤 眞梨</p>	<p>スリランカでは電力の需給が安定せず、停電が起きることもしばしば見られる。電力を安定供給させるため「水」という持続可能なエネルギーを使い、環境に配慮した事業を行っていた。ダムや施設建設によって住民は移転することになるが、そのフォローもしっかりと行っていることに驚いた。村の中でのコミュニティを崩さずに生活できるように配慮がされていたのである。 印象に残ったのは電源開発株式会社の方の言葉だ。「スリランカの人、日本はすごい!と言って。だが、我々が建設するだけではない。現地の人と日本人と一緒に取り組んで行っている。そうすることで将来的な自立を促している。」 援助とは単に施設を提供するだけの取り組みではないのだと感じた。 移転した現地住民はこの施設のことをどう思っているのかと少し心配になったが、視察途中、子どもたちが私たちの姿を見つけると、土手の上から走って笑顔で手を振ってきた。</p>
<p>高野 文</p>	<p>この水力発電所は、茶畑が続く丘陵地帯を抜けたところに突如として現れたという印象だった。今までの細くて危ない道路、生い茂った草木が続くところから、いきなり日本の技術に覆われ、広く安定した車道、手すり、街灯が姿を現す。ここで改めて日本の技術力の高さを実感するのだが、これは有償資金協力であり、ここからスリランカがいかにして継続的に国の電力を維持させていくかが問われる。現地で働くスリランカの方はこの水力発電を最大限に活用すべく、日本へ技術を学びに来たことがあるそうで、また次も日本に来ると聞いた。その方の日本、そしてスリランカの発展に対する熱い思いは、数十分の会話の中でもひしひしと感ずることができた。こうして日本の技術を学び、リーダーとして現地で活躍する人が増え、そこからスリランカ国内での教育へと繋がっていくことが重要だと考える。</p>
<p>武原 智明</p>	<p>水と共に生きてきたスリランカの人々にとって水はとても重要なものであった。この水を使って電気をつくることは、スリランカにとってどれだけ大きな意味があるのかをこの水力発電所は教えてくれた。重要かつ安定的でない水資源を最大限有効に使用する方法として、スリランカが出した答えは、世界随一を誇る日本のダム・発電所建設の技術だったのだ。ダムや発電所の外観、内部の設備や機器のみならず、周辺の道路や河岸の防壁、手すりにまで日本の技術が凝縮されている印象を受けた。また、ダムの建設地の居住区住民への住宅や生活環境、自然環境への配慮や対応にまで日本人の丁寧さが見受けられる。なぜ、スリランカ政府が水力発電所建設を日本に依頼したのか。それは、日本人の技術力、精巧さ、丁寧さへの信頼があったからこそであり、日本人が世界に誇れるもののひとつであると感じた。</p>

視察先別報告/スリランカ民主社会主義共和国

千葉 真美	水力発電所では、日本のODA活動が想像以上の価値あるものに変化していました。水力発電という日本の中では極僅かなエネルギー源とされるものが、スリランカではとても重要なものとなっています。しかし、まだまだ十分な電力を国全体に供給出来ていないのが現実です。今回の視察で特に印象的だったのが、日本に寄りかかる姿勢ではない、スリランカ側からの自発的な向上心の様なものをもとても感じた事です。当初は支援の受け手側に過ぎなかったスリランカが、今では自ら、現状を更に良くしようとする意欲と安定感を創り上げていました。異なる国同士が同じエネルギーで、お互いに意識を集中して目的の為に努力をしている姿を肌で感じ、感動で鳥肌が立ちました。文章だけで情報を得る事も勿論良い事だとは思いますが、この現場に関しては実際に多くの方に自身で体感してもらいたいです。
中島 杏子	いくつもの茶畑と労働者たちの間を通り抜けて水力発電所に到着した。そのせいか、近代的なシステムを持った水力発電所と、今も手作業で進める紅茶栽培従事者との大きなギャップを感じた。発電所は現場の作業の安全性も高く、ダムを作った後の周辺住民や自然環境へのアフターケアもしっかりとなされており、単なるインフラ整備だけを目的とした施設ではないということが印象的であった。発電所で働いているのは、数人の日本人を除けばほとんどが現地の作業員であり、日本とスリランカの協力体制の中にも現地の人を主体とするシステムが見られ、持続可能な開発となっていることを感じた。
林 真理	ここは2011年6月に完了したばかりの、スリランカで最も大きな水力発電所であった。視察して強く感じた事は、建設するにあたって生じたダム周囲の人々や環境への対応だ。土地の所有権を含む新たな住居の提供、学校の新校舎提供や寄付金贈与、植林、絶滅危惧種の保護、そして作業員の現地雇用である。これだけ大きなものを建設するにあたって、環境や文化を守るために長い年月をかけてどれだけの様々な対策をとって臨まれてきたかを知り、国際協力の取り組み方にあたって「日本の美しさ」を感じた。
安井 美貴子	発電所及びダム建設に際して移転された家々や開発された近隣の環境に、紅茶畑の広がる雄大な自然の中でそだけ異質で近代的な印象を受けた。川の水を利用して来た人々にとって、移転先における蛇口を捻れば水が出る生活は、新鮮な一方、慣れない部分も多いだろう。新しい文化を導入し住民の生活を改善するという意味では成功しているものの、既存の生活を先進国のどこでも見られる近代的なものに転換してしまうのは、世界の様相が画一化するという意味において必ずしも正解の形ではないのではなかろうか。しかし、ダムの岩壁の上から手を振る子ども達の姿を見て、本事業に関しては、近隣の住民には喜ばしいものとして受け入れられていることが感じられた。現地住民に専門的な職とそれに伴う能力を与えた日本製の技術は、発電以外の点でもスリランカに利をもたらしている。
山口 佳奈子	水力発電所のダム近くまで来ると、そこには明らかに日本が造ったと分かる「日本らしさ」をみた。環境、安心安全、景観…全方位的に配慮した水力発電所であった。経済発展のためには電力の安定供給は避けられない課題であり、水力発電所建設に伴う住居移転、環境対策は一般的に当然行なわれるべきこととして捉えた。しかし、この水力発電所の大きな特長は、住居移転を余儀なくされた人々へ対し、職業訓練を行い生活の基盤作りを支援している点である。このことは貧しい紅茶農園労働者が貧困の連鎖から抜け出す一助となる。このことから水力発電所プロジェクトはハード面、ソフト面の両側面を持ち合わせ、国全体の経済の底上げの軸となるものであると感じた。
荒尾 敏雄	この水力発電所を訪れて一番驚いたのは、発電所工事と共にインフラが整備されたことである。例えば、新しい住宅、学校、橋、道路といったインフラが同時に整備され、地域住民の生活の質的向上にもつながっていた。小学校に対しては、奨学金援助も行っているとのことであった。また、環境に対する配慮も行い、当地の絶滅危惧種も保護していた。しかし、発生電力量を考えると火力発電所の方が良いのではないかと考えたが、水力発電所の方のお話を伺い、水力発電こそスリランカの環境に適した発電の仕方であること、環境によいということがよく分かった。

【無償資金協力・技術協力プロジェクト】ペラデニア大学歯学部

概要

スリランカ唯一の歯科医師養成機関であるペラデニア大学歯学部に対し、無償資金協力による歯学部並びに歯学部付属病院の建設を行うとともに、技術協力で歯学教育、口腔保健サービス、研究活動の向上等ソフト面の協力を実施。

スリランカ

坂田 有輝	<p>ODA支援が、先進国と途上国のトップダウンの関係にあるわけではないことを知ることができた。ペラデニア大学のプロジェクトでは、スリランカ側が主体となってプロジェクトを進めていったという。今、何が必要で何が欲しいのかを日本側に要求する形となった。確かに、被支援国にとって何が必要で何が足りないのかを最も知っているのは被支援国自身であろう。現在、プロジェクトそのものは終了しているが、大学の運営は現在でもスリランカ人の力によって進められていた。自分たちの力で大学運営をしっかりと続けていくことができていたのだ。さらに、他国からの研修生も受け入れることで、スリランカへの支援が他国にも波及してプラスの影響を生んでいる。このような、本プロジェクトの成功は、スリランカ主体であったことに起因するのだと思う。</p>
佐藤 眞梨	<p>実際に目で見て驚いたのは「継続性」がしっかりしていた点である。担当者とカウンターパートが一体になり何度も討議を重ねて相互に意見を出し合っていた。「支援される側もしっかり意見を持ち、どうしていくかを互いに話すという場が良かった。10年で終わるような案件にはしたくなかった。」という現地の方の言葉にあったように、案件期間が終わった今でも、日本との交流は続いている。現在では南アジア屈指の医療施設となり、「第三国研修」として他国からスリランカへ研修生を受け入れ、技術を教えている。このように、日本が支援をすることでスリランカに新たな人材が生まれ、今度はスリランカが他国に技術を移転していくという循環が出来ている点に感銘を受けた。ただ、日本が機材の支援をしてから10年以上が経過しているため、施設機材の老朽化が今後の課題になってくるのではないかと感じた。</p>
高野 文	<p>お話を伺う中で、成功した秘密がまさに現地の方の考え方の中にあると分かった。案件に携わった大学の方の解説の中で、案件を形にする際に、私たちが本当に欲しいものは何かを突き詰めて要求したというお話があった。例えば、施設に合う機材、機材に合う施設といった具合である。これは当然のことのようだが、このミスマッチによってODAが税金の無駄遣いと言われるに至ってしまう案件が聞かれるのではないかと感じた。日本の最先端の機材を納めたとしても、例えば電力が安定していなければ精密機械は使えないし、それを使いこなし、メンテナンスしていける人材が揃っていなければ、数年後には全くの無駄なものになってしまう。肝心なのは持続可能性であり、それを第一に考えられる責任者を生み出すという意味でも、人づくりが重要だと認識した。</p>
武原 智明	<p>視察前には、一方的な支援ではなく、自らが伸びていくために考え、リクエストし、それに最も有効的な答えを出したという、日本のODAの中で最も成功した案件の一つであると聞いていた。大学で関係者に話を聞くと、その言葉の一つ一つに今までの実績への自信と日本への感謝の気持ちが表れていた。貧困層にも医療提供ができるようになり、スリランカの市民にとっても本当に良いプロジェクトだったということがうかがわれた。施設内を見せていただくと、機材や器具の老朽化が目立ち、関係者からも新しいものや、より高精度なものを求めている声が挙がっている。数年来継続されている日本の大学との研修医の交換交流、技術協力等を含め、細く長い支援と交流が必要であると感じた。啓発活動を含めた施設の運営・維持管理を日本が担っていることを誇りに思う。</p>

視察先別報告/スリランカ民主社会主義共和国

千葉 真美	<p>ペラデニア大学歯学部は、ODAの意義を実感した視察先でした。スリランカにとってとても重要な技術を日本は伝えたものだ、と視察後じわじわとその重みを実感しました。スリランカは日本から受け継いだ歯学技術を自国だけではなく他の国へと伝授しています。この循環を成り立たせるのは非常に難しいことです。また、対スリランカという部分で逆に日本は助けられたのかもしれない。日本の技術に長けている部分を、スリランカ側が見出してくれたとも言えるプロジェクトなので、そこは逆に感謝をし忘れないでおきたい部分です。私はこの視察で日本は本当に技術大国であり、現状の日本を日本らしく生かしてくれているのは「他国の存在」なのだと確信しました。</p>
中島 杏子	<p>大学歯学部の設立の援助だけにとどまらず、現在も続く、日本の医療機関との連携体制や、学部生への奨学金制度など、「人づくり」のテーマにも合致したプロジェクトであったと感じた。また、国づくりの重要な基盤として、医療におけるODAの成功のモデルケースであったとも思う。ここではスリランカでの大きな社会問題として、噛みタバコによる口腔ガンが紹介された。しかし日本には噛みタバコの習慣がないため日本の医者をつただ送るだけでは解決しないという話を伺って、やはり最終的には現地での「人づくり」が重要になってくるという印象を受けた。プロジェクトとしてはとても素晴らしい成功を収めているように思う。このようなプロジェクトが、地域・他国で広まることを期待する。</p>
林 真理	<p>ここでは、スリランカの人々の意識の高さについて考えさせられた。ODAで支援を受けた後、自国の力で更なる展開を生み、現在に至ることを知り、非常に感銘を受けたのだ。歯学部と言っても、顔面や脳、さらに、スリランカの癌発症率の中で最も高く問題視されている口腔癌といった分野にまでわたる総合的なものを求め、機材・施設・人材育成に力を入れてきた。その後、第三国研修をも実現し、現在では南アジアで一番の歯学大学となった訳である。口腔癌発症率も33%から28%まで下がり、若い世代に教育が浸透している今、今後より大きな結果が望めるであろう。また、留学時代の繋がりを大切に築き、独自で新潟大学との姉妹大学関係を結び、JASSOのサポートを受け更なる留学制度も設けた。これは、受け身ではないスリランカの意識の高さ故であり、理想的なODA支援であると感動した。</p>
安井 美貴子	<p>使用用途に拘った高度な機械の無償提供と、それに伴う技術指導の組み合わせだった同大学歯学部への支援は、施設ではなくそれを使用する人材に着目したことが成功の要因であったのだろう。自主的な管理維持により13年間設備が使用され続けている点と、プロジェクト終了後の第三国援助など、技術のない国への支援活動が示す「支援される側から支援する側への転換」という点から、持続発展性という意味において優れた支援であることが分かる。他JICAのプロジェクトと比較して、当初機材が提供された頃から数えると長い期間が経っているものの、その間、内戦が行われていたことを考えると、一概に長期間を費やしたとは言いがたい。今後は、老朽化の進んだ設備の総入れ替えの方法と都市部と農村部との大きな医療格差の改善が課題になると思う。</p>
山口 佳奈子	<p>ペラデニア大学の教職員からは、自分たちの望む大学を自分たちの力で作り上げてきたという自負を感じ取ることができた。そのため、歯科機器の多くは協力開始時に導入されたものがほとんどで取り替えやメンテナンスが必要な時期を迎えていると感じたが、今後も大切に維持管理していくであろうという期待が持てた。また、優れた技術を学びに第三国から留学生が学びに来ていること、日本の大学とも学生の交換留学制度が続けられていることから、協力期間を終了した今も優れた人材育成が継続されていることがわかる。このことから、大学の自助努力と日本の現場主義の協力姿勢が成功モデルをもたらしたとすることができる。</p>
荒尾 敏雄	<p>1999年からは、スリランカの医療従事者が日本で3ヶ月から6ヶ月間、研修プログラムを受けている。こうして、施設、機材、人材が揃い、現在のペラデニア大学を運営している。現地では、医療の様子や機材の使用状況について、見学することができた。特に驚いたのは、日本の技術援助を受けた後、自らの力で最先端の技術を構築してきたことである。現在では、東南アジア、南アジアで一番成功したプロジェクトとの評価を受け、近隣諸国へ技術指導も行っている。被援助国側が受け身の姿勢でいるのではなく、援助国と対等の立場で議論をし合い、かつ真摯な姿勢で学んできたことが今に生かされていると感じた。</p>

【技術協力プロジェクト】小規模酪農改善プロジェクト

概要

酪農振興地域における牛乳の生産性改善と酪農家の収入向上を目的とし、後代検定済みの人工授精の普及、後代検定の意義の理解促進、育種及び飼養管理の改善を通じた小規模酪農改善のための技術・体制基盤の整備を実施。

スリランカ

<p>坂田 有輝</p>	<p>ここでも、ODAプロジェクトが先進国から途上国へのトップダウンによるものではないことを感じることができた。効率的な酪農技術を教えるというプロジェクトであるため、知識のないスリランカ側が「あれを教えてください、これを教えてください」と主体的になることは難しい。酪農技術だけを向上させたのであれば、日本側が日本の農業用機器をスリランカに多く持ち込んでプロジェクトを進めていくことも可能だ。しかし、それでは支援が終了した後、スリランカの酪農家が自身の手で酪農を継続させていくことはできない。一方的にはなく、スリランカの酪農家に技術を教え、自ら「気付かせる」ことにより技術を習得させていく方法が今回のプロジェクトでは取られていた。自らの気づきによって覚えさせ、体験させることでプロジェクトが終了した後もスリランカの酪農家が自身の手で酪農を続けていくことが可能だ。</p>
<p>佐藤 眞梨</p>	<p>このプロジェクトの最上位目標に「スリランカ国の酪農振興地域において牛乳の生産性が改善され、酪農家の収入が向上する」とあり、実際には牛の後代検定手法や人工授精など、様々な取り組みが実施されている。専門的な内容なので一目でその内容を理解するのは難しかったが、現地のモデル農家の話から農業に対するポジティブな思いを知ることが出来た。農場内には小さな農場模型が置かれ、循環型農業や音楽を使った牛の飼育などが行われている。農業というと、感覚で行われる部分があるが、普及員が農家向けにマニュアルを作ることで手法を分かりやすく伝え、またカレンダーに印をつけるといった書面に残す作業により効率化を図るなど、些細な部分にも力を入れていた。まだ進行中の案件なので今後の過程にも注目したい。</p>
<p>高野 文</p>	<p>モデル農家に着くと同時に私たちは農家の方の大変手厚いおもてなしを受けた。日本の支援に対してありがとうという言葉と共に、こんな状況だということ自信を持って紹介して下さった。初めて出会ったにも関わらず、貴方達のおかげですと下さる方に対して気恥かしさもこみ上げたが、私は全く知ることができていなかったことに対して自責の念もあった。この案件の中で、牛の乳を効率よく採取するために、簡単な10個の提案をしている。その中の一つにカレンダーを記帳簿にしようというものがあるが、私にとっては簡単と思えるようなものでも、カレンダーを使う習慣がない人々に、カレンダーをつけようというのは、なかなか難しいことだそう。それでもうまくいけば自然とやるようになるとプロジェクトの方はおっしゃっていた。人の習慣を変えるのはとても難しいことだが、それを無理矢理ではなく、根気強く見守っていくことによって成功が見えてくるという内容のお話が印象的だった。</p>
<p>武原 智明</p>	<p>今までメモを取ったこともないという酪農家に、人工授精や発情した日、出産した日などをカレンダーに記録させる。見学前は、日本の最新技術を指導しているのだと思っていたが、日本から派遣された専門家は、日本式をそのまま導入するのではなく、スリランカの人に合ったやり方で指導されているということが印象に残った。専門家によると、1から10までを教えるのではなく、まず成功例を見せる、成果を味わわせることを指導していく上で留意しているのだそう。自分たちで気づくことから、自立への道が広がる。インフラの整備、酪農家同士の連携、宗教上の慣習など様々な問題はあつものの、見学先のご主人手作りのジオラマには、自分たちで自国の酪農を変えていくなつたという夢が詰まっており、それを小原さんという日本人が確かなアドバイスのもと、牛舎の様子を静かに見守っている。</p>

視察先別報告/スリランカ民主社会主義共和国

千葉 真美	<p>小規模酪農プロジェクトでは、スリランカ国民の持続能力について考えさせられました。この視察は長期のプロジェクトという他に様々な問題が付いてまわっていた為、より感じたものも大きかったです。スリランカでは宗教上「牛」の「在り方」がとても難しい国です。酪農を営む方にとっては永遠の課題とも言えるのですが、それを抱えながらも地道に「小規模酪農プロジェクト」の一環として地域勉強会活動を行い、酪農家の意識や技術向上を目指しています。</p> <p>視察先の農家には主人が製作したミニチュアの「将来の農場」模型が飾られており、目の前に将来像を置く事によって常に高い意識を持つように工夫していました。この意識の高さと持続能力がある限り、ODAで日本がスリランカの酪農家へ伝えた技術は、当初以上に成長し続けるだろうと強く感じました。</p>
中島 杏子	<p>人工受精や後代検定など、扱っている内容は専門的で、一酪農家がそこまでのことができるのかと最初は疑っていた。しかし実際に当事者たちが求められることは、カレンダーへの記録や、餌となる草の裁断など、簡単に始められることで、なおかつ彼ら自身が成果に気づきやすいものが多い。技術や知識を持っている側が一方向的に、持っていない側へ押し付けるような体制をイメージしていたが、ODA自体が全くそんなシステムではないということに気づかされたプロジェクトであった。ODAに対してこのようなトップダウン的イメージを持っている人は少なくないと思う。そのような誤解を防ぐためにも、ODAについての正しい認識を広めることが必要であると感じた。</p>
林 真理	<p>モデル農家を視察させていただき感銘を受けたことは、JICAの技術支援の方々、ただ正しい技術や知識を教えるのではなく、宗教や習慣等スリランカの文化に合わせて、同じ目線で「体験」を通して伝えているとうことであった。今までの彼らの手法や言い伝えと異なる知識を、決して無理には押し付けない。具体的には、1日2回の搾乳や干し草を細かく刻んで与える等、共に体験する中で、実際に乳の量が増えたり、乳の脂肪分が高くなることで高値で売れるようになる。体験を通して伝え、結果を出し、収入が増え、生活が変わる。</p> <p>「支援」とは、上からの一方向的なものではなく、同じ目線で共に成長していくことを意味するのだと、改めて実感することができた。</p>
安井 美貴子	<p>既に完成された形ではなく、相手側がステップごとに意義や目的に気付く形で技術が提供されている過程を見て、持続性の面では最終的には効率的であり、また発展性の面でも大いに可能性があり得ると感じた。実際に、モデル農家の方は、日本人が胎児にクラシック音楽を聴かせるようにインド系音楽を乳牛に聴かせており、こうした点から、彼らが自発的により良いものを生み出そうとしている姿が感じられ、技術協力プロジェクトとして非常に上手いといえる。ただ、仏教国のスリランカでは食肉に関する禁忌事項が多くあり、牛も食肉としてあまり用いないことから、後代検定などに用いられる雄牛の需要は少ないだろう。今後は乳牛の数を増やすのではなく少数精鋭の形で進め、酪農家は兼業として養殖やバイオ燃料の開発などを進めることが求められるのではないだろうか。</p>
山口 佳奈子	<p>一言で牛乳の生産性を上げる、酪農家の収入を上げると言っても、その目標達成にはインフラ整備、物資、財政面など多方面からの整備がないと困難である。また、文化習慣の問題もあり、カレンダーを利用し記録をつけたり、搾乳前に石鹸で手を洗うなどの習慣を徹底するまでには大変な努力、根気の要るプロジェクトであると感じた。</p> <p>しかし、見学をさせていただいた酪農家フォンセカ氏は、技術改善に前向きに取り組む意識の高い方であった。家の目の前に将来の牛舎模型があり、夢の構想を具体的に持っていることから遠くない未来にその夢は実現するだろうと確信した。彼のように生産性向上について目覚め始めた酪農家が着実に増加してきていることは、このプロジェクトの成果が出ていることを示していると思う。</p>
荒尾 敏雄	<p>現地では、チーフアドバイザーの方からお話を伺い、後代検定の仕方(人工授精の様子)を教えてくださいました。スリランカの人々は、宗教的な意識から牛を聖性のある動物として捉えている。したがって、チーフアドバイザーの方のお話を伺うまでは、牛の人工授精は難しいのではないかと考えていた。しかし、人工授精そのものの意義を伝え、またそうすることで生産量が増加することを丁寧に指導することで、後代検定の実施が成功していることを知った。たとえば、人工授精に関するパンフレットやカレンダーを作成し配布する。こうした丁寧な指導の結果が、慣習や宗教上の拘束を変えていけるのだということが分かった。</p>

【技術協力プロジェクト】健康増進・予防医療サービス向上プロジェクト

概要

スリランカの5大死因のうちの4つを占め、深刻な問題となっている心臓疾患やガン等の非感染症(Non-communicable Diseases) (以下、NCD)を予防するための効果的、かつ効率的な実施モデルの策定と、スリランカ全土への導入に対する協力を実施。

スリランカ

坂田 有輝	<p>ここでは、「今できる範囲で」ODA支援を続けていくことの大切さを知った。生活習慣病に関しては日本も同様の問題を抱えている。また、生活習慣病予防に関しては日本のほうが進んだ技術や知識を持つ。しかし、日本の高い技術や製品をスリランカに持ち込んでも金銭的な問題で一部の高所得層のスリランカ人の予防にしか貢献できない。常に、高い技術や知識を持ちこめば問題が解決されるわけではない。スリランカに住む人々、全体のことを考えた支援でなければならない。日本のように高い技術や効果の大きい製品を使用できなくとも、今ある物や知識を活用して生活習慣病の予防を促進させる方法が、今回のプロジェクトでは取られていた。このことにより、低所得者も予防対策を学ぶことができる。また、プロジェクトが終了した後もスリランカの住民たちによって予防を継続させていくことができる。</p>
佐藤 真梨	<p>2012年春、WHO(世界貿易機関)は世界の3人に1人が高血圧であると発表した。「生活習慣病」は先進国で蔓延しているイメージがあるが、それは贅沢から引き起こされるのではなく、食生活の偏りから起こり、途上国を含めて世界中で深刻化している。スリランカでは紅茶に入れる多量の糖分とミルク、カレーや揚げ物を好む食生活から高血圧、高血糖になりやすい。そもそも日本で行われている「健康診断」という概念がないため、自身の体調の現状が分からないのだ。訪れた視察先では日本の支援のもと、身長・体重・血圧・血糖値を計ることで自身の体調を知るとともに食生活の改善指導を行っていた。この支援は初期段階に行われ、それ以降は現地の人々が主体的に進めているという。機材は、日本のような最新のものではなくシンプルで、「現地にあるもので継続的に出来ることを」という言葉が印象に残った。</p>
高野 文	<p>保健医療に関しては、まず体重管理等の習慣がないこと、そして食育という視点がほとんどないことが問題点としてあった。肥満はスリランカの昔からの食生活に問題があるとも言われるが、昔と比べれば農村部の人々もバイクを使っているし、今だからこそ、改めて生活習慣についての正しい知識が必要とされていた。これらを広めるべくモデル県の一つとして、クルネーガラ県内に90箇所の診療所が置かれ、そこで無料の健康診断や保健指導が行われている。</p> <p>このプロジェクトの目標は、生活習慣病予防のための効果的・効率的な予防対策モデルの策定であったが、今年度3月の終了に向けて、実はプロジェクト目標は達成され、既に全県での診療所開設が進んでおり、それぞれの連携を取る仕組みもできていた。次のプロジェクトの実施も考えられているとの事で、最終的にスリランカにおける健康促進に繋がることを期待する。</p>
武原 智明	<p>生活習慣病という概念がなく、自分たちの食文化や生活スタイルが「こういうものなのだ」と思っているスリランカの人々の意識を変える。</p> <p>医師や看護師が一人一人丁寧に声をかけている様子や講座を真剣に聴いている受診者の様子を見ると、受診に来ている高齢者や女性など家庭にいる人から家庭全体へ健康診断への関心や生活システムの改善への意識を高めることにつながっていることがうかがえる。このプロジェクトを支える西野さんという日本人が何年もかけて小さな種を蒔き、その種からようやく芽が出始めた。一つ一つは小さいが確実に芽生えている。そんな印象を受けた。</p>
千葉 真美	<p>NCDプロジェクトでは、日本との驚くべき共通点について興味深い情報を得る事が出来ました。日本と同様にスリランカでも生活習慣病が死因の多くを占めているという事実に驚きました。</p> <p>プロジェクト内容は生活習慣病の予防策のPRや、定期検診サービスを現地で展開するなどの医療促進協力です。スリランカは日本と違い医療費は無料ですが、予防について必要性を感じてもらえないことや、診察を受けられる施設が少ないという部分で、国全体の住民に十分なサービスを提供出来ない問題が挙がっていました。他国で「習慣」を改善させるという事は本当に難しいですし、デリケートな問題でもあります。なので「現地の方同士の口コミ」が最も効果的なPR手段になると感じました。医療に関する情報は世間話の一言がとても重要なPRだったりします。今後もこのプロジェクトについては、伸び代が大きいものの一つではないかと考えています。</p>

視察先別報告/スリランカ民主社会主義共和国

中島 杏子	生活習慣病を始めとする非感染症への対策として、住民の健康診断や食生活指導を行っているところを見学した。参加している住人は8~9割が女性であり、夫や子供がいる年齢の方が多かった。女性を中心にこういったプロジェクトを進めることは、その女性を通じて家庭の食事をコントロールすることができるため効果的ではある。しかし、本当に家族全員の生活習慣と食生活を改善するためには、母や妻による半自動的な食事コントロールだけでなく、本人たちによる主体的な取り組みが必要になってくるだろう。したがって今後は女性だけではなく男性に対して、どのようにアプローチをしていくのが課題として挙げられる。
林 真理	スリランカでは、生活習慣病を中心とした非感染症が死因上位を占めている。これは、先進国に近いものだ。短期間のスリランカ滞在を通してだが、塩分・糖分・脂肪分の多い食生活や運動不足、ふくよかである方が美しいとの美意識の相違等はすぐ感じられた。食生活は大切な文化であり、守り続けたいと感じるのは当たり前である。しかし近年、一家の稼ぎ柱の急死増加や、国が負担する医療費が拡大し、財政を圧迫することで問題が深刻化されてきた訳だ。「生活習慣病予防」と言葉で言うことは容易いが、毎日の生活習慣を改善することは容易ではない。それはまず、「知る」ということから始まる。己の体を知り、どのようにすべきかを知る。視察させて頂いた際、スリランカの方々がとても熱心に臨んでいた姿が印象深かった。「生活」「命」に関わる非常に重要なプロジェクトであると感じた。
安井 美貴子	痩せた貧困者であろうとコレステロール値が高い場合があるように、単純な見た目のみで内部の数値は測れず、中進国スリランカにおける検診がいかに重要であるかが非常に印象的だった。それが身体に悪いものだとは知らずに甘い紅茶や揚げ菓子を大量に摂取する習慣や、太っていることを富の象徴として捉えてはやす文化を持つスリランカの人々に対して、健康診断を定期的に関心を持って通して、人々に予防の概念を広めている点で、NCDプロジェクトは効果を上げている。しかし、参加者を女性が占める現状があり、家庭において、食事などの面のみで間接的に男性の健康意識を高めるには、限界があるだろう。男性が直接健康への危機意識を感じられるよう、検診会の回数を増やすなどして、予防の概念をより一般化していく必要がある。
山口 佳奈子	身長、体重、血圧そして血糖値を測り、健康状態を把握する。そして保健指導を受ける。この活動について初めはとても普通のことのように感じていた。しかし、予防可能な疾病対策が行われないことで、容易に家計の稼ぎ手を失い貧困に陥ってしまう途上国の現状を知らなかったことを恥じた。プロジェクトの専門家西野桂子氏よりスリランカでは最近「健康=happiness」という健康増進運動が進んでいると聞いた。学校でも健康になるには生活の見直しが必要で、それが幸せな生活に繋がるという教育が始まっているという。このNCDプロジェクトは5年間の技術協力のうちあと半年を残すのみとなった。しかし、着実にスリランカの人々にこのプロジェクトが定着し、その持続可能性が高まってきていることを感じることができた。
荒尾 敏雄	NCDプロジェクトにより健康診断システムを構築し、スリランカに多く見られる生活習慣病の予防対策にあたっていた。このプロジェクトは本県では90カ所で行われている。今回訪れた施設では、こうした成果が実を結び、検診に訪れる人数が大幅に増加しているとのことであった。また、NCDは家庭、職場、病院、学校などの場において、健康増進活動を推進し、啓発活動も行っている。検診者は女性が多く、そこで行われる食事改善指導が実際に家庭の中で生かされている。その食事改善指導の様子も見学することができた。ただ、学校教育現場では、まだ食育指導が十分に行われておらず、担当者の方のお話では、今後は学校で食育指導も行っていきたいとのことであった。

【青年海外協力隊】ソーシャルワーカー活動視察(クルネーガラ)

概要 青年海外協力隊のソーシャルワーカー隊員が、老人ホームや老人会の巡回、体操やレクリエーションの指導を通じた、高齢者の健康意識啓発活動を実施。

スリランカ

<p>坂田 有輝</p>	<p>スリランカのためだからと言っても、被支援国から受け入れられていなければ良い支援とは言えない。支援する側と支援される側の信頼関係を築くことが国際協力で一番大事なことだと感じた。老人会で生活習慣病予防の一環として、スリランカの高齢者を対象に運動を教える福田さんの活動を視察、体験させていただいた。スリランカの老人たちの反応はよく、老人たちは、福田さんが体操を終えるたびに拍手をおくる。福田さんが、スリランカの老人会の人々に快く受け入れられていたのだ。一方的に運動を教えるのではなく、しっかりと信頼関係を作ることが高齢者の方々も自ら、楽しみながら運動しているように見えた。青年海外協力隊の活動が現地に溶け込んで行われているのだと知ることができた。</p>
<p>佐藤 真梨</p>	<p>派遣前に日本でソーシャルワーカーとして働いていたという隊員の話は、日本とスリランカ相互の福祉事情を考えるきっかけとなった。彼は現在、スリランカ各地で体操を通じた介護ボランティアを行っている。彼が体操を教えると、現地の方々は笑顔で一息懸命体を動かし、作業ごとに拍手をして楽しそうに取り組んでいた。現地の方々から彼を信頼していることが見て取れた。</p> <p>日本の老人会では介護する側、される側が決まっている。しかし、スリランカでは老人会の近隣住民が自発的に老人会に行き、何かを教えたり、食べ物を持っていったりしているようだ。隊員は「日本のような制度によるネットワークではなく、地域ネットワークがしっかりしているところに日本も学ぶ姿勢を持つべきである」と言っており、彼が現地で学んだことを日本に還元していきたいという言葉が心に残った。</p>
<p>高野 文</p>	<p>福田隊員はシンハラ語で現地の方と往年の友達かのようにコミュニケーションをとっておられた。福田隊員はその老人会に毎日いるわけではなく、デイサービスや老人会を定期巡回されているとのことだったが、視察させていただいたところだけでも、いかに彼が地域に根付いた活動をされているのかがい知ることができた。特に印象的だったのは、福田隊員が体操の順番を間違えたり忘れた素振りを見せると、参加者の方から次はこれだよと声上がり、終始とても和やかなムードだったことだ。生活習慣病予防のための体操を少しずつ覚えてくれていることは、隊員にとっても嬉しいことだそう。こういった支援から、次は現地の方がソーシャルワーカーとして福田隊員のように活躍することが当たり前になる仕組みづくりということも、今後長期にわたっての課題ではないかと感じた。</p>
<p>武原 智明</p>	<p>現地の方々から「マサ、マサ。」と声を掛けられ、早く健康運動をしようと催促されている姿から、福田隊員が地域住民に慕われていることが一目でわかった。スリランカでも日本同様に生活習慣病や高齢者の介護が大きな問題になっているそうだが、それらに対する意識を改善していくことは非常に困難であると考えられる。約2000ヶ所の老人会やデイセンターを協力隊が回ったところで劇的な変化は見込まれない。しかし、彼らが一つ一つの施設を回り、一人一人の老人の手を握ることで、その施設の人々が笑顔になり、何回も施設を訪れることでその笑顔の輪が広がっていることを思うと、彼らの活動が本当に尊いものだと感じる。クルネーガラでは、一步一步は小さく、一つ一つは小さな点でも、確実に前に進み証を刻んでいる、そしていつか長い線へ大きな面へと広がっていくことを望む。</p>

視察先別報告/スリランカ民主社会主義共和国

千葉 真美	<p>青年海外協力隊員の活動では、ODAにおける技術協力の基盤ともいえる、人と人との繋がりを実感しました。ソーシャルワーカー活動の必要性は全世界共通のものですが、国外でその活動を浸透させるには苦勞が耐えない事かと思えます。今回の視察では現地の方々が、逆に日本人の私達をリードするように自ら一緒に身体を動かしたり、話をしたり、歌を歌おうとする意欲的な姿勢を見せてくれました。重要なのは、それが決して当たり前前の出来事ではなく、その意欲を掻き立てているのが現地で活動をしている協力隊員の存在だということです。人が人を変えるというのはとても難しいことです。それを国外で行い持続していくという活動に、本来のODAの在り方をとても感じました。たくさんの資金を要する開発や技術などがODAの応用編とするならば、この協力隊員の活動が基本編でありなくてはならないものだと思えます。</p>
中島 杏子	<p>少しずつスリランカ人の平均寿命が延びていく中で、最終的に日本の介護技術を広めていきたいというお話を伺った。福田隊員が、施設に通う女性たちと一緒に生活習慣病を予防するための様々な体操や運動をしているのを見学し、ここでもやはり男性の少なさが気になった。NCDと併せて、生活習慣についての取り組みがここまでなされているのであれば、年齢や性別の違いは関係なく、より多くの人に拡散されるべきだと感じる。また、この活動を行う協力隊員としては福田隊員が二代目だということもあり、大体の活動の基盤がすでに整っているという印象を受けた。地域の中では活動が軌道に乗っているのだから、これから先、地域や対象を変えて発展していくことも期待される。福田隊員と現地の方との親密さや信頼関係を感じられたことが印象的だった。</p>
林 真理	<p>この度、青年海外協力隊、福田隊員の活動現場を視察させていただき一番印象的だったことは、福田隊員がスリランカの人々に溶け込んでいることであった。プロジェクトは高齢者への健康指導が主なものであるが、人々は『指導を受けている』というより、『共に過ごす時間を心から楽しんでいる』ように見えた。福田隊員は、老人会や地域のセンターに自ら足を運んで活動し、現地の人々の信頼、幸福、そして未来を担っているとさえ感じた。様々なODAプロジェクトがあり、賛否両論はあるが、これはとても付加価値の高い活動である。</p>
安井 美貴子	<p>予想を超えた大勢の参加者が、福田隊員の作る和やかな雰囲気のもとで体操をする姿には、健康意識の向上に加え、コミュニティ維持の効果が感じられた。自宅に籠りきりにならず、外気を吸って定期的に他者とコミュニケーションをとる場を設けることは、情報交換の意味でも活力をつける意味でも、重要だと言えよう。また、普段時間的な問題で集まりに参加できない成人男性の健康意識をも改革するには、参加者の多くを占める女性や子どもが自宅で体操を実践することが求められる。しかし、体操中に提供される大量の甘いお菓子や揚げ物は、体操で消費した以上のエネルギーを与える量であり、まだまだ健康意識の低さを感じざるを得なかった。料理の担い手である女性たちに対して、集まりの場で栄養指導などを行うことにより、自宅での間接的な影響をより強めていく必要があるだろう。</p>
山口 佳奈子	<p>日本と同じように少子高齢化が進むスリランカで、高齢者に対し、巡回健康指導、体操やレクリエーションを通じた健康意識向上や健康知識の普及をされている。私たちも一緒に体操に参加させていただいた。やってみると難しい体操もあり、それを難なくやってしまう人、ついていけない人様々であった。参加している人々は福田隊員に親しみ、信頼を持っており、温かなコミュニケーションが印象深い。なかには孫や子どもと家族で参加している人々もあり、家族単位で楽しみながら健康管理へ関心を持ち始めていることがわかった。</p>
荒尾 敏雄	<p>クルネーガラ老人会を訪れ、福田隊員によるソーシャルワーカーの仕事を見ることができた。今まで青年海外協力隊員の活動を見たことがなかった。隊員がたった一人で、現地の老人に向けてソーシャルワークを行う様子や現地の人々と信頼を築きながら活動する様子がとても印象的であった。こうした活動の様子やその姿勢は、私たち教員も知らなければいけないことであり、また学ばなければいけないことであると感じた。これまでにJICA出前授業を通して、隊員の方とお会いすることはあったが、その現地での姿までは分からなかったため、今後は自分で見た隊員の様子や姿についても、学校現場において子どもたちに伝えていきたいと思った。</p>

【青年海外協力隊】環境教育活動視察(クリヤピティヤ)

概要 青年海外協力隊の環境教育隊員が、配属先市役所の実施する廃棄物処理事業に対する支援や助言とともに、地域住民や学校へのリサイクルをはじめとした廃棄物減量の啓発活動を実施。

スリランカ

坂田 有輝	<p>スリランカの町を見ていると、道端に平然とゴミが散らかっているのがよく目に入ってきた。そのゴミを減らしていこうとする本プロジェクトの重要性を実感させられた。しかし私がこのプロジェクトで最も感心させられたことは、ゴミを減らすことだけに留まっていなかったことである。ゴミから堆肥を作る、コンポストによるゴミ処理が実行されていた。これにより作られた堆肥はスリランカの農業に活用されるという。ゴミを減らすことを通して、資源の再利用方法を本プロジェクトでスリランカに伝えることができています。日本のODA支援の器用さにとっても感心させられた。</p>
佐藤 眞梨	<p>スリランカはゴミのポイ捨て問題が深刻である。なぜなら現地の人たちはゴミを道端などに捨てることを悪いと思っていないからだ。住民の意識を変えるため、隊員は家や学校を訪問し、ゴミを捨てることで引き起こる問題性や分別することの大切さを教えていた。スリランカのゴミの大半は生ごみなので、しっかり分別を行うとゴミの7割を堆肥にすることができる。日本ではゴミは燃やせばいいという考えが一般的。だが、「ゴミを単なるゴミで終わらせず、新たな資源として活用できるのだという考え方をもっと普及させたい」という隊員の言葉から、持続可能な社会を形成できる可能性を感じた。そして何より驚いたのは、活動の際に現地の人から親しみを覚えてもらうために、彼女が民族衣装のサリーを着ていたことだった。現地の人々に寄り添いながら懸命に活動している彼女の姿があるからこそ、スリランカと日本の間に信頼が築けているのだと感銘を受けた。</p>
高野 文	<p>この日までの長い移動中、道に捨てられたゴミの多さが気になっていたのだが、確かにクリヤピティヤの町は他と比べると綺麗だった。しかしそもそもなぜゴミが多いのかというと、ゴミに対する意識が全く異なるからだそうだ。持っているものが元々少なく、捨ててもほとんどが土に還るもので生活してきたスリランカの人々が、プラスチックやビニール等を使い始めたことによって、それは紛れもなくゴミであるのにも関わらず、捨てることが良くないという意識が根付いていないというのだ。大村隊員が地域住民と話し、そうした意識改善の活動を行う中で、土に還らない素材を持ってきたのは先進国じゃないか、と言われたことがあったそうだ。そこで大村隊員は、使うことを選んで今それで生活しているのはあなた、ならばどう使うかを一緒に考えようと、日々、地域での地道な活動をなさっている。本当に難しい人の意識改善というものを、自らの意志を持ってやっておられる姿が目には焼き付いた。</p>
武原 智明	<p>日本式の分別回収がスリランカでも成功するのか。半分疑って視察先に向かった私たちは、ゴミがほとんど落ちておらず、異臭も感じさせないクリヤピティヤの街並みを見て驚いた。これは、分別回収をはじめとする環境整備活動に積極的な同市長と日本からの協力隊の指導助言があったからだそうだ。今年の3月から赴任した大村隊員は、前任の隊員の意味を受け継ぎながらも、女性ならではの細かい視点でゴミの分別指導に当たっている。大村隊員は、市役所の職員とのコミュニケーションを大切にしながら、ゴミ処理施設へ毎日自転車で行ったり、一般家庭を回りながら事情説明をしたりと地道な活動を続けている。家庭用コンポストや学校での環境教育など新しいステップにも挑戦し、スリランカでの環境分野の先進的な役割を担っており、これがスリランカ全体に広がっていくかと思うと、日本人がここでも大きな業績を作ろうとしているということに感銘を受けた。</p>
千葉 真美	<p>青年海外協力隊員の活動から、日本国内からは見えなかった事実を知る事が出来ました。クリヤピティヤではゴミ問題が非常に大きな課題とされており、住民の環境問題に関する意識が低いと聞いていました。しかし実際に隊員から聞いた情報では、クリヤピティヤはスリランカの中でもゴミ問題に関する意識が高く、事実ゴミ回収などについては分別を意識しており、且つ、ゴミ拾い活動も進んで行っているという事でした。これらは、今まで派遣された隊員の働きかけによるものが多く、現在も環境問題に関する知識を伝えるために自ら学校へ足を運んで、地道な普及活動を行っています。このように、日本国内にはスリランカでの環境活動情報が行き届いていない現状です。非常に勿体無い部分でもあり、とても残念な気持ちでした。このような現状について、この活動報告を通して日本も同時に刺激を受けられれば、より良い循環が出来上がるのではと思いました。</p>

視察先別報告/スリランカ民主社会主義共和国

中島 杏子	<p>公的な場所で働くスリランカの女性の正装は、サリーである。大村隊員も仕事の時はいつも正装に身を包んでいるようで、私たちを出迎えてくれた時、一瞬現地の方との見分けがつかなかった。市役所で市長と接するときの大村隊員も、ごみ処理場やダンピングサイトでタミル人労働者と接するときの大村隊員も、常に真摯に相手と向き合い、笑顔でコミュニケーションを取っていたことが印象に残っている。</p> <p>ごみの問題は、単に街の景観に関わるだけでなく、伝染病の原因にも結びつく可能性があることから生死にも関わる問題である。大村隊員が活躍している地域以外の場所でも、少しずつごみの分別や処理の問題が好転してほしいと感じた。</p>
林 真理	<p>クリヤピティヤの環境対策の活動現場を視察し、大村隊員の言動に心を打たれた。日本からの技術や経験を、スリランカの文化や習慣を理解した上で工夫して伝えるという素晴らしい活動をしていた。早朝、自ら町を回ってゴミ収集し、ゴミ処理場の厳しい作業も共に行う。そういった日々の努力によって現地の人々からの信頼を強く受けていることを肌で感じた。</p> <p>まず理解をし、それを実行し、そして習慣化する。より良い行動を「習慣」づけることが重要なのである。学校教育による若者からの意識改革をも試みており、このような大村隊員の活動ひとつひとつが、日々の生活に変化を生み、結果を出し、良い習慣が定着していく。スリランカの更なる明るい未来を感じられた瞬間であった。</p>
安井 美貴子	<p>ワーカーとして雇われた低カーストのタミル人に対して、仕事仲間という同等の立場で接する大村隊員の姿が印象的だった。</p> <p>最大支援国の一つ日本の人間として作業を共有しながら真っ直ぐ向き合うことにより、スリランカのマイノリティとして差別を受ける彼らに、単純に最終処理場での職を与えるだけでなく、地位向上を伴い得る発言の機会を与えていた。また、数年前と比較して町が美化されているのは、現時点では直接的なワーカーによる清掃活動や収集車のごみ回収によるものであるため、今後より国民の意識改革が求められよう。</p> <p>学校教育現場やメディアから処理場やそこで働くワーカーの姿が伝えられることによって、国民のごみに対する意識が変化した結果、ポイ捨ての改善や分別により処理すべきごみ量が減少し、最終的には処理場でのタミル人の職場環境も改善されることだろう。</p>
山口 佳奈子	<p>大村隊員はコンポストプラントプロジェクト、ゴミの収集・運搬に関しての運営支援、学校でのゴミ減量化への啓発運動をされている。</p> <p>スリランカではオーガニックごみがごみ全体の8割を占めることからコンポストを作るのに適した環境であり、また農業においてそれらを積極的に使って生産性を高められるよう広報活動を強化したいと言われていた。</p> <p>スリランカではまだたくさん足を使った分だけたくさん人の顔を知ることができ、そこでの繋がりが仕事にも生き、ごみの分別普及活動にもつながると言われていた。大村隊員は、私たちが伺った際もスリランカの民族衣装のサリーを着て案内をしてくれた。動きづらく不便であると思う。しかし「現地の方が喜んでくれるから」と笑顔で話す大村隊員は地元根付き、地元の人々との繋がりをとても大切にされていた。</p>
荒尾 敏雄	<p>クリヤピティヤにおける市の環境政策の一環を見学することができた。ゴミ収集やゴミ処理場について詳しく説明してもらった。ゴミの分別やリサイクル、町の環境美化を推進する政策が、しっかりと実施されていることが分かった。実際に町を訪れると、その環境が美しく、路上にゴミがほとんどなかった。地域住民の意識改革が行われつつあると感じた。また、ここでも隊員の方が市役所の中で信頼を勝ち取り、実践していることも分かった。ゴミ処理場で共に汗を流し、その様子を常に確認する中でそういった信頼を築いていったのだと思った。隊員の方の熱い思いが伝わってきて、こうした隊員の方のスリランカに対する思いがなければ支援・協力は成功しないと感じた。</p>

【有償資金協力】コロンボ港緊急改善事業

概要

欧州とアジアを繋ぐ中継港として重要なコロンボ港の開発に対し、これまで10件に及ぶ円借款事業を実施してきた。現在は、船舶の入港時間短縮し、港湾の安全性・利便性向上のため、航路の整備を円借款で実施している。

スリランカ

<p>坂田 有輝</p>	<p>途上国支援が、先進国に近いレベルのものであると感じた。私は、途上国支援と聞くと、パソコン等の先進国で扱われる精密機器が持ち込まれたり、そのような高度な技術を有しなければならないような支援は行われていないものという思い込みがあった。コロンボ港では、巨大なコンテナを操作するために、先進国と同等とも思えるパソコン機器が扱われていた。しかも、それらの機材を操作していたのもスリランカ人である。もちろん、スリランカの別の地域では身長、体重の測り方といった簡単なことをアナログな方法で教えているところもある。一方、コロンボのような発展した地域では上述したような精密機材を用いた、かなり高度なプロジェクトが支援されている。発展途上国といえども、発展している地域、そうでない地域にそれぞれ合わせた支援が必要なのだと感じた。</p>
<p>佐藤 眞梨</p>	<p>コロンボ港を一目見て、広大であり、かつ整備が進んでいることに驚いた。港内には巨大なコンテナが積み上げられ、世界から来航する大型船がいくつか港に泊まっていた。まさにハード面の支援であり、人の顔が見えにくいことから現地の人の声分かりづらいが、日本のODAの長期的な取り組みによってコロンボ港が発展してきたのだということが分かった。そしてこうしたマクロな見方も国際協力には必要不可欠だと感じた。コロンボ港の存在は貿易港であり、外貨収入の基盤として重要である。港内の施設ではコンピュータが駆使され管理も行き届いていた。現在も開発段階にあり、今後もさらに発展が見込まれるコロンボ港に期待したい。</p>
<p>高野 文</p>	<p>行ってみたコロンボ港は、まさに圧倒されるほどの広さ、整った施設、大きな船。本当に途上国に来ているのか疑いたくなるような景色を目の当たりにした。コロンボ港には新たな構想もあり、中国からの支援によってさらに巨大な港の建設が始まっていた。今回の視察の中では、中国と日本の支援を比べて考えることが多かった。中国は簡単にお金を出してくれるが、質に疑問点があるということ。逆に日本はいいものを作ってくれるが、それまでに細かい取り決めがあり着工までに時間がかかる。最終的にはスリランカ政府が何を重要視し、判断していくかにかかっているが、スリランカ国内の持続可能性を見越した上で、正しい支援がなされ、今後の発展に繋がっていくことを期待する。</p>
<p>武原 智明</p>	<p>水力発電所同様、広大な敷地の中の各所に日本の技術力の高さと日本ならではのきめ細やかさが見受けられた。スリランカが海上輸送でアジアの中心的存在となり、スリランカの経済の一端を日本が担っているのかと思うと日本人として誇りに感じる。他のアジア主要港との競争のためにスリランカが選んだ道は、港の大型拡張。2023年完成予定の超大型プロジェクトは中国が出資しているという。現在建設中の埋め立て地は、完成したころには、日本の力で造ったものがかすんでしまうかもしれないと感じさせられるほどのとてつもないスケールだった。しかし、たとえどんなに大きなものがそびえ立っても、日本への感謝の念と信頼は絶対に消えない。それは、港湾担当者の言葉から、そして、コンテナ取容場にある日本企業名が記されたガントリークレーンから感じ取ることができた。</p>

視察先別報告/スリランカ民主社会主義共和国

<p>千葉 真美</p>	<p>広大な敷地には多くのクレーン車と鉄筋などが積み上げられ、あまりの壮大さに思わず周囲を見渡してスリランカである事を確認してしまう程です。 建設現場で働いている従業員の方々に至っては、皆さん目をキラキラとさせてこの仕事自体に誇りを持って、そして何より港の完成を期待しそれを楽しんでいるかのように感じました。 日本はとんでもない将来性を持ったものに資金協力をしたんだと、良い意味で恐さ半分、期待感で一杯になりました。スリランカはこのコロンボ港を上手に利用し、近いうちに先進国と変わらない大きな都市となると確信しました。これが現実となった際には、日本の港町と共にスリランカの港町おこしプロジェクトなどを企画したいものです。お互いに成長しあえる国と国との理想的な関係を築き合えたら最高だと感じました。</p>
<p>林 真理</p>	<p>空港や港は各国のセキュリティー上の問題もあり、特別な許可証が無ければ一般人の内部立ち入りは許可されていない中、私どもが視察することを快く迎えてくださったことに心から感謝している。まず港の説明を受け、スリランカの未来にける熱い想いを強く感じた。担当者の方が満面の笑顔でコロンボ港の未来図を語ってくれたのがとても印象的であった。コロンボ港は円借款により建設され、現在では貿易貨物の90%を担うスリランカの経済を支える重要な港となった。欧州とアジアを結ぶ、南西アジアのハブ港となった今、2028年までの更なる開発が中国によって進められていた。また、この開発を通して雇用を生み、他の側面である雇用問題に対する政府の対応をも知ることができた。また、予算や工期の制限があり、中国による建設となったことに対する想いに、言葉を詰まらせていたことも印象深かった。</p>
<p>山口 佳奈子</p>	<p>植民地時代に建造されたオランダやイギリスの建物が今なお施設として機能しているエリア、また、現在の港の7.5倍の規模に及ぶ港湾整備が進行中のエリアがあり、スリランカの「いとむかし」が凝縮された港であった。 説明の中で、本来であれば800人の労働者で回すことができる仕事に1600人も雇用し、雇用安定を図っているという話があった。港を経営しているのが国であるからこそできることであろう。しかし、さらなる発展を続けるためには、この労働者数の過剰状態は経営の効率化やコスト面から見ても改善すべき課題となってくると思う。</p>
<p>荒尾 敏雄</p>	<p>JICA事務所長からコロンボ港の状況と新しい事業に関するお話を伺うことができた。コロンボ港は日本にとってもシーレーンとして重要な場所であり、南西アジアの重要なハブ港である。日本政府は、これまでに11件に及ぶ円借款事業を通じて支援を行ってきた。現在は、コロンボ港緊急改良事業として、港北側の航路を整備し、大型船舶の北航路通過を可能にする工事を行っていた。現地では、新しく工事中の港北側の見学もできた。私は現在、カタールのドーハ日本人学校に赴任していることから、所長に中東との結びつきについて質問すると、コロンボ港はドバイからの船も立ち寄ることのであった。中東との結びつきについても知ることができた。この事業により、コロンボ港は2つの整備された航路を持つ港となり、国際的な競争力が更に高まることが分かった。</p>

JICA 事業紹介

JICA は、日本の市民の皆様をはじめ、NGO、企業、大学、自治体などの協力のもと、開発途上国での幅広い活動を行っています。国内においても、全国15カ所の拠点をおき、地域の特性を生かした、国際協力事業を展開しています。

■ ボランティア派遣

日本での技術や経験を生かして、開発途上国の経済・社会の発展に協力するボランティアを募り、現地へ派遣しています。期間は原則2年(シニア海外ボランティアは1年または2年)で、20~39歳が対象の「青年海外協力隊」、40~69歳の「シニア海外ボランティア」、中南米地域の日系人社会で活動する「日系社会青年ボランティア」と「日系社会シニアボランティア」、1年未満の短期ボランティアがあります。「青年海外協力隊」は事業開始以来、2007年に派遣者累計が3万人を超え、2012年9月30日までに37,456名をまでに88カ国に派遣してきました。

応募に関してはJICA ボランティア募集選考窓口 TEL:03-6261-0264 まで。
ボランティア派遣についての詳しい情報は <http://www.jica.go.jp/volunteer>

■ 草の根技術協力

日本のNGOや大学、地方自治体、公益法人などが持つ経験や技術を生かして、JICAと共同で開発途上国での協力活動を行う事業です。地方自治体と行う「地域提案型」、開発途上国での活動経験が少ないNGOなどを支援しつつ行う「草の根協力支援型」、豊富な経験を持つNGOなどと連携する「草の根パートナー型」があります。活動期間は3年以内で、原則JICAの在外事務所がある国を対象にしています。人々の生活改善を目指し、コミュニティ・草の根レベルでの人を介した技術協力活動を展開しています。

■ 世界の人びと々のためのJICA基金

JICAでは、国際協力に関心のある市民や法人・団体からの寄附金を受け付けています。いただいた寄附金は、開発途上国の人々の貧困削減、医療や教育の提供、環境問題の解決などに取り組む、主にNGO/NPOの活動支援にあてられます。また、アフリカ地域への支援には「JICA基金(アフリカ支援)」も設けています。このほか、アフリカ地域の医療向上に顕著な貢献をされた方を表彰する「野口英世アフリカ賞基金」への寄附も受け付けています。JICAでは、皆様からお寄せいただいた寄附金を、皆様の想いととも途上国の人々に届けています。

JICA基金については、フリーコール0800-100-5931まで。または詳しい情報は<http://www.kifu.jica.go.jp/>

■ 世界の笑顔のためにプログラム

開発途上国で活動する青年海外協力隊などのJICAボランティアから寄せられる、現地で必要とされている教育、福祉、スポーツ、文化に関連する物品を日本国内で募集し、JICAボランティアを通して世界各地へ届けています。2003年に開始し、毎年1万点以上の物品を約50カ国の国々に届けています。

「世界の笑顔のために」についての詳しい情報は <http://www.jica.go.jp/partner/smile/>

■ 開発教育支援事業

JICAでは、世界の現状や開発途上国が抱える課題への理解を深めるため、日本全国の学校の先生や市民の皆様を対象に「開発教育(国際理解教育)支援事業」を実施しています。学校などへ青年海外協力隊OB・OG、海外からの技術研修員、JICA 職員などを派遣する「国際協力出前講座」、JICAの国内センターを訪問する「JICA施設訪問」、教師の皆様を対象に開発途上国での国際協力の現場の視察を行う「教師海外研修」、国際理解教育・開発教育の実践方法をお伝えする「開発教育指導者研修」、中高生を対象とした「JICA国際協力エッセイコンテスト」、グローバル教育を実践する際に活用できる作品を募集する「グローバル教育コンクール」などのプログラムを実施しています。

■ 大学との連携

大学は日本の知の集積場所として国際協力全般にわたる理論面、実証面での知見を持っています。こういったアカデミズムを中・長期的に取り込んで、国際協力の質を向上させるために、JICAは大学との連携促進に取り組んでいます。また、大学との連携を推進することにより、国際協力人材の育成・国民の国際協力への理解を促進し、オールジャパンとしての国際協力への取り組みをさらに強化していこうと考えています。

大学との連携についての詳しい情報は <http://www.jica.go.jp/partner/college/>

■ 民間企業との連携

近年、経済のグローバル化や企業活動の変化に伴い、開発途上国の経済社会開発における民間企業の役割がますます増大しています。JICAでは、途上国で民間企業が活動しやすくなるよう周辺のインフラや関連法制度の整備、産業人材育成などやPPPインフラ*1を支援するほか、企業の社会貢献(CSR)活動やBOPビジネス*2などとの連携・協働を通じて、開発途上国・民間企業・ODAのそれぞれがメリットを得られるよう、日本の民間企業とのパートナーシップを強化していきます。

*1) PPPインフラ:本来公共部門が提供していたサービスやインフラ整備などのうち、一部を民間が実施するもの。

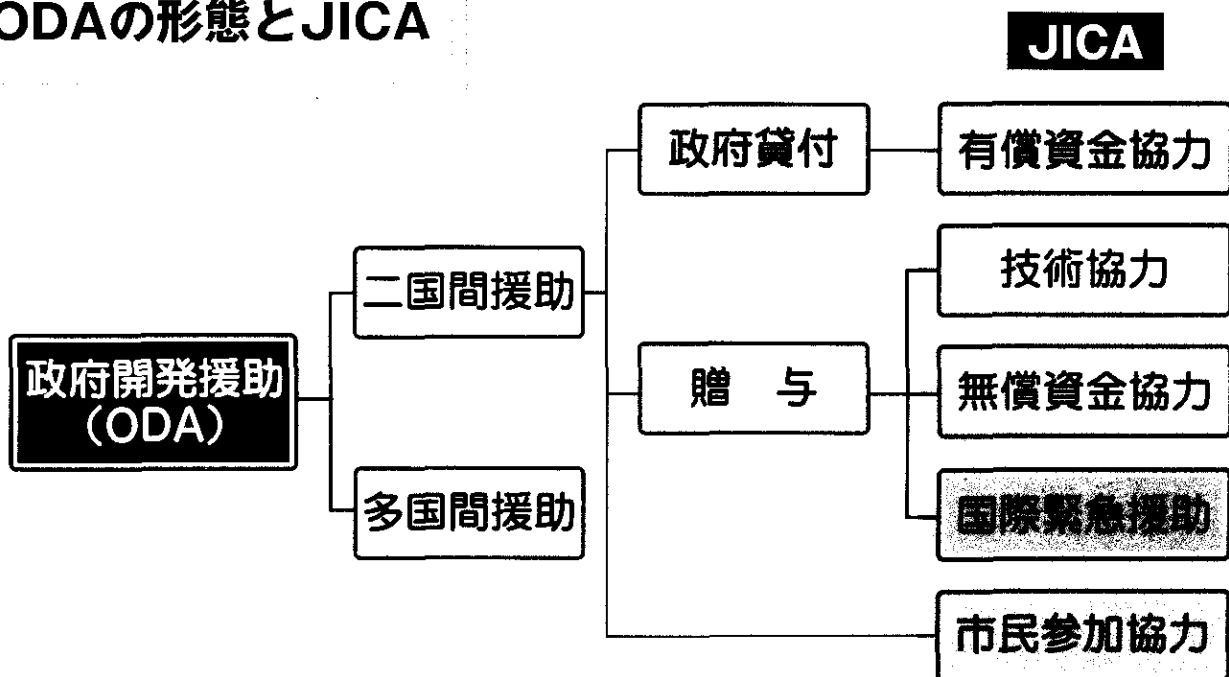
PPPはPublic Private Partnership(官民パートナーシップ)の略

*2) BOPビジネス:世界に40億人いるとも言われる貧困層を対象としたビジネス。

BOPはBase of the Pyramidsの略

民間企業との連携についての詳しい情報は http://www.jica.go.jp/priv_partner/

ODAの形態とJICA



用語・略語リスト

■ ODA

Official Development Assistance(政府開発援助)の略。

政府または政府の実施機関によって開発途上国または国際機関に供与されるもので、開発途上国の経済・社会の発展や福祉の向上に役立つために行う資金・技術提供による協力のこと。

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/>

■ 技術協力プロジェクト(技プロ)

協力計画を相手国と共同で作成し、日本と途上国の知識・経験・技術を活かして問題を解決していく取り組み。

「専門家の派遣」「研修員の受入れ」「機材の供与」を組み合わせ、プロジェクトとして一定期間に実施。

<http://www.jica.go.jp/project/>

■ 青年海外協力隊(協力隊、JOCV)

開発途上国からの要請(ニーズ)に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち、「開発途上国の人々のために生かしたい」と望む方を募集し(応募時に20~39歳)、選考、訓練を経て現地に派遣する、JICAボランティア事業の一つ。

<http://www.jica.go.jp/volunteer/index.html>

■ 草の根技術協力事業(草の根)

日本のNGO、大学、地方自治体、及び公益法人の団体等がこれまでに培ってきた経験や技術を活かして企画した、途上国への協力活動をJICAが支援し、共同で実施する事業。

<http://www.jica.go.jp/partner/kusanone/index.html>

■ 草の根・人間の安全保障無償資金協力(草の根無償)

開発途上国の地方公共団体、教育・医療機関、並びに途上国において活動している国際及びローカルNGO(非政府団体)等が現地において実施する比較的小規模なプロジェクト(原則1,000万円以下の案件)に対し、当該国の諸事情に精通している日本の在外公館が中心となって実施する。

■ 無償資金協力(無償)

被援助国に対し返済の義務を課さない資金協力のこと。病院や橋の建設等の社会・経済の基盤づくりや、教育、エイズ、子どもの健康、環境など、将来にかかわる協力を行っている。JICAが実施するものと、「草の根・人間

の安全保障無償資金協力」のように、外交政策の遂行上外務省が実施するものとに分かれる。

http://www.jica.go.jp/activities/schemes/grant_aid/index.html

■ 有償資金協力(有償)

通常「円借款」と呼ばれる政府直接借款(返済を前提とした資金援助)のこと。飛行場や橋梁、電力・ガス、運輸、通信などの経済社会基盤の整備、保健衛生などの協力を行っている。

http://www.jica.go.jp/activities/schemes/finance_co/index.html

■ STEP(本邦技術活用条件)

Special Terms for Economic Partnershipの略。日本の優れた技術やノウハウを活用した途上国への技術移転を通じて、日本の「顔の見える援助」を促進するために創設された円借款の供与条件。

http://www.jica.go.jp/activities/schemes/finance_co/about/standard/index.html

■ 5S

製造業・サービス業などの職場環境の維持改善で用いられるスローガン:整理、整頓、清掃、清潔、躰。

■ NCD

Noncommunicable Diseaseの略。非感染症疾患、いわゆる生活習慣病のこと。

■ BOPビジネス

Base of the Pyramidの略。

年間所得が3,000ドル未満の開発途上国の低所得者層のことで、世界中で約40億人が該当するといわれる。「将来的なボリュームゾーン」としてこの層を対象としたBOPビジネスは、世界的に注目されている。

■ JASSO

独立行政法人 日本学生支援機構

<http://www.jasso.go.jp/index.html>

■ JETRO

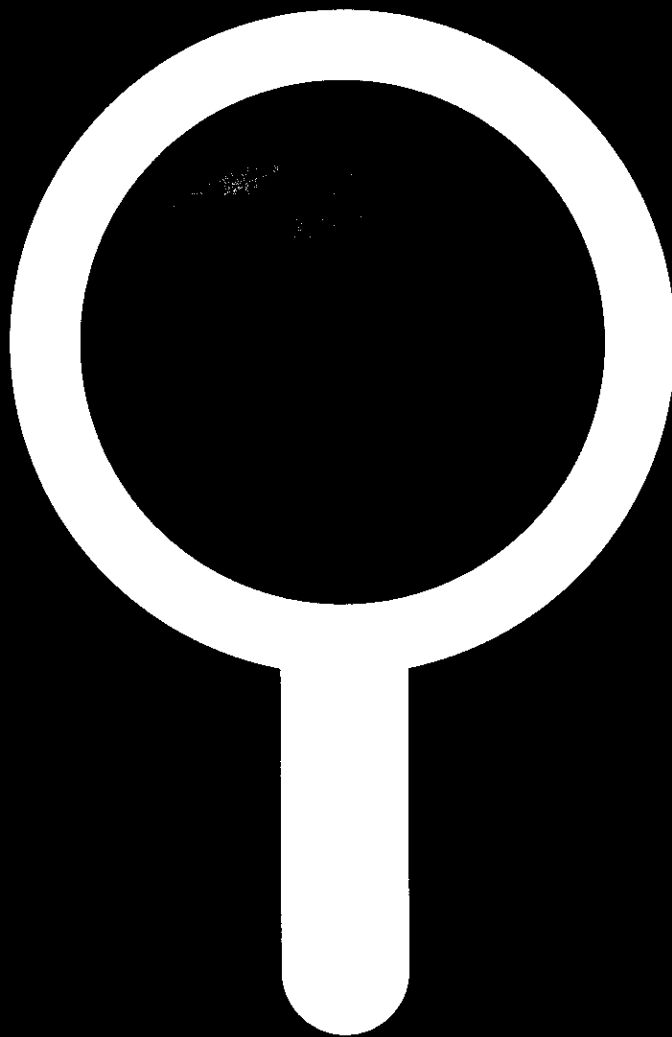
独立行政法人 日本貿易振興機構

<http://www.jetro.go.jp/indexj.html>

JICA国内拠点一覧

●JICA北海道 (札幌)……北海道(道央・道北・道南) (帯広)……北海道(道東)	http://www.jica.go.jp/sapporo/index.html	TEL : 011-866-8333
●JICA東北……青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県	http://www.jica.go.jp/obihiro/index.html	TEL : 0155-35-1210
●JICA二本松……福島県	http://www.jica.go.jp/tohoku/index.html	TEL : 022-223-5151
●JICA筑波……茨城県	http://www.jica.go.jp/nihonmatsu/index.html	TEL : 0243-24-3200
●JICA東京……栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、新潟県、山梨県	http://www.jica.go.jp/tsukuba/index.html	TEL : 029-838-1111
●JICA地球ひろば・栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、新潟県、山梨県	http://www.jica.go.jp/tokyo/index.html	TEL : 03-3485-7051
●JICA横浜……神奈川県	http://www.jica.go.jp/hiroba/index.html	TEL : 03-3269-2911
●JICA駒ヶ根……長野県	http://www.jica.go.jp/yokohama/index.html	TEL : 045-663-3251
●JICA北陸……富山県、石川県、福井県	http://www.jica.go.jp/komagane/index.html	TEL : 0265-82-6151
●JICA中部……静岡県、岐阜県、愛知県、三重 (なごや地球ひろば)	http://www.jica.go.jp/hokuriku/index.html	TEL : 076-233-5931
●JICA関西……滋賀県、京都府、大阪府、奈良県、和歌山県、兵庫県	http://www.jica.go.jp/chubu/index.html	TEL : 052-533-0220
●JICA中国……鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県	http://www.jica.go.jp/nagoya-hiroba/index.html	TEL : 078-261-0341
●JICA四国……徳島県、香川県、愛媛県、高知県	http://www.jica.go.jp/kansai/index.html	TEL : 082-421-6300
●JICA九州……福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県	http://www.jica.go.jp/chugoku/index.html	TEL : 087-821-8824
●JICA沖縄……沖縄県	http://www.jica.go.jp/shikoku/index.html	TEL : 087-821-8824
	http://www.jica.go.jp/kyushu/index.html	TEL : 093-671-6311
	http://www.jica.go.jp/okinawa/index.html	TEL : 098-876-6000

国際協力レポーター事業はJICA地球ひろばが所管しています。 <http://www.jica.go.jp/hiroba/menu/reporter/index.html>
本事業について詳しく知りたい、レポーターの話を知りたいという場合には、
JICA地球ひろば市民参加協力促進課(03-3269-9023)までお問い合わせください。



<http://www.jica.go.jp/hiroba/menu/reporter/index.html>



**なんとか
しなきゃ!**
見逃ごせない 55億人

